

---

# キセキの錬金術師

ruin

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キセキの錬金術師

### 【Nコード】

N8645P

### 【作者名】

ruin

### 【あらすじ】

これはkannonの登場人物等のファンタジーの世界での物語です。原作は殆どありません。主人公は半オリ主で、ある出来事により女性化した祐一です。

この物語は主人公は強者で女性化です。ところによりご都合主義です。

\*端末の都合により、一話が短いです。  
キーワードが増えました。 3月21日

はじめに&設定(前書き)

3月15日加筆

3月15日あとがき加筆

## はじめに&設定

これは、Kannonの登場人物等のファンタジーでの物語です。  
ファンタジーなので、原作はほぼないです。

主人公は半オリ主です。

kannonの主人公である、相沢祐一あいざわゆういちがある出来事により、女性化した相沢祐依あいざわゆうえです。

魔法がありますが、生活は基本科学です。魔法は主に戦闘です。  
科学は分野によっては、現代並みです。

魔法は基本テイルズです。

Fateやテイルズ等の要素や設定、キャラがです。

今後、増えるかもしれません。

ネタは、色々だすつもりです。

主人公は基本強者であります、最強ではありません。  
師匠達の方が強いです。

キャラ設定等は作中やあとがき等で、追々やっていきます。

魔法の属性は、一人に得意属性が一つで、得意属性ほどはチカラがないけれど、ほかに2・3種類使える人もいます。

魔石などに、属性の魔力を込めたものを使えば、その込められた属性の魔法を訓練しだいで、使うこともできます。

## はじめに&設定（後書き）

主人公の設定の現まとめが、33話の後にあります。  
ネタバレもあります。

第2部の後にやるつもりでしたが、殆ど書くことがなく、話のあとがきなどで、やっていましたが、まとめてみました。

## 1話

雪が降っていた…

どんよりとした雲が空を埋め尽くしていた…

駅の改札は疎らに人をはきだしていた。

改札の前の時計台の下のベンチに座っている少女が一人

side?

?「…遅い」

従姉妹のと待ち合わせは、一時

現時刻…三時

ふと近づいて来る二つの足音

不良A「よお 雪の中で待ち合わせかい?」

不良B「待ってるだけなら、俺達と遊ばない?」

(ただのナンパか…)

?「…」

不良A「おいおい 無視してんじゃねーよ」

不良B「俺らと楽しいことしよーぜ」

?「…仕方ない」

side-out

路地裏に入っていくとついて行く不良ズ

不良B「おっ いいねえ 積極だねえ」

？「此処なら見られないわね」

不良ズ「？」

少女が地面に手をつけた

パチンっ

音と共に少女の手には石の大剣があつた…

不良ズ「…は？」

？「今、私は機嫌が悪いのよ。従姉妹に二時間も待たされて」

不良ズが惚けていた次の瞬間

少女に吹っ飛ばされていた

？「ったく…」

少女はため息一つをつき踵を返し、待ち合わせ場所に戻って行った

## 1話（後書き）

作者「…っは 主人公の名前が！」

？「私の名前がどうして、出てないのかしら？」

作「何故此処に！」

？「愚者にOHANASHIするためかしら」

作「すみませんでした！次回こそキチンとします」

？「じゃあ 今回は見逃してあげるわ 次はないわよ」



## 2話

side名雪

（もう着いてるかな？）

白い息をはくと、自動販売機で缶コーヒーを買う

（いたら、渡して謝ろう）

side？

再びベンチに座っていると、近づいてくる足音が一つ

見上げてみるとトロンと寝むそうな目をした少女がいた

名雪「雪積もってるよ」

？「そりゃ　こんなに待たされれば、雪ぐらい積もるわよ」

名雪「えっ　今何時？」

？「三時半」

名雪「…え」

時計台を見る　腕時計　時計台

名雪「……ごめんなさい。時計が遅れてました」

？「名雪ちよつとOHA「これ、遅れたお詫びだよ」」

？「スルー?!　ま寒いから、早く家に連れていってくれたら、許してあげるわ」

家に向かい歩いている途中で名雪が思い出したかのように

名雪「そういえば、私の名前覚えてる？」

？「私が七年ぐらいで忘れれると思う？そっちこそ覚えてる？」

名雪「うん」

？「それはどっちの返答なの？」

名雪「え？　なにが祐依？」

祐依「…変わらないわね　名雪」

名雪「？」

祐依「ま いいわ。これからよろしくね名雪」

名雪「うんっ　こちらこそよろしくね祐依」

## 2 話（後書き）

作「約束通り名前をだしたぜ！」

祐依「遅い！」

作「…名前？それとも名雪？」

祐依「どっちもよ」

作「そいえば、雪の中で三時間も待ってたのに平気そうだね」

祐依「話そらしたわね…まいいわ。それは何人もナンパをのしってたからね」

作「恐っ」

とつ　とにかくまた次回

### 3話（前書き）

従姉妹の名雪と再会し、やっと居候先へ向かう祐依 待ち受けているものとは！

### 3話

side 祐依

祐依「名雪と取り留めもない話をしているうちにどうやら着いたようだ」

名雪「誰に言ってるの？」

祐依「こつちの話よ」

名雪「？」

とりあえず寒いので、家に入ろうと、ノブに手を伸ばそうとしたらガチャ と開いた

？「あら 祐依さんいらっしやい」

ドアを開けたのは、名雪とそっくりな姉妹といっても過言ではない女性

祐依「おひさしぶりです。秋子さん」

そつこちらの女性は家主であり、従姉妹の名雪の母親である、私からみれば叔母でにあたる 水瀬秋子 である。

秋子「綺麗になりましたね」

祐依「ありがとうございます。けれど、秋子さんは変わってませんね。お変わりなくをそのまま使うとは思いませんでしたよ」

秋子「あらあら ありがとうございます。寒かったですよね？どうぞ中に」

祐依「おじやまs「違いますよ祐依さん。」…え」

秋子「今日から暫くとはいえ、家族なんですから」

祐依「… あっ ただいま。秋子さん」

秋子「おかえりなさい。祐依さん」

### 3話（後書き）

作「あつ 途中から名雪を忘れてた」

名雪「くくう」

作「あゝ寝ちやつてるよ…」

次回 名雪は起きているのか？！

## 4話

side 祐依

宛がわれた部屋を簡単に整頓し、リビングに行くと、名雪がソファで舟を漕いでいた。

祐依「あら？ 秋子さん 真琴は散歩か何かですか？」

秋子「真琴なら今美汐ちゃんの家遊びに行ってますよ」

祐依「真琴とは、幼少時代にものみの丘で怪我をしていたのを祐依が保護した妖狐の子供である」

秋子「あら 祐依さん誰か居らしましたか？」

祐依「いえ なんでもありませんよ。秋子さん」

名雪「くう」

祐依「ところで、秋子さん 名雪は大丈夫ですか？ずっと寝てますけど…」

秋子「あらあら」

秋子さんが入れてくれた紅茶を手に真剣な声色で

祐依「…秋子さん 夜にお話があるんですけどいいですか？」

秋子「了承」

祐依「では、名雪達が寝たら、お話します。」

秋子「寝たら、ということとは、あちらですか？」

祐依「ええ 彼から情報があつたので、それと名雪達には…」

秋子「了承 大丈夫ですよ。祐依さんが予め言っていた事しか伝えてません」

ピンポン とインターホンが鳴った。

秋子「あら 真琴 送ってきてもらったのかしら？」

と玄関に向かう秋子さん。



#### 4話（後書き）

作「名雪寝たまんまだったね」  
祐依「さすがわ、眠り姫だわ…」

## 5話

side 祐依

ガチャ

秋子「あら おかえりなさい真琴 それといらっしやい美汐ちゃん」  
真琴の友達が送って来てくれたようだ。

祐依「真琴と遊んでくれた人なら、挨拶ぐらいしますか」

そう言つて、玄関に向かうと

真琴を抱いた少女が秋子さんと話していた。

美汐？「あ」

こちらに気づいたみたい。

美汐「はじめまして、真琴の友達为天野美汐です」

礼儀正しく挨拶をしてきた。

祐依「こちらこそ、はじめまして、暫くこの家に居候する相沢祐依です。これから宜しくね美汐ちゃん。それと久しぶり真琴」

ピョン

祐依「つと」

秋子「あらあら」

真琴が美汐から飛んできた。

真琴を受けとめて、頭の上にのせる。ご機嫌なようで、嬉しそうだつた。

それから少しの間話していたが、暗くなり始めたので、美汐が家に帰りお開きになった。

秋子さんが、歓迎会をしてくれるそうなので、準備ができるまで、真琴と自分の部屋で戯れていた。

祐依「真琴 元気にしてた？」

コク フルフル

祐依「そっか… 寂しかったのね」

コクコク

祐依「じゃあ 歓迎会まで遊びましょうか」  
コクコク

名雪に呼ばれるまで、真琴と遊んでいました。  
名雪「祐依、準備できたよ」

## 5 話（後書き）

祐依「今回のゲストは美汐ちゃんと真琴です」

作「セリフとられたっ！」

美汐「はじめまして、真琴の親友です」

作「スルー?!」

フルフル

作「…真琴ありがとう」

祐依「狐に慰められてる…」

美汐「真琴は優しい子ですから」

祐依「あゝ 作者はほっときましょ」

美汐 祐依「…では また次回」

## 6話（前書き）

真琴の特技が！

## 6話

side 祐依

名雪に呼ばれ、真琴を頭の上にのせたまま、リビングのドアを開けると

パアンツ とクラッカーが鳴り、突然の音に真琴が驚き、頭の上から落ちそうになっていた。

名雪「ようこそ 水瀬家へ」

秋子「あらあら じゃあ始めましょうか」

テーブルの上には和洋中様々な料理があった。

祐依「これ、全部あんな時間で作っただんですか？」

秋子「いえ 下拵えは、予め済ましていましたし、名雪にも手伝ってもらいましたから」

祐依「それにしても、三人じゃ多すぎませんか？」

秋子「あら 真琴も居ますよ」

祐依「真琴が食べるのは無理があるでしょ」

名雪「えっ 祐依知らないの？」

祐依「何？」

秋子「真琴」

コク ボンツ 煙が晴れると女の子がいた…

祐依「真琴 人に変化できたの？」

真琴「そーよ これぐらい楽勝よっ」

秋子「祐依さんが戻られてから、頑張っていましたから。学校にも通ってますよ」

祐依「そうなんだ」

頭を撫でると嬉しそうにしてくれた。

真琴「あう」

秋子「何もない時等は狐の姿が多いですけどね」

真琴の話等をしながら、歓迎会は過ぎていった。

## 6話（後書き）

「歓迎会にて、名雪が途中で寝ぼけて「わたし ゆえもたべれるよ」」と言われ、ハリセンではたいした私は、悪くない！ by 祐依

作「はい 今回は真琴ちゃんが来ています」

真琴「あう 来てやったわよ」

作「ところで、名雪さんは、いつもあーなの？」

真琴「そーなのよ、寝ぼけてはっかで、困ってるのよ！」

作「まあ これからは祐依も居るし、大丈夫じゃない？」

では また次回



## 7話

side 祐依

師匠直伝の結界を張って準備万端

秋子「この結界は？」

祐依「師匠の一人に教えてもらったものの一つです。さて、この街に來た理由ですが、一つは、両親がこの街に家を建てているのは、知っていますか？」

秋子「ええ 姉さんから聞いています。」

祐依「両親は、仕事が一段落したら、来るそうですが、私に街に早く慣れて欲しいのと、私の実家の表はご存知ですよな？」

秋子「表ですか？ 最近世界規模になったAG“相沢グループ”のことですか？」

祐依「ええ 私が関わってからの成長なんですけど、それと同時に自然の保護と地元地域への影響に注意するようにしたんです。それで、私がこの街の様子を調べる。これが表の理由です。裏の理由の前にこれを」

三日月型のネックレスを渡します。

祐依「これは、身につけている間は情報保護で、外すとその情報がこれに移り思ひ出すことができなくする情報保護に特化した魔法具です。まあ私か、私の師匠ぐらいしか解けません。なので、これから話すことは他言無用でお願いします」

## 7話（後書き）

端末の都合で次に続きます。

作「祐依の紹介してなかったの…」

髪と眼は黒、変えようとすれば、変えられる、

肩胛骨あたりまで伸ばしており、大抵ポニーテールの様にしている

大抵 眼鏡…をしている

身長は173でスタイルはスレンダーなモデル並

体zy ガスツ …」

祐依「何言おうとしてたのかな？」

作「ひい すみませんでした！」

祐依「ちよつとOHANASHIしようか」

作「能力等はまたいつか！では また次回」

祐依「あつ まちなさうい」

## 8 話（前書き）

今回から、主観の人の名前を表記を止めます m ( | ( m

## 8話

side 祐依

「では、裏の理由ですが、相沢本家と一部の分家は、魔法協会の独立門外特別顧問なんです。協会内の不正がないか観察する。協会内で、影響を一切受けない。ある意味独立した監査官です」

秋子「そんなものが…」

「さらに言うと、相沢本家のさらに一部の者と正統後継者の協力者しか知らない闇。」

【魔術師殺し】 【衛宮を継ぐもの】 …それと最近になって増やした【黒猫】 【黒き月】」

秋子「まさか…それは作り話では…」

「いえ 私 相沢祐依が現正統後継者。協会内外の魔法関係者が違法を犯した場合肅正する。トップしか知らない断罪者」

秋子「祐依さんが…」

「そういう理由でこの街に違法錬金術師がいると情報が協力者からありまして、その違法者は国家錬金術師の二つ名を不正使用…」  
固く固く拳を握り

「私に錬金術と国家錬金術師に必要な、色々なことを教えてくれた先生。私の罪… その先生の二つ名【ゼロの錬金術師】を語る…違法者がいるとわかったので、私が早く来たという訳です」

暫しの沈黙の後

秋子「…そうですか。そういえば、祐依さんの二つ名は何ですか？」

「私のですか？ かつての【奇跡の錬金術師】と先生のを継いで【創生の錬金術師】です」

秋子「かつてとは？」

## 8話（後書き）

m( \_ \_ )m

端末の都合により続きます。

作「祐依の秘密が明らかに！」

祐依「まあ 居候先の家主さんには、秘密にできないしね。危険でもあるし。」

作「今回で、チカラの一つ錬金術が判明しました」

祐依「あら どうかしら？」

作「と言うことはまだ秘密が？」

祐依「ふふ どうかしら？」

作「とつ とにかく武器は基本は錬金で？」

祐依「ええ そうね。出したのは、ただの石の大剣だけね」

作「と言うことは、様々な武器を錬金できると？」

祐依「ふふ さあ どうかしら」

作「…ではまた次回」

## 9 話（前書き）

女の子は秘密がいっぱい（笑い）

## 9 話

side 祐依

「私が女性になれば、かつて、奇跡もどきを起こした私が授かっていた筈のものです。…錬成陣もなく、補助もなく、致命傷を治した」

秋子「そんな…何も使わずに？」

「はい…試験には既に受かっていて、二つ名を決める前にあった為、そのことを知ったトップが認名する数日前に、世間でいう事故がありました」

秋子「事故ですか？」

「いえ 本当は私が実験で、古代魔法等を、応用して賢者の石を作ろうとして制御ができず暴走して、…先生が私を庇って 亡くなり、賢者の石モドキが、有り得ない魔石が錬成されました。私はそれ等を使い人体錬成をやりました。結果は失敗 先生の自我を多少持つバケモノが錬成され、私を襲いました。私を殺す直前に先生の自我が上回り、錬成陣を使い自身を魔石へと錬成しました。」

秋子「…」

「それが、このイヤリングについている賢者の石です。話は戻りますが、私は石を手にした途端に気を失いました。目を覚ますと一般に言う神界にいました。」

秋子「なっ 神界ですか?!」

「はい そこで私は体が女性になっていました。そして私の前に現れた神の一人?がこう言いました。『お主の体の変化は人が神の域を犯した罰じゃ。』」

## 9 話（後書き）

> (――) < すみません  
また続きます。

作「祐依のさらなる過去が！」

祐依「まだ 私は……」

作「後書きまで重くなりそうなので！祐依の基本武器を発表します  
！」

misfortune 某掃除屋の装飾銃

happiness 上の白い版 主に表で使います

fault 魔刀です。魔に関するものを切ると霧散し吸収し任意  
で放つ事ができます

illusion 大剣でルーンが刻まれており、幻を見せること  
ができる

demise レイのハルが使う剣の魔改造版 十種類以上の形  
態を持つ‘上二つも含む’基本形態は日本刀です

pain ライフルと機関銃に変化する魔銃

他にもありますがそれらは使用したら、随時紹介します。

祐依「さらつと、賢者の石を持ってるわね……」

作「まあ 無茶をさせない為？ と忘れない様に重要なものと考え  
たら……」

因みに名前も先生の名前の里依<sup>りえ</sup>から一字を貰い、罪を忘れないよう  
にしています」



## 10話（前書き）

F a t e が や っ と 少 し 関 係 し て き た。

## 10話

side 祐依

秋子「神ですって？ それで罰とは？」

「それは『普通は、消滅するだけなんだが、お主は、その年で神の域にまで達するその才能。そしてお主が持つ可能性と‘チカラ’。それ等を持つお主を死なすには惜しいと思うものが多くての。お主の描く軌跡を見たくてなあ。お主の体を残そうとしてみたんだが、それが精一杯でな』と。女性になったのは、神の域を犯した罰なんですよ」

秋子「……そうだったんですか」

「それで 私はそこで英霊となった先祖のエミヤシロウが、神の一人に座から呼ばれ、私には、シロウさんと同じ‘チカラ’があつたので、色々と教えてもらいました。」

秋子「英霊とは、何なんですか？」

「簡単に言えば、過去に功績を成し、英雄等と呼ばれたもの達です。」

（お伽話のような話になって、秋子さん 少し呆然としていますね）

秋子「話は少し戻りますが、祐依さんの‘チカラ’とは何なんですか？ 錬金術や魔術とは違うものなのですか？」

## 10話（後書き）

次回 祐依の‘チカラ’を大公開！

## 11話（前書き）

チカラの一つがまた一つ判明！

## 11話

side 祐依

「チカラ」ですか？　まず シロウさんと同じチカラというのは、遙か昔に魔術師が密かに行動していた時代にいた魔術師が持っていた‘魔術回路’と呼ばれる特別なもので、私は、直系の子孫でも、持っているのも、おかしいぐらい希有なもので、もう殆ど持っている人がいないそうなので、詳しい説明は割愛させてもらいますが、簡単に言くと魔力を体に流すためのものです。それと、シロウさんとほぼ同じ素質も持ってたんです」

秋子「素質ですか？」

「ええ シロウさんは‘剣’という、剣に関するものなら、全て解析でき、それを複製できるそうです。それと強化という魔術です。」

秋子「私達が使うものとは、違うのですか？」

「はい 私達の強化は魔術回路に魔力を流し体を文字通り、強化します。例えば、身体強化なら、目を強化すれば、遙か遠くまで見分けることができ、足を強化すれば通常より動くことができます。全身を強化することも、一部分だけを強化することもできます。それと物に魔力を通すことで、物を強化することもできます。物に魔力を纏わせるのではなく、中から強化するので、物の性質を強くします。違いはまだあるんですけどね…」

## 11話（後書き）

アーチャーことエミヤシロウの後継者？！

この物語ではシロウは生前に結婚し、子供もいます。その子孫が相沢祐依です！

因みに相手は遠坂凜です。

なので、世代を遙か越えて祐依に魔術回路と何故か刻印があります。凜の魔術で、素質を持つ者に現れるという風にしてあったということをお願いします。

> ( | | ) <

チカラの説明はまだ続きます。

## 12話（前書き）

驚きの祐依の真のチカラ！

## 12話

side 祐依

「そして、私の‘チカラ’は、？リンク？です。」

秋子「それは、一体？」

「私には、魅きつける何かがあるらしく、色々なモノ達と契約や交友を結んでいます。そして、相手が私を認め、相手に許可を貰えば、その相手の持つチカラを借りることができる。けれど、技や術、そのモノの技術等は、修行しなければ、使いこなせませんが…そうして認め許可を貰った相手と？リンク？しチカラを使うことができます。まあ 借りると言いましたが、実際は共有のようなもので、相手に不都合は一切ありませんし、相手のそれ以上はできませんけど… まあ 複数の応用でやりようによつては、越えることができる時がありますけど… それにこちら側からも共有してますが…」

秋子「因みに、今はただリンクしてるのですか？」

「ああ いい忘れましたが、常にリンクしているのではないんですよ。あと現在リンクできるのは、契約を結んでいる英霊達と各精霊達で、交友があるのは、天界と魔界と妖界と地獄と… まあ この世界以外となら、殆ど何かしらのつながりがありますよ。 なので、？リンク？を使えば、大抵のことはできますよ」



## 12話（後書き）

作「…何このチート」

祐依「色々あったのよ…おかげで、いろんな名を付けられちゃったのよ…」

作「ええ〜っと まあ 交友が広いければ、楽しいこともあるさ  
d」

祐依「そりゃ 色々あったわよ… 皆 根は良いのよ…」

作「話は変わるけど、どうして祐依が女性になったのに、基が祐一  
って親はわかったの？」

祐依「ああ〜それは、バケモノが暴れた騒ぎで私のいた所に、親が  
駆けつけてきて私が先生の石を持った途端に閃光が走って、そこに  
いたのが私で、性別以外が調べてたら同じだったらしいのよ」

作「へえ〜 そうだったのか〜」

次回から どうして、こんなにもつながりがあるのか?!を、やって  
いきたいと思います。

# 13話（前書き）

半ギヤグ？

## 13話

〈回想〉

それは、私がシロウさんに修行してもらっていたある日、転送魔法に巻き込まれて、気づいたら、大自然の中でした。

「あら 此処はいつたい？」

不思議に思った途端にすぐ目の前を一筋の光線が通り過ぎ…

ドオオオオオン

つと爆発し、多少巻き込まれて吹き飛ばされ、見てみるとあつた筈の自然が消えていました…

私は、光線が来た方へ行つてみると、二人が闘っていました。周りをまったく気にもせず…  
そして、今もなお…

「あいつら…ね…」

私は精霊を通じて、自然に対し、以前より大切に思う様になっていたので、

ブツン

切れちゃいました

次の瞬間には、体中を強化し、手には伝授された《妖刀虎竹刀》を…  
精霊達の力も借り、二人を虎竹刀でのし、二人揃って正座させ、  
長々とOHANASHIをしていると

? A 「あ あの」

「なあに? (笑顔)」

? S 「ひいつ」

すっかり二人の心が一つになっていました (笑)

「何で、闘ってたの? それと、あなた達の名前は?」

? B 「はっ はい 私の名前h「貴様何をしている!」…」

### 13話（後書き）

#### 武器紹介

妖刀虎竹刀 | 虎のストラップがついてる 一度狙われたら、逃れる術はなく、鎮圧される。ギャグ補正があり、ある意味最強の武器である。

? Bが名乗ろうとしている時に現れたモノ達は?

? | Sの正体とは?

次回に続く!

## 14話（前書き）

？、Sの正体はなんと！

## 14話

（回想）

声がした方を見てみると

大勢の神や天使や精霊・魔王や悪魔や魔物、その他多数がこちらを睨み、戦闘体制に入ろうとしています。

？「S」「おつ おまえ達！？」

「知り合い？」

？「S」「はっ はい。部下と仲間たちです。」

？A「おまえら、至急武装解除しろ！」

？B「こつちもだ、早くしろ！」

部下？への命令をする二人

訝しげな顔をしながらも従う部下？「S

「まあ 事態の把握のために、改めて聞くけど、何者なのあなたたち？」

？A「私は、天界のトップをやっています」

？B「私は、魔界のトップをやっています」

「え… とにかく、今どうなってるの？」

天「えと… 本当なら、天界と魔界のそれぞれに属するモノ達も含めた、大戦争が勃発する筈でしたのですが…」

魔「先んじて、私達が闘っていた所にあなたが…」

「へえ あっ 私の名前は相沢祐依ね」

天「祐依さんが私達を止めて、今遅れていた部下達が来たというわけです」

「で、今からやるわけ？」

魔「いつ いえ 滅相もございません！ なっ なあ！」  
天「はっ はい もちろんです」  
「だけど それで部下や仲間達は納得するの？」



## 14話（後書き）

祐依「どうしよう 天界と魔界のトップにOHANASHIしちゃった…」

作「大丈夫 自分（の運）を信じて！」

祐依「うん やってしまった過去はどうしようもないし、あとは天に祈るだけよ！」

作「でも その天を…」

祐依「orz」

さあ いったいどうなるのか！？ そもそもどうにかなるものだったのか！？

## 15話

く回想く

「で 大丈夫なの？」

魔「あの それで、もしよかったら、各代表を呼ぶので、話合いの司会をやってもらえませんか？」

天「私からもお願いします。トップの私達を鎮圧したその腕をかしてください」

部下1「え お二人を倒した？」

部下2「そんな馬鹿な！」

部下3「しかし、あの方がたは嘘は決してつかない」

部下達も聞いていたのか、驚きを隠せないでいる。

部下・s「私たちからも、是非おねがいします」

（えく どうしよう？ とゆうか何で皆私を慕うの？）

と内心で葛藤をしている祐依だった。

そうして、話し合いが行われ、時には虎竹刀を片手にOHANAS HIしたりと紆余曲折あったものの、話し合いをして、意気投合し双方の仲がよくなり、争いはしないと私に誓いました。（何故、私？）

そして、ある期間に一度

親善をはかることに、その際は、呼ばれそうですが…

## 15話（後書き）

作「ある意味人間がトップに!？」

祐依「それは、どういう意味かな？」

作「ちよっ その手に持つてるのは…」

祐依「happiness」

パン！

作「わあ〜」

祐依「まだ 少しづづきます」

## 16話（前書き）

増えるチカラ&amp;リンク&amp;仲間

あとがき、一部訂正 3月18日

## 16話

（回想）

「なんでさ…」と某弓兵の口癖を…

今 私達は大宴会中です。

数時間前までは、互いに殺し合うほど敵対していた筈なのに、今は、あの場にいたモノ、いなかったモノ、全員が集まり仲良く飲んでいきます。

特に天魔のトップ達が意気投合？して慰めあっています。

（そんなに、辛かったのでしょうか？）

そんな中 私は、精霊や英霊、天使、悪魔、魔物、妖怪、幽霊など様々なモノ達と契約したり、神や魔王等に認められたりして、大量の仲間を増やし、‘リンク’を繋げて貰っています。

そして、修行の約束を取り付けておきます。

皆さんに色々な二つ名がつけられています…

【平定者】 【求導者】 【代行者】 【救世主】 … e t c

まあ いき過ぎと思うのですが、相応の事を成したらしいです。

“ 天魔を平定し、道を示し、様々なチカラを持ち、失われる筈だった命を救った ”

そこまで、言われて断れるでしょうか？ いや、断れない。

契約者達にチカラの一部を賢者の石にとりあえず、宿して貰い、召還やチカラを借りれる等、色々できるようにしておきます。

(あとで、魔石とかに整理しますか…バングルや指輪にすれば便利かしら?)

## 16話（後書き）

作「祐依のチート化が…」

祐依「まあ 断るのも失礼だし、どうせなら、使いこなしたいし」

作「いったいどうなるのやら？ あっ とりあえずどういう風にチカラを分けるの？」

祐依「えゝ 賢者の石を媒介にペンダントを作って、指輪は…別にいいかしら。戦う時になるべく手は自由におきたいし。」

## 17話（前書き）

今回から、話が進みます。

秋子さんに説明をした次の日です。



## 17話

side 祐依

ベットの中でゆっくりしながら、

（さて 彼とは、今晩会いましょうか。そこで打ち合わせをしますか）

『今晚十二時 ものみの丘に』 と連絡をしておきます。

暫くすると、隣の名雪の部屋から、騒音が響いてきます。

「なっ 何事?!」

急いで、名雪の部屋に入ってみると、そこには…

大量の目覚まし時計に囲まれながら、スヤスヤと眠る従姉妹…

「なんでさ…」

騒音を止めるために、目覚ましを止める。その数37個…

「名雪起きなさい!」と揺さぶるが…

名雪「だおゝ地震だおゝ」

とちつとも起きない。意地になって揺さぶること三分…

名雪「くうゝ」

イラッ

「しょうがない」

と手にするのはハリセン。

思い切り降りかぶり、頭へ！

パシーーンっという音になり、名雪に反応が！

名雪「ううゝん あっおはよう祐依」

「おはよ 名雪 あんたこの目覚ましは何なの？」

呆れながらも尋ねてみると

名雪「私朝が弱いから…」

「で 増やしていったらこうなつたと」

名雪「ううゝ」

「あんた もう少し周りに気を使いなさいよ。私の部屋まで響いてくるんだから」

名雪「がんばるよゝ」

ため息をつく私…

## 17話（後書き）

作「前回である程度の説明が終わったので、今回から、話が進みます！」

祐依「長かったわねえ」

作「でも まだ シリアスやテイルズ要素がでるまで、かかりそう……」

祐依「確かにまだ出てきてないわね」

作「今のところ、戦闘まで出る予定がないけど、その戦闘がいつになるのやら……」

祐依「まあ がんばって」

作「本文がこの量が端末の都合でほぼ限界orzだから」

祐依「ホントに短いわね」

作 orz

## 18話（前書き）

名雪を無事起こし、朝食にて…

## 18話

side 祐依

「……………名雪 それはいつたい？」

名雪が食べているのはイチゴジャムを塗ったトーストだが…

パンとジャムの比が1:2なのである…

名雪「イチゴジャムおいしいよ」

「聞いてないわね。見てて胸ヤケがしてきたわ… 真琴これがこの街の普通なの？」

真琴「ちがうわよ！名雪がおかしいのよ！」

名雪「だって、イチゴジャムなんだよ」

「答えになってないわよ。それと休みなのに目覚ましかけてたのは、何かあるんじゃないの？」

名雪「そうなんだよ。部活があるんだよ」

「時間は大丈夫なの？」

名雪「わっ 時間がないよ」

「間に合うの？」

名雪「100Mを七秒で走れば間に合うよ」

「それ 世界新よ」

名雪「ファイトだよ」

そうして 名雪は慌てて出ていった。

全くそうには、見えなかったが！

「真琴は今日は何かあるの？」

真琴「午後から美汐の家に行くぐらいかな」

「じゃあ 遊びに行く時に商店街まで案内してくれないかしら？」

真琴「まかせなさいよ！それぐらい楽勝よ！」

「じゃあ お願いね真琴。肉まんぐらいなら、奢るわよ」  
真琴「あう」

そう言って、頭をなでると嬉しそうにしていた。

## 18話（後書き）

作「真琴はちよつと口が悪いけど、祐依が大好き（like）です」

祐依「そう言えば、真琴は部活はやってないの？」

真琴「あうゝだって遊べなくなっちゃうし、勉強でいっぱいよ」

祐依「そうなんだ…じゃあ、今度見てあげるわ」

真琴「祐依ってそんなにできるの？」

祐依「私を誰と思ってるの？」

真琴「？ 祐依は祐依でしょ？」

祐依「いや 間違っではないけど…まあ 大抵のことは、教えられるわよ」

作「真琴は、祐依が国家錬金術師とはしりません」

では、また次回

## 19話（前書き）

商店街と言えは！  
アイツが走ってくる！



## 19話

side 祐依

昼食後、真琴と一緒に出かけると、道端で会う人が真琴に話しかけて来ていた。

「真琴って、人気者なのね」

真琴「あうう 狐の姿の時によくお世話になってたの」

「へえ そうなんだ。 あっ此処が商店街ね」

真琴「そうよ。じゃあ 真琴は美汐の家に行ってくる」

「ええ 気おつけてね」

商店街に入ると、活気の良い声がしていた。

「とりあえず、一周回ってみますか」

半分程回ったところで、後ろから

？「うぐうう その人どいて」

と叫びながら、走ってくる少女。

避けようとしたら、その前数Mで派手に転けた。

？「うぐうう どいてって言ったのに」

「私は関係ないわよね…ところで、何か急いでる様だったけど？」

？「そうだった！こっちに来て！」

「え？ あっ ちよっと!？」

手を引かれ商店街を疾走させられた。

商店街から離れたところで、やっと止まり

？「うぐう 助かった」

「一体なにがあつたの？」

？「ボクは追われてたんだよ」

「何か事件に巻き込まれたの？」

？「うぐっ そっそれは…」

「もしかして、その手に持っているのが関係する？タイヤキ屋の紙袋が…」

？「うぐっ 仕方なかったんだよ」

## 19話（後書き）

作「中途半端になってしまいました。名前も出せませんでしたし…次回はきつと出します」

## 20話

side 祐依

？「うぐぐだつてお金を払おうとしたら、財布がなかったんだよ！」  
「で 盗つて来ちゃったの？ 事件に巻き込まれたんじゃないで、  
起こしてきたわけね…」

？「うぐう」

「はあ 仕方ないわね。今回は払つてあげるから。謝りに行くわよ」  
？「ごめんなさい。あつ ボクの名前は月宮あゆだよ」

「私は相沢祐依よ。あゆあゆ。それと、謝る相手も違うわよ」

あゆ「あゆあゆじゃないよ！ って、もしかして、祐依さん昔に会  
つたことが…？」

「ええ あるわよ」

あゆ「祐依さんっ！」

と言いながら、飛び込んでくる。

「はっ 殺気！」

ひらりと避ける私。

ドンツと木にぶつかるあゆ。

あゆ「……酷いよ！避けるなんて！」

「つい 殺気に体が反射で」

あゆ「殺気なんて、だしてないよ！」

「ごめん ごめん。ところで、木にぶつかって、痛くないの？」

あゆ「っ！ 痛いよ」

「遅いわね…」

鼻を赤くしながら、涙を滲ませるあゆ。

ドサツと木から雪が落ち  
？「きゃっ」

## 20話（後書き）

作「えゝ今日のゲストは窃盗犯のあゆさんです」

あゆ「違つよっ！後でちゃんと払うよ」

祐依「私がね…」

あゆ「うぐ ごめんなさい」

作「まあまあ ところで、二人はどう知り合つたの？」

あゆ「昔にボクが泣いてたのを、祐依さんが慰めてくれたんだよ」

祐依「あれは、俯いてたから声をかけたら、泣きだしちゃって、周  
りから…」

作「要するに、巻き込まれたと」

祐依「ええ 私が泣かしたって、周りがヒソヒソ話をされて、子供  
の頃から、背が高くて男の子っぽい格好もしてたから、なおさらね」  
作「そつ それは… まあ元気出して」

最後の声の主は次回で

因みにこの作品の少女たちには、祐依になってから出会っています。

## 21話（前書き）

すみません 長らく休載してしまって、理由はあとがきで、報告します。

## 21話

side?

「久しぶりの外出で、色々買いすぎたかな？」

そんな訳で、普段は病気であまり外出ができないので、まとめ買いをしたら、少し買いすぎてしまいました。  
ちよつと重いので、通行の邪魔にならないように道のわきの木の下で、休みましょう。

「えう？」

木のむこう側で、女性と子供が何か話してますね。

あゆ「祐依さん！」

「へえ 女性は、祐依さんって名前なんですネ」

あ 子供が、祐依さんに避けられて、木にぶつかりました。  
あんなに強くぶつかって、大丈夫なんでしょうか？

- - -ズツ

「えう？」

何の音でしょうか？  
何かがずれるような…

- - -ドサッ



「きゃっ」

side 祐依

あゆと久しぶりに再会して、ふざけていたら、あゆが木に特攻を仕掛けて、誰かに迷惑がかかってしまった。

あゆ「特攻なんかしてないよ」

「心を読まないでよ」

あゆ「声に出たよ!」

「…さてと、助けに行かなきゃ」

あゆ「無視しないでよ」

「その君大丈夫かしら?」

?「…えう?」

「雪がかかちゃったぐらいで、怪我はないみたいね。よかった」

?「えう　大丈夫です」

「荷物は大丈夫?　あら　紙袋が濡れてるわね」

?「あ　それぐらい平気です」

「でも、途中で破れたら、大変だから任して」

ブロックの上に紙袋を置いてもらい

- パンツ

サクツと錬金術で、元通り

「「?!」」

あゆ「すごいよ！祐依さん 錬金術使えたの？」

「まあ これくらいなら、できる人も沢山いるんじゃない？」

？「ありがとうございます。私、美坂栞と言います。」

「私は、相沢祐依よ よろしくね。栞ちゃん」

あゆ「ボクは月宮あゆだよ」

栞「そういえば、あゆさん さつき木に飛びついてましたけど、木になにかあったんですか？」

あゆ「あれは、祐依さんが避けたからだよ」

「あれは、殺気に身体が反応して」

あゆ「殺気なんか出してないよ！感動の再会だったのに、避けられて木にぶつかるなんて、聞いたことないよ！」

「やったわね 世界初よ」

あゆ「うれしくないよ！」

・フフフと笑い堪えているような声がして

栞「お二人とも仲がよろしいんですね」

「ええ コンビで、M1目指してたから」

あゆ「目指してないよ！ それにさつき再会したばかりだよ」

栞「M1が終わってしまい残念ですね」

「そうなのよね また何かやらないかしら？」

栞「がんばってください。応援してます」

「ありがとう。No1目指して頑張るわ」

あゆ「ねえ 二人ともボクの話聞してる？」

「・とまあ、戯言はおいといて」

あゆ「息が合いますじゃない？ 初めて会ったんだよね？」

「・ええ 初めてよ（ですよ）」

あゆ「……」

栞「あつ 長く話すぎちゃいましたね。そろそろ戻らなくちゃいけないので、また」

「ええ また縁があつたら、会いましょう」

栞ちゃんとの別れ際に何か澱みのようなものを一瞬感じたが、次の瞬間には、消えていた

「気のせいかしら」

あゆ「何が？」

「いや 何でもないわよ。 さあ タイヤキ屋さんに謝りに行くわよ」

あゆ「うぐう はい…」

そう言つて、商店街の方へ歩こうとすると

あゆ「ねえ 祐依さん 商店街への道覚えてる？」

「…は？ あゆあゆは覚えてないの？というか地元でしょ？」

あゆ「こんなところ初めて来たんだよ」

「はあ 此方よ」

あゆ「すごい 覚えてるの！？一回無理やり連れて来ただけなのに」

「これくらい、覚えてるわよ。それにわからなかったら、知り合いの魔力を探すなり、携帯をかけるなり、色々あるでしょ」

気を取り直して、再度商店街へ向かう

## 21話（後書き）

祐依「じゃあ どうして、休載してたのかしら？」

作「ええ 病名は面倒なので、端折りますが、肺の病気で入院して  
いました。一応退院しましたが、無理は厳禁なので、出来る時に更  
新をするので、よろしくおねがいします」

## 22話

side 祐依

「さてと、タイヤキ屋さんはどこにあるの？」

あゆ「え」と、こつちだよ」

商店街に戻って来て、タイヤキ屋さんに謝罪のために向かっています。

あゆ「あつた！ あそこのお店だよ」

屋台のお店がでている

「さあ 謝りにいくわよ。それと、できるだけ、私に合わせてね」

side 店主

「くそっ 今日もまた嬢ちゃんにやられちゃった。今度は問答無用で、警察に通報するか…」

あの嬢ちゃん、タイヤキが好きなんだろうけど、さすがにこれ以上続くと、せざるをえないか…

ザッ

ん？お客が来たみたいだな

祐依「あの～すみません」

「へい らっしゃい！ご注文は何ですか？」

祐依「あつと…タイヤキを買いに来たのは、間違いないんですけど…」

？どういっこった？  
何かあるんか？

祐依「さあ」

そう言つと、女性の後ろから、あの嬢ちゃんっが出てきた

あゆ「あの、さっきは、本当にごめんなさい」

そう言つて、頭を下げてくる

祐依「あの、この従妹が、おたくのお店からタイヤキを盗つてきちゃつたと聞いて、謝罪と弁償にきました」

ほうつ こっちの嬢ちゃんは、まだ若いのにしっかりしてるなあ  
あの嬢ちゃんも反省しているようだし、まあ、許してやるか

「いや さすがに盗つたのは悪い事だが、こうして謝りに来たんだし、今回は、目を瞑つたるよ」

祐依「ありがとうございます。けれど、此方が悪いことをしたのは変わりませんので、弁償はキッチンと行います」

「おう 気にいった！嬢ちゃん！ それくらいの歳で、しっかりしてる。それにそっちの嬢ちゃんにも、キッチンと教えてんだろ！よし  
そのタイヤキはやるよ！」

そう言つと、嬢ちゃんは、申し訳なさそうにしてるが、ちっこい嬢ちゃんは、本当に嬉しそうな顔をしてやがる

祐依「でも……」

「いいってことよ！ちっこい嬢ちゃんも、もうしないだろ」

あゆ「うん こんな迷惑をかけちゃダメって、改めて教えてもらったから。本当にごめんなさい」

「じゃあ このタイヤキを食って、また、買いに来てくれ。いつでも、美味しいもん用意してるからよ」

祐依「ここまで、言われて断るのも、かえって失礼ですよ。すみません。ありがたういただきます」

「おう じゃあ 美味かったら……いや、好みがあるが、不味いもんは出さねえから、気にいったらまた来てくれよ」

祐依「はい 最後にもう一度、謝らせてください。本当に申し訳ありませんでした。それと、ありがとうございます」

ニコッと笑う嬢ちゃん  
なんかそれだけで、よくなるな

「おう やっぱ女の子は、泣き顔や悲しんでる顔よりも、笑ってた嬉しそうな顔の方が断然いい。これから、よろしくな」

「「ありがとうございます」」

「いいってことよ」

あの嬢ちゃん、いい子だったな。今度は、タイヤキを食ってもらって笑ってもらいたいもんだな。

次は焼きたての美味しいやつを食わせてやりてえな  
さてと、頑張りますか

side 祐依

「よかったわね。許してもらって。もうこんなことしちゃダメよ」

あゆ「うん もう絶対にやらないよ」

「それにしても、このタイヤキ美味しいわね」

あゆ「うん　ボクはあそこのタイヤキ屋さんのが一番だと思うよ」

「また今度、買いに行こうかしら？」

あゆ「そうしたほうがいいよ」

「さて、そろそろ帰ろうかしら」

あゆ「ボクもそろそろ帰るよ。またね祐依さん」

「ええ　またね」

あゆが走って帰っていく

それにしても、足速いわね…いつも走ってるのかしら？

さて、私も帰りますか

「あら？」

あそこにいるのは、真琴じゃない。帰宅途中かしら？

「真琴」

同じ家に帰るんだから一緒に帰ろうと思ひ声をかける

真琴「あう？」

小走りに寄って行く

「真琴、今帰り？一緒に帰りましょ。途中のコンビニでお礼の肉まん奢るわよ」

真琴「あう　それなら早くいくわよ」



コンビニで肉まんを買ってあげて、美味しそうに食べている真琴と歩いていると、

- - -

何か街の外れに違和感を感じた

「真琴 悪いけど、先に戻ってくれる？ちょっと遅くなるかもしれないけど、晩御飯には間に合うように帰るから」

真琴「あう？よくわからないけど、わかったわよ」

「それじゃ、お願いね」

そう言って、真琴と別れて街の外れにむかう

## 22話（後書き）

作「タイヤキ屋の店主が漢に…」  
祐依「いい人だったし、また行こうかしら」

## 23話

side 祐依

街外れからさらに離れ、森に着くと、魔物の遺体と魔物同士の戦闘痕が在った。

「おかしい…こんな場所で…それに遺体も…」

魔物‘ウルフ’の遺体には、襲われた痕しかない。

牙等に何も付いていない。

もし争ったのなら、ウルフの攻撃の要である、牙に何かしらの痕跡があるはず。

一方的にやられるとしたら、それだけ相手は強い筈…

なのに、この辺りでは、ダンジョンにしかない筈…

しかも、ウルフを一体だけ…

ウルフは基本は群れを成しているのに…

ウルフが先に仕掛けたのか…

それとも、このウルフが仲間を逃がすために、囿になったのか…

それとも…

何にせよ、何かがおかしい…さつきも感じた違和感もあるし…よく調べていきたいけど、居候二日目、遅くなって心配かける訳にもいかないし…真琴に晩御飯までには戻るって言っちゃったし。

「?リンク・ラタスク・センチリオン・サモン?」

と言って、ラタスクとセンチリオン達を召喚

ラタトスク「おい、どうした？俺達を突然呼ぶなんて、何かあったのか？祐依」

テネブラエ「お久しぶりです。祐依様どうなさいました？」

アクア「どうしたのよ？なにかあったの？」

「ここで、魔物同士の戦闘があつたみたいなんだけど、何か腑に落ちないの。悪いんだけど、調べてみてくれない？」

ラタトスク「ああ、わかった。とりあえず、この近隣をまず調べさせる。そのあと報告をする。それで、必要ならさらに範囲を広げる。これでいいか？」

「ええ、それでお願い。私、まだ此処にきて間もないから、信用できる伝手がまだ殆どないから。それに、魔物の事ならあなた達って思ったから。よろしくね」

ラタトスク「よし。わかったかお前ら。近辺の各属性の魔物達に調べてこさせる。行け！」

「……………はっ……………」

「みんなお願いね」

ラタトスク「じゃあ、俺は、あいつ等が戻ってくるまで、ここを調べる。戻ってきたら、情報をまとめて、お前の所に行く」

「わかったわ、突然呼び出したあげく、お願いして悪いわね」

ラタトスク「はっ今更だな。まかせろよ」

「じゃあ、お願いね」

ラタトスク達と別れ、家に向かう途中何か嫌な予感が頭から離れなかった……

## 23話（後書き）

作「やっと、テイルズ要素を出せました。

戦闘以外でも使いたいなと思って、

ラタトスクとセンチュリオンを出してみました。

この物語での、全ての魔物はセンチュリオン達と、コミュニケーションがとれます。

全ての魔物には自意識があり、何か理由がなければ、襲いません。

- 例 - 攻撃された。何かを守るため。等々

場所によっては、共存しているところもあります。

中には、自意識を失い堕ちたモノがいますが、それらは「魔獣」「マモノ」とします。

中には、人も堕ちる者がいます。

これら、堕ちたモノは、悪魔や魔神等、魔界とは、ほぼ無関係です。ときには、悪魔との対価で、堕ちる人もいます。

という設定です。

## 24話

side 祐依

家に戻る途中にも違和感がどうしても離れなかったが、皆に心配をかけないようにするために、ちょっと遠回りして、落ち着いてから帰ることに…

「なんでさ…どうしてこうなったのかしら…」

- 遡るほど30分ほど前

タイヤキと肉まんを買ったから、懐がちょっとさびしくなったので、お金をおろそうと銀行によって、お金をおろして帰ろうとしたら、

- パンツ

と発砲音

銀行強盗「騒ぐな！騒ぐと撃つぞ！」

反射的に動いて、物陰に隠れてしまった

強盗「金を全てこの鞆に詰めろ」

銀行員「はっ はい」

強盗が目的をこなしていく…

「犯人は一人、詰めている銀行員が一人、人質が五人… 犯人の武

装は手に拳銃：だけなの？それだけ腕に自信があるのかしら…」

幸い気づかれてないし、やりますか。

「パチッ “happiness”

陰で錬成し、タイミングを計り

強盗「よし それで十分だ」

逃げようとし、一瞬意識が外に向いた瞬間  
「今だ」

「パパンッ

物陰から飛び出し、二発発砲する。

初発で拳銃をはじき、二発目を足元に撃ち、意識をそらす

「ダン

その隙をつき、組み伏せ銃口を突き付ける

「観念しなさい。下手なまねをしたら撃つ」

強盗「くっ」

「あなた、錬金術師ね。どうして、こんなことをしたのかしら？」

強盗「っ！？どうしてそれを」

「あなたが持っていた拳銃にあなたと同じ魔力の反応があったからよ」

強盗「なっ！お前何者だ？」

そう尋ねられて、犯人にだけ聞こえるような小声で、

「私？ 私は国家錬金術師の【創生の錬金術師】よ まだ誰にも  
言わないでね」

強盗「なっ！？ あんたが、あの不吉を運ぶ【黒猫】か。あんたなら、納得だ」

「よかった 死神とか二つ名がつかなくて。あなたの名前は？」

二郎「二郎だ。苗字は捨てた」

「じゃ 二郎さん抵抗せずに、捕まってくれる？」

二郎「ああ あんたに抵抗しても無駄だろ？おとなしくお縄につくよ」

組み伏せていたのを離し、両手をあげさせる

「じゃあ 通報してもらえます？」

銀行員「あつ はい」

数分後、警察が到着し、連行される前に二郎さんがこちらに向かってきて

二郎「最期に名前を覚えてくれねえか？」

「相沢祐依よ。出てきたら、うちで働かない？錬金術師はあまりいないのよ」

二郎「こちらこそ、ありがとう。ぜひ、お願いします。それでも、裏には多少の伝手があるんで」

「じゃあ 出てきたら、ここに連絡してきて」

そう言い、名刺を一枚渡す

二郎「ああ またな」

「ええ また」

――と事件に巻き込まれたあげく、解決までしたら、警察に事情聴取されて、後半をぼかして説明したら、国家錬金術師とばれて、此処



の警察の一番のお偉いさんとの会談になってしまった

## 24話（後書き）

作「今回は戦闘ではなく、不意についての行動だったので、あっさりしてみました。」

それと、この辺りの裏の伝手を作ってみました」

## 25話

side 祐依

お偉いさんとの会談は、しなくちゃいけないことがあると言って、また、後日として手短にすまし、とりあえず、今回の件は、私の名前を出さないようにしてもらいました。

まだ、私がこの街に来た裏の目的に取り掛かってないのに、国家錬金術師や【黒猫】がこの街に来たと、ターゲットに知られないようにするために、伏せてもらいました。

「はあ〜どうして、こうなちゃったのかしら。時間をかけすぎたから、早く帰らなきゃ」

と晩御飯に間に合うように、帰路を急ぎます

「ただいま」

無事？家に着き晩御飯に間に合い、真琴との約束を守れました。

晩御飯はとても美味しかったです。

名雪がいつも通り早々に眠りにつき、真琴も眠りについた後、

「秋子さん、少し出てきますね」

秋子「了承。けれど、気をつけてくださいね。時間も遅いですし」

「大丈夫ですよ。私には、とても心強い仲間達がいますから」

秋子「それもそうですが、補導に気をつけてくださいね」

「そつちこそ、だいじょうぶです。国家錬金術師ですし、今日ちょっと、この街の警察とのコネもできましたし。そろそろ、時間なので、行きますね」

秋子「一応家の合鍵を渡しておきますけど、あまり遅くならないようにしてくださいね」

「はい　じゃあ行ってきます」

ものみの丘に着くと、協力者が人払いの結界を張ろうとしていました。

「私が来る前に人払いしようとしてどうすんのよ。私が見つけられなかったらどうするのよ？」

協力者「あなたでしたら、僕ぐらいの結界なんて、あつてないようなものじゃないですか」

「それもそうね。人払いはOKね。後は、盗聴防止と認識阻害かしら？」

そう言つて、一瞬で新たに結界をはる。

「じゃあ、さつそく本題のターゲットの情報を教えてくれる？」

協力者「はい、ターゲットは僕達が通う華音学園の高等部の講師として、二か月前の一月初めにやって来ました。彼は現在、魔法学と多少の戦闘について、教えています。皆さんはじめは、国家錬金術師が教えてくれると喜んでいましたが、彼が横暴で、多少の知識に問題があり、おかしく思い始めました。そうして、三月初めに生徒会に多数の意見が来て、僕も調査を行いました。彼に気づかれないようにやっていて、これだけかかってしまいましたが、僕の身分故に協会に問いただす訳もゆかず、祐依さんに聞いてもらおうとした

時に、祐依さんに以前聞いたお師匠さんの話を思い出し、その方の二つ名である【ゼロの錬金術師】と名乗っていることに気づいて、祐依さんに報告しました」

「そいつの戦闘の情報は？」

協力者「はい、得意属性はおそらく土。これは、土系統は祐依さんや、同業者には劣りますが、割と高く、生徒でもほんの一握りしか対処できません。他の属性は、殆ど使いません。一度火属性の魔法を使おうとし、失敗し暴発させています。これにより、得意属性は土かと思われます。戦い方は、ほぼ後衛ですね。接近戦では、勝てる生徒もいます。これは、国家錬金術師の戦闘試験を通過できるか、できないかの程度です。錬金術は、ホームクルスや合成獣<sup>キメラ</sup>などの研究をしているようです」

「精度はわかる？」

協力者「すみません。そこまでは。研究室に忍び込むのは、多少の危険があり、調べられませんでした」

「じゃあ、最後にその人の人格は」

協力者「それは、教育者としては、ダメですね。専門的な事を言い自慢をしているような感じです。放課後に質問に行っても、研究やら何やらで、受け付けません。生徒と一部の教師の間では、不満が上がっています」

「それぐらいでいいわ。あとは、出たところ勝負ね。まあ、負ける気はないけど。ありがと。久瀬副生徒会長」

久瀬「いえいえ、僕は祐依さんの協力者ですし、学園には祐依さんの知り合いもいますし、それと、来年度から、二年生ですけど、会長になります」

「あら、それはおめでとう。これから、お願いね」

久瀬「はい、こちらこそ、おねがいします」

## 25話（後書き）

作「という訳で、協力者の久瀬君です」

## 26話

side 祐依

久瀬君との会談で、ターゲットの京太郎の情報をもらい、整理をするためにのんびり歩いて、夜風にあたり考えていると…

ラタトスク『祐依、情報を集めてきたが、今、大丈夫か？』

とラタトスクから、念話があった。

「んゝあと数分待つてくれる？私の部屋で話を聞きたいから」

ラタトスク『わかった。準備ができたら呼んでくれ』

ラタトスクにことわりを入れてから、もしもに備えて、チカラを使わず、走って家に戻る。

家に帰って、部屋に戻り、師匠仕込みの結界を張る。

『ラタトスク、準備ができたわ。お願いできるかしら？』

ラタトスク『わかった』

と、ラタトスクが、実体化した。

ラタトスク『じゃ、まず、‘ウルフ’の件からだ。ウルフの群れから、イグニスが聞いてきた情報だ。あの死んでいたウルフは、群れ

に襲ってきた‘ホーク’から、群れの仲間を逃がすために囷となった、群れのボスだ。話によると、ホークが一方的に襲ってきたらしい。それはウエントスが、‘バット’から、証言を得ている。他の情報から見ても、ウルフに非がなく、ホークが襲ったらしい」

「じゃあ、今回はホークがウルフの群れを襲っただけってことかしら？」

ラタトスク「いや、それだけじゃねえ」

「え？　どういうこと？」

ラタトスク「センチュリオンどもの集めてきた情報によると、その襲ってきたホークは目がおかしかったらしい」

「目がおかしい？」

ラタトスク「ああ、目の色が真紅に染まり、正気じゃなねえように感じたらしい。それに、こういった件が、二月ほど前の一月の終わりに初めて起きて、徐々にだが増えてきているらしい。共通点がまず、目が変わり、正気じゃなく、自意識までもなく、攻撃的になる。襲われた魔物も、ごく稀に同じようになるらしい。こういった奴らは魔術を使えた奴は、正気じゃねえからか、魔術は使えねえらしい。こういう風になる奴らのほとんどが、群れていない奴が、一体になっっていたやつらしい」

「…そう。このあたりの魔物の風土病と考えてもおかしいわね」

おそらく、これは、魔物は被害者で、何かが裏にいる…

ラタトスク「あとそれに、一度だけ、魔物が転移魔法陣で消えた、と」

「え？　それは本当？　転移魔法陣で、消えたの？　魔物の特有の能力じゃなく？」

ラタトスク「ああ、消えたのは、‘ベア’だから、ゴースト系とかじゃないからな」

「これではつきりしたわ。この一連の件は、裏で糸を引いている奴



がいる。理由はわからないけど、罪のない魔物たちを殺すのは許せないわ」

ラタトスク「ああ、自意識がないのは、操られている、もしくは心が死んでいるのは、もう生きているなんていえねえ。そいつを殺してやる！この一連の件はこの街、華音を中心に郊外で起きているらしい。おそらく、この街に犯人がいるにちがいねえ！」

「ええ、私もそう思うわ。悪いけど、センチュリオンたちはもう少し詳しく調べるように頼んでくれる？」

ラタトスク「センチュリオンたち‘は’、ということは、俺は別か？」

「そのとおり。ラタトスクたちには、街中で、おかしいところを調べてもらいたいの」

ラタトスク「たち？　ほかにだれかいるのか？」

「当然　？リンク・アーチャー・ランサー・真アサシン・サモン？」

私が召喚したので、三つの陣があらわれ、あらわれたのは、三人の  
‘英霊’

「三人とも、聞いてたよね？必要があれば、実体化してもいいから、情報収集をお願い。実体化する際には、正体がバレないように、以前渡したペンダント型（満月をモチーフにした物。色は黒）の魔具を外さないでね。（ペンダントは零体化しても、一緒に零体化する）集めた情報は今度は、アーチャーが纏めてくれる？」

アーチャー「了解だ。マスター」

ランサー「わかったぜ、マスター」

真アサシン「御意」

ラタトスク「わかった」

「じゃあ、お願いね」

英霊の三人はすぐに出ていき、ラタトスクは、センチュリオンに指示を出してから、出て行った。

「みんな、がんばってね」

四人が出ていくのを見送り、そう呟いた。

## 26話（後書き）

Fateのサーヴァントを出してみました。

作者は、アーチャーとランサーが、大好きです。

Fateをやったことがないので、勝手な想像が多々あります。

真アサシンの口調や、設定など…

### モンスター解説

・ウルフ テイルズシリーズにもっともよくでてくる、薄紫？っぽい狼型の魔物

・ホーク TOSに出てくる大型の鷹の魔物

・バット テイルズシリーズによく出てくる、紫色の蝙蝠の魔物

・ベア テイルズシリーズによく出てくる、熊型の魔物

次回から、この話に出てきたような、普通でなくなってしまった、魔物をマモノと表記します。

ペンダントは、祐依一派（笑い）が作ったもので、第四次聖杯戦争のバーサーカーの宝具 己が栄光の為でなく（フォー・サムワンス・グロウリー と東方の封獣ぬえの‘正体をわからなくする程度の能力’を参考とし、術式として組み込み、強力な情報の漏洩を防ぐための魔法具となっています。

## 27話

side 祐依

四人を送り出し、ベランダに出る。

雪は降っておらず、積もった雪が、月光や街灯の明かりで、幻想的に見える。

「この街には何かがある…」

昼間に会った少女…

帰りに見つけた魔物の遺体…

この頃起こっているという、魔物のマモノ化…

そして、先生の二つ名を騙る違法錬金術師…

「この街には、何かあるのかしら？」

と、尋ねるように、一人呟き、部屋に戻り眠りにつく。

夜が明け始めたところに、アーチャーたちが戻ってきました。

「みんな、ありがとう。どうだった？」

アーチャー「ふむ、まずはラタトスクにセンチリオンたちの報告をしてもらっても、かまわんかね？」

「ええ、ラタトスク、お願い」

ラタトスク「ああ、まず、この一連のマモノ化は、この街の近辺でしか起こっていないから、黒幕は、この街にいるんじゃないか。あと、近くの遺跡とかのダンジョンの魔物は、外との繋がりがねえとこはこのことを一切しらねえらしい。」

「そう、ありがと」

アーチャー「では、我々が調べたことは、たしかに、街の外で、転移魔法陣が行われた魔力反応が、極僅かだが確認された。私では、あつたと確認できても、逆探知はできない故に、どこから、もしくは、どこへかは、わからなかった。もし、調べるのなら、マスターがキャスターでないと、あちらに悟られることなく調べるのは、難しいと思われる。街中では、結界を張っているところを何か所か、発見できた。学校や銀行などだったが、数か所は高位なものも見つかった。あと、マスターのターゲットである、京太郎の研究施設と思われる場所には、私でも、破れそうところがある結界もあったぞ」

「アーチャー、それは、何も使わず、自身だけでの話よね？」

アーチャー「ああ、魔術師として、二流の私でも破れそうな結界だった。だが、なかには、マスターの会社製の結界を張る装置で張ったと思われるものもあって、すべてを把握はできなかった」

「アーチャーでも、中がわからなかったとすると、それは、うちの研究者のマッドが対透視・遠視チェンしたやつかしら？ それなら、ちよつと中がわからないだけで、その中にほかの対策がありそうね」

あれは、キャスターなら、一瞬で破れるけど、他は、力で破るか、機械をどうにかしなきゃいけないからメンドクサイのよね」

でも、本当に中を見られないようにするだけだから、研究者には人気なのよねえ

まあ、破るだけなら、みんななら簡単よね

アーチャー「まあ、マスターなら問題ないだろう。最後に、華音学園の高等部の新校舎で、魔物やマモノでない何か違うモノの反応があったが、おそらく、これは、この件とは無縁と思われる」

「それは、どうして？」

アーチャー「それは、それに害意を感じなかったからだ。何か違うようなことを思っている気がしたんだ」

「そうね、今回のマモノの件は、自意識がないそうだから。…これは、あとで考えましょ。ありがとう、みんな。今晚、京太郎を討つ！その後にマモノを、次にその校舎のモノをどうにかしましょう」

そうして、話を終え、久瀬君に今晚仕掛ける意を伝える。

名雪の目覚ましで、思考を一旦中止し、名雪を文字通り叩き起こし朝食を済ませる。

名雪と真琴を学校に行かせ、魔法教会と国家錬金術師の教会に連絡をとり、準備を済ませる。

「さてと、あとは、夜を待つだけね」

秋子「あまり無茶をしないでくださいね」

「大丈夫ですよ。油断や慢心でそれを突いて、何度もやってきているんですから。それらの怖さを人一倍知っているつもりですから」

秋子「それはわかっていますが、祐依さんは女の子なんですから」

「ですから、私には、心強い仲間たちもいますから大丈夫ですよ。それに私には、やらなくちゃいけない事もありますから。こんなところで、無茶はしません」

秋子「わかりました。もう、言いません。じゃあ、私はもう少しし

たら、買い物に行ってきますね」

「わかりました。私は部屋の片づけなどをしています」

そう言つて、リビングを出て、部屋に向かう。

二時間後、部屋の整理も終わり、秋子さんが戻ってくる前にお昼ご飯を作ることを、秋子さんに伝え、家にあつた、秋子さん手製の Pasta で、カルボナーラとカルパッチョを作ると。

- ガチャツ

秋子「ただいま」

と、狙い澄ましたように丁度できたところに秋子さんが戻ってきました。

「おかえりなさい。丁度できたところですよ」

秋子「あら、わざわざありがとうございます」

そういつて、二人で昼食を済まし、話していると。

秋子「祐依さんは、お料理上手ですね」

「ありがとうございます。そうですね、先生に錬金術を教えてください際に、基本の一部だ、と教えてもらってから、料理が本当に上手な師匠にも教えてもらったりしましたから」

秋子「錬金術と料理にどんな関係が？」

「たとえば、食材を焼く、煮るなど状態が変化するように、錬金術

で錬金すると物が変わる。あと、味付けのように素材を活かすも殺すも、味付け次第というように、変化での活かし方などに関係があるそうです」

その後もいろいろと話をした。



## 27話（後書き）

AGは、普通の品から魔術に使用するものまで、さまざまな物を取り扱っています。

28話（前書き）

3月16日 - あとがき加筆

## 28話

side 祐依

昼食後、一休みした後、街の探険をすることにし、

「秋子さん、ちょっとそのあたりを歩いてきますね」

と、秋子さんに一声かけて、昨日半分くらいしか回れなかった商店街を中心に回ることにした。

商店街を見て回り、昨日のタイヤキ屋さんを見つけ、

「おじさんタイヤキ二つください」

店主「あいよ！ おっ！昨日の嬢ちゃんまた来てくれたな。ありがとうよ。二つで200円だ」

「はい200円」

店主「まいど！そういや、昨日初めて見たけど、この街に引っ越してきたのか？」

「ええ、三日前に越してきたばかりです」

店主「そうか、どうだこの街は、いいところだろ？」

「はい、いい街ですね。それに美味しいタイヤキもありますし」

店主「おっ！嬉しいこといつてくれるねえ。よし。もう一匹サービスだ！」

「え？ ありがとうございます。こんなことしてもらったら、いつそ御ひいきにしてくちゃいけませんね」

店主「いや、そんなこと気にせんでええ。普通によろしくな」

「ふふ わかりました。サービスありがとうございます」

店主「おう！また、よろしくな」

そんな訳で、タイヤキ屋のおじさんにサービスしてもらったタイヤキを近くのベンチに座って食べた後

「さて、今日の本当の目的のこの街の魔道具屋さんを探しますか」  
こういった、商店街にあるお店に掘り出し物が眠っていたりするのよね。

- 探すこと20分  
「やっと見つかった…」

目的の魔道具屋は、路地にはいつて、見つげにくい場所にありました。

「なんで、隠蔽してあるのよ」

- カランコロン

入るとベル？がなり、奥から店長らしき年配の人が出てきました。

店長「はい、いらっしゃい。今日はどういったご用件で？」

「えっと、儀式用のチヨークをもらえるかしら？」

店長「儀式用のチヨークだね。ちよっと待っててもらえるかい」

そついつて、店の奥に引ッ込んでいきます。

- 数分後

店長「悪いね、嬢ちゃん、あいにく切らしてるみたいだね」

「はぁゝ わかったわよ。私はこういう者よ」

そう言つて、国家鍊金術師の証のロケットを見せる。

店長「おや、これは… ほお、あなたが以前噂になつた僅か10歳で国家鍊金術師になつたという」

「ええ、そうよ」

店長「わかりました。少し待つていてください。チョコクは何本入用ですか？」

「そうね、今日は10本もらえるかしら」

店長「わかりました。では少々お待ちください」

待つている間にお店の中を見て回ります。

「はあゝ やっぱ簡単に掘り出し物は見つか…ら…」

そこにあつたのは、5、6年前に会社がなくなり、製造中止された特殊な術式を組み込んだ魔石

「え？ なんでこれがこんなところに… おじいさん！ おじいさん！」

店長「ん？どうしたんじや？そんなに慌てて？」

「この魔石つて、売り物？！」

店長「どれどれ、ああ、売り物じゃが？」

「じゃあ、ぜひこれ売ってください！」

店長「別に売りもんじやし…構わんが、そんなに慌ててどうしたんじや？」

「これつて、今はもう製造されていなくて、数も少なし、もう市場にほとんど出てこないんだよ！」

店長「ああ、それが…仕入れてみたんじやが、高くて買い手がつかずに、残つておつたんじやな。たしか、あと二つあつたはずじゃが…」

「全部ください。価格は言い値で結構ですから！」

店長「ふむ…嬢ちゃんはこの街には、立ち寄ったのか？それとも引越してきたのか？」

「引越しました」

店長「嬢ちゃんほど、世の中に貢献してきた、国家錬金術師なら悪用もせんじやろうし、いいじやろう仕入れ値で売ろう」

「えっ！？いいんですか？本当に」

店長「構わんよ。それに、引越してきたなら、またうちで買ってくれるだろう？嬢ちゃんほど、いろんなことをやってるんだったら、色々と買ってくれるじやろ？」

「ええ、本当に買うときは、お店の人が引くほど買ったこともありますが…」

店長「何より、わしゃ、嬢ちゃんが発明した、薬のおかげで死ぬはずじゃったのが治ってこうして生きておるんじやからの」

「それは、本当ですか？」

店長「うむ、相沢祐依殿」

「あら、名前って、言いましたか？」

店長「いや、名乗ってはおらんが、創生の錬金術師が発明した物が、相沢グループで販売されておるんじや。わしもこの道で何十年もやっておるんじやし、国家錬金術師の情報もあるんじや気づくのは当然じやよ。なに安心せい。普通は、二つ名を聞いても一致はせん」

「そう、ありがとうございます」

店長「なに、構わんよ」

「じゃあ、支払はこのカードで」

店長「ほう、さすが、国家錬金術師で相沢グループの娘さんじやな」

「いえ、では、また来ます」

店長「待つとるぞ」

魔道具屋で、予想以上の品が買えて、今夜のための英気を養いまし

た。

## 28話（後書き）

祐依は、地域での消費を考えて、なるべく現地で購入します。

そのため、祐依一人で、大きなお金が、地域で動くことがあります。

儀式用の品などは、キッチンとした身分証明などをしなければ、販売をできないようになっていきます。

なので、今回祐依は、遠回しに断られました。

よって、祐依は国家錬金術師の証のロケットを見せ、身分証明としました。

普通は国家錬金術師の本名は伏せられています。

この店長は店の伝手で、創生の錬金術師とA Gとの関連性を知り、本当に偶然知りました。

普通は知ることはありません。

祐依は薬品をはじめとする医療や暮らしのための物、魔術に関することまで、多くのことに手を出し、色々と発明しています。

その際は二つ名で、発表してます。



## 29話

side 祐依

夕食後、私は違法錬金術師の京太郎の断罪に行くための準備の確認をしていた。

「先生……」

先生の【ゼロの錬金術師】の証であるロケットを握りしめ、目をつぶる。

十秒程そうした後、懐に入れる。

そうして、名雪と真琴が眠りにつくまで、部屋で道具の手入れをしていた。

二人が眠りにつき、秋子さんに行くことを伝えた後、最後の準備。

黒い外套を身に纏い、仮面（TOAのシンクがつけていたもの）をつける。

最後に腰にmisfortuneを入れたホルスターをつける。

「さあ、行きましょうか」

道中で久瀬君と合流し、アーチャーたちが調べてくれた京太郎の研究施設へと向かう。

「じゃあ、久瀬君打ち合わせ通りによろしくね」

久瀬「わかりました。ご武運を」

と、久瀬君が頭を下げた後、別れ別行動をとります。

「ここね」

目的地に到着し覚悟を改めて決めます。

「さて、まずは、結界の中に入らなきゃね」

うーん、破って入ってもいいんだけど、破れば間違いなく相手にはれる…」

『キャスター、キャスターなら、探知の方の結界どうにかできる？』

キャスター『そうね…完全に気づかれないようにするなら、実体化して10秒くらいかかるかしら』

『じゃあ、お願い』

「?リンク・キャスター・サモン?」

と言って、キャスターを実体化させる。

キャスターに探知の方の結界を任せ、私はターゲットの居場所と内部構造を探る

キャスター「マスター、こっちの準備は万全よ。あとは、マスターの合図よ」

「こつちも、OKよ。じゃあ、行きますか！」

キャスターに助力を借り、施設に潜入を無事果たした。

「キャスター、ありがとう」

キャスター「ふふ、これぐらい、どうってことないわ」

と言って、再び霊体化したキャスター。

「さて、敵は地下ね。…研究室かしら」

ちよつとした屋敷みたいな建物の内部へと侵入すると、中は一階部分は、あまり整理されておらず、ある意味、一部の研究者の如く散らかっていた。

隠し扉から、隠された部屋に侵入し、その隠し階段から地下へと降りていく。

ああゝもう、なんでこんなに隠してるのよ！

メンドクサイじゃない！

と口には出さないが、文句をつける

ここまで、外にあった結界だけで、他に監視や罠がないのは、油断なのか…それとも、他に何か理由があるのか…

通路を進み、おそらく、ターゲットがいるであろう扉の前につき、中の様子を解析する。

…中におそらく人間が一人、この反応は魔物かしら？ひどく弱ってるわね…それが三つ。

何か魔力反応があるけど、これは…トラップ系のものじゃないわね…  
他には、何か歪な生体反応が一つ  
…一体なにかしら？

中の様子を確認し、突入する前に、懐に入れた先生のロケットを服の上から握りしめ心を落ち着ける。

## 29話（後書き）

中途半端ですが、一旦ここで、切らせてもらいます。

祐依が先生の国家錬金術師の証のロケットを持っているのは、先生の遺族が、弟子である祐依に意思を継いでもらおうと祐依に渡し、祐依がそれを承諾して国家錬金術師の協会のトップに許可を得て持っています。

### 30話（前書き）

セリフの前の名前の表記を今回なしにしてみます。  
決して面倒になった訳ではありません。

今回は、少しダークっぽいです。

### 30話

side 祐依

トラップはない。

おそらく、奴は今、実験もしくは、研究中だ…

気づかれていない…

実験中に攻撃魔法の準備をする奴はいない…

なら、突入しても、敵の能力の情報をある程度上方修正しても、即死あるいは、戦闘不能になることはない…

奇襲なら、なおさらね…

息を整え、扉を破る準備をする。

- バアン

扉を破り中に突入し、‘misfortune’を中で、機械の前に座っていた人物に向かって構える

「動くなっ！国家錬金術師の名を騙る違法錬金術師！！お前を捕まえに来た！」

中にいた、ターゲットの菊崎京太郎に向かい叫ぶ。

「っ！？何者だ！貴様！」

そう言いながら、立ち上がりこちらに敵意を向ける。

「ふふつ 【黒猫】よ。あなたに、不吉を届けに来たわ」

「何！？ 貴様があの黒猫だと?! 違法者に不吉を届けるといつ」

「ふふつ 別にあなたが信じようが、信じまいが関係ないわ。あなたはここで終わりなんだから」

そう言つて、撃鉄をおこし、撃てるようにする。

「ちいっ こんなところで終わつてたまるか」

奴は後ろの機械の赤い大きなボタンを叩きつけるように押した。

・ガチャン

何が外れるような音がし、獣が唸るような声がした。

「何をした!?!」

「なあに、貴様を殺す為の準備さ」

・ッ!

悪寒がし、バックステップでその場から、離れた数瞬後

・バガン

マンティコアの巨大な足が床を、私がいた場所を砕いた。

「なっ?! 何故マンティコアが?!」

「くくく、俺の研究の成果さ」



マンティコアがこちらを殺意をもって睨んでくる。

「ッ！」

マンティコアの目が赤く染まり、殺意・敵意・攻撃の意を示していた。

「なっ！　これは！」

「どうだあ？　不要な心を殺し、戦闘にのみ特化させた俺の作品は私の反応をあざ笑うかのように、顔をゆがませる。」

「…あんたが、あんたが！」

「くくく、恐怖で気でも狂ったかあ？」

「あんたが、これをやったのか！」  
大声で叫ぶように問う。

「ああ、そうだ。これが、何十匹を使って作り上げた殺戮兵器だ」  
両手を広げ、そう自慢するかのように説明する。

「そんなものを作るために、罪のない魔物たちを殺したのか！」

「それがどうかしたか？　所詮魔物がいくら死のうが、誰も困らんだろう」

その一言で、頭に血が上る。

「お前の罪を、お前の命を代価に支払ってもらっ

・ドドドドドドドッ

‘misfortune’で、マンティコアの目をはじめとする、  
防御の薄いところに一瞬で六発の弾丸を撃ちこみ、銃殺する。

「命を弄んだことを後悔しろ！」

その時、私は奴が後ろ手で機械に触れていることに気が付かなかった…

### 30話（後書き）

モンスター解説

・マンティコア T O S | Rに出てくるライオンのような体に顔に沿うように生えた角と、ドラゴンのような翼をもつキマイラの上位種の魔物です。

### 31話(前書き)

引き続き名前なしです

### 31話

side 祐依

「さあ、あんたのご自慢の作品とやらは、もうないわよ」

命を弄ばれたマンティコアを仕留め、'misfortune'に一瞬で弾を込め銃口を向ける。

「くくく、誰が、そいつ一体だと言った！」

奴が後ろ手で触っていた機械が起動する。

・カッ！

「うっ！」

閃光が走り、一瞬視界が奪われる。

「こっこれは、転移m」

視界が戻った時には、機械が私と奴に転移魔法陣を敷き、私たちを転移させた…

・シユン

「ここは？！」

私が転移させられたのは、コロッセウムのような場所だった。

「くくく、ここは俺の実験場だ。ここには、まだまだ俺の作品たち

「がいるぞ」

少し離れた高台に転移した奴が両手を広げ、そう言う。

私と奴の間に転移させられてくるマモノたち。

そのどれもが、命を弄ばれたモノたちだった。

「くっ！」

私は銃をホルスターに納め、手を地面につけ、一本の刀‘demi se’を錬成し、構える。

敵の一体オオカミ型の魔物‘ヘルハウンド’が先駆け、飛び上がり襲ってくる。

「はあっ！ 虎牙破斬！」

飛び上がったのを合わせ、強化した‘demi se’で切り上げ、切り下ろす。

一刀のもとに切り伏せる。

それを合図に数体のワシ型の魔物‘ガルーダ’とカエル型の魔物‘ゲコゲコ’が襲ってくる。

‘demi se’を納刀し、居合のように構える

敵が目前まで迫った時、抜刀

「真空破斬」

真空波を起こし、まとめて切り捨てる。

「タービュランス」

精霊の加護と賢者の石の力で、詠唱破棄し、構えていた残りのマモ

ノたちの足元から突風をおこし、まとめて倒す。

「さあ、これで形勢逆転ね」

‘demi se’を戻し、‘misfortune’を再び構える。

「くくく」

突然笑い出す。

「甘い、策が一重とでも思ってたか」

「ッ！」

私の手足を捕縛魔法で封じられ、その際に‘misfortune’を弾かれ、飛ばされてしまった。

「なっ！？ いつの間に！」

「ここは元々、実験場だ。暴走したのを抑えるためのものがないとでも思ってたか？ お前の意識がマモノに向いている隙に対象をお前に変えたんだよ」

そう言つて、奴の前に再度、陣が現れる。

「グオオオオオオ」

陣から現れたのは、クマ型の魔物‘ベア’の上位種‘グリズリー’

「クッ」

奴が話している間も捕縛魔法を破ろうとするが時間が足りない。

焦れば焦るほど、手間取ってしまう。

‘グリズリー’が目の前に歩いてくる。

そして大きな腕を振り上げる。

「っ！ とけた！」

しかし、腕は振り下ろされ、目前に迫っていた。

・ドスッ



### 31話（後書き）

アニメみたく、こんなところで切ってみました。

#### モンスター解説

・ヘルハウンド T O S | R に出てくるオオカミ型の魔物で、ウルフの上位種。ウルフよりも大きく、青っぱく、首の回りにたてがみのようになっている。

・ガルダ T O W に出てくるワシ型の魔物。薄い紫っぱい色をしている。

・ゲコゲコ T O W に出てくるカエル型の魔物。でっかいカエル。

・グリズリー T O S | R に出てくるクマ型の魔物。ベアの上位種で、暗い緑っぱい色をしている。

32話（前書き）

3月17日 - あとがき加筆

## 32話

Side another

・ドスッ

・ビチャビチャビチャッ

胸を貫かれ、血が滴り落ち、血溜まりができていく…

胸を貫いたそれは、引き抜かれ、血がいつそう吹き出し…

血飛沫をあげる…

胸を貫き、血を浴びたそれは、

- - - 真紅の槍

「どうした、嬢ちゃん？こんなところで？」

side 祐依

くっ！ 間に合わないッ

目を瞑り、来るであろう衝撃を覚悟する。

- ドスッ

来るはずの衝撃はなく、聞こえたのは何かを貫く音と、液体が落ちる音…

目を開けるとそこには、青い髪をし、青いボディアーマーを身に着け、真紅の魔槍を構えた青年。  
胸を貫かれ、絶命した‘グリズリー’の遺体。

「どうした、嬢ちゃん？こんなところで？」

「ランサー！？」

「頭に血上りすぎだ。もちつと落ち着けよ」

ランサーは魔槍を構え、奴に注意を払いながらも、私にアドバイスを  
をする。

「なっなんだ貴様！？いつの間に入ってきた！」

狼狽えながらも、三度マモノを転移させる。

今回は、さっきの比ではなく、100体程のマモノを展開させる。

「トレース オン  
投影・開始」

上空から何十本もの剣がマモノを射抜く。

そして、隣に白髪、浅黒い肌をして、赤い外套を身に纏う青年が姿  
を現す。

「アーチャー！？」

「マスター、怒りは爆発的な力を生むが、冷静さを失くしては、勝  
てるものでも勝てなくなってしまうぞ」  
アーチャーは双剣を手に、私を諭す。

「……ありがと。ランサー、アーチャー。目覚めたわ」

「ハッ、どってことねえよ。マスター」

「フツ、まだ、マスターにはやることあるんだろう？…これくらい、  
かまわない」

二人は微笑する。

「ランサー、アーチャー、周りの奴らをお願い」

「了解だ、マスター」

「別に、アレを倒してしまってもかまわんのだろう」

「ええ、私があいつをやるから」

二人は周りのマモノに向かい駆けて行く。

私は二人があけた道を奴に向かって、歩んでいく。

「くそつ、なんだあいつらは、俺の作品どもが、手も足もでないだ  
と！」

啞然としている奴に向かって、一発放つ。

「二人は私の心から信頼する仲間よ」

「くそがつ！<狂乱せし地霊の宴>」

今度は、奴が頭に血が上り、魔術の詠唱を始める。

自分の詠唱中を守るものを用意せず…

「？強化・開始？」  
トレース オン

私は歩みをすすめながらも、体を全身を強化し、仕掛ける準備をする。

「<ロックブレイク>」

私の足元の地面が突き上げるように、隆起し私を貫こうとする。

その瞬間、私は強化した足で、駆け抜ける。

背後で、岩が立っている。

奴の後ろに回り込み、'd e m i s e' で奴の背中を切りつける。

「グッ、」

「さあ、あなたに不幸を届けにきたわ」

'd e m i s e' を突き付ける。

奴は、試験管のようなものを袖から取り出し、私とのあいだに投げる。

「カッ！

小規模な爆発をし、距離を開けられる。

「やられてたまるか！<大地の咆哮…>」

私を殺す為に上級の魔術の詠唱を始める…

完全に頭に血が上り冷静さを失い、同じ過ちを犯す。

「?リンク・ラタトスク・スキル・ロード?」

‘d e m i s e’を変化させ、?マークのようなラタトスクが使っていたような剣にする。

そして逆手に構え、後ろに引く。

「<其は怒れる地龍の爪牙>」

「アイン・ソフ・アウルーーーー」

剣を振りぬき、光の球を飛ばす。

「<グランド>…>ッ!ぐあああああー」

光の球は、違法錬金術師、菊崎京太郎を飲み込み、奴を消し飛ばした。



### 32話（後書き）

罪のない魔物たちを殺した相手だったので、ラタトスクの秘奥義でしめてみました。

サーヴァントたちは、独自に実体化をすることもできます。

普段は祐依のまわりにいます。

大抵は呼ばれて現れますが、非常時には出てきてマスターを助けます」

### 33話

side 祐依

違法錬金術師を無事？倒し、別行動をしていた久瀬君に連絡をとる。

『久瀬君。ターゲットの断罪、完了したわ。資料や情報を可能な限り、集めてちょうだい。こちらもここを調べたらそっちに行くわ』

『わかりました。では、作業を始めます』

「さてと、アーチャー、ランサー。お疲れ様。それと、ありがとう」

「なに構わんよ。さて、マモノたちの遺体の処理はまかしてくれ」

「ああ、嬢ちゃんはさっさと情報集めに行つてこい」

「お願いね」

魔物の遺体は放っておけば、そのうちマナへと還っていくが、今回は比較的原型を留めている個体を治療方法を調査するために、特殊な魔道具を使い保存し、他の遺体は集め、火葬にて弔い、マナへと還す。

私は、実験場と奴が言っていたので、実験データの回収と奴は転移

は機械で行っていたので、機械を調べて現在地の確認と他にマモノが転移されずに残っているのがないかを調べる。

十分ほどで、基本うちの製品をもとに使われていたので、実験データと現在地がわかった。

なっ！こ、これは…

マモノの状態や、個体数などのデータが見つかったが…

「逃げ出しているのがいる… それに…」

二人がいる場所へ急いで駆ける。

「アーチャー、ランサー！急いで戻るわよ！」

「どうした、そんなに慌てて、落ち着きな」

「ふむ、一度落ち着いたマスターが、そこまで慌てるのだ。一先ず我々は戻って、情報を‘リンク’するべきだな。ランサーもそれでもいいかな？」

「そうだな。そっちの方が断然早えし、情報の齟齬もねえからな。戻るぞ」

「ええ、お願い」

霊体化したのを確認したら、情報を「リンク」し、そのまま、転移する。

最初の戦闘した場所に転移すると、久瀬君が丁度作業を終えたところだった。

そして、私の転移に気づきこちらを向く。

「あ、祐依さん。奴の所有する情報をすべて、集めましたよ」

「ちょうどいいわ。その情報をくれる？久瀬君は菊崎の報告をお願い。菊崎は戦闘の末に死亡。遺体は処理済。それと、菊崎がやったマモノの特徴を一先ず報告して。必要最低限で構わないから早く。マモノに関しては、私が詳細をまとめるから」

「わかりました。データはこちらです。では、報告を送ってきます」  
そう言つて、部屋を素早く出ていく。

さあ、早くやらなきゃ。

集めたデータをギルさんの《ゲート・オブ・バビロン王の財宝》をもとに紫さんの協力で作った「倉庫」にしまい転移を開始する。

### 33話（後書き）

祐依は、幻想郷にも繋がりがありません。

‘リンク’している人？もそれなりにいます。

けれど、この話では、戦闘では使わないようにしていくつもりです。

すでに、出てきていますが、

魔術と科学は交わっているところもあります。

EX―結界、転移

機械は大きく、移動させることができないため、直接戦闘には関係  
りができないという設定です。

魔石に魔術的処理を施したものは、使えます。

祐依の人物紹介を近いうちにキチンとまとめておきたいと思います。  
私が、わからなくなる前に…

## 人物紹介（前書き）

今更かもしれませんが、私がわからなくなる前に改めて、まとめました。

## 人物紹介

### 人物設定

名前 相沢 祐依

よみ あいざわ ゆえ

年齢 16歳

身長 173CM

体重 kg

両利き (普段は右)

### 二つ名

- ・ 創生の錬金術師
- ・ (奇跡の錬金術師)
- ・ 黒猫
- ・ 黒き月 (祐依の団体?名)

髪 黒でポニーテール(シングルポニー)で、肩甲骨ぐらいまで伸ばしている。

瞳 黒。 場合によっては、変化する。

装身具 眼鏡、ペンダント

- ・ ペンダント 満月を模している。(色は黒)

祐依の持つオリジナルは賢者の石をもとに作られていて、色々な強力なチカラを有している。

祐依の仲間も、同じ形のペンダントを持っている。

複製した賢者の石もどきで作ったもののため、オリジナルには及ばない。

けれど、はたから見れば、異常な物。

黒き月の由来にもなっている。

現在判明しているもの

・精霊の加護

・いろんなモノの加護

・リンクしているものを召喚

共通

・隠蔽

・意思の疎通

裏の仕事の時には、黒い外套を纏い、TOAに出てくるシンクの仮面のようなものをつけ、顔を隠します。

使用武器

・ misfortune 某掃除屋の黒い銃

・ happiness 上の白い版 主に、表で使います。二丁拳銃として使うこともあります。

・ demise 様々な型式を持つ刀、'テンコマンドナイト'のよう、に、形や特性、能力を変えられる。

能力値 (Fate風)

強化なし

筋力 B

耐久 C

敏捷 A

魔力 A

幸運 A

技能・能力

錬金術師 超一流 - 錬成陣を用いない。  
いろんな術を使える。 - 加護により。



詠唱破棄 - 精霊の加護により。  
超記憶 必要な記憶を忘れない。

固有能力

・リンク

リンクしたものと能力、技、技能などが共有できる。  
情報の共有、召喚ができる。

属性適正

全ての精霊と契約し、加護があるため、全ての属性を使える。  
強いてあげるなら、風属性をよく使う

リンクして、出てきたもの

テイルズ系

・ラタトスク 23話 TOS | R

・センチュリオン 23話 TOS | R

・精霊

Fate / Stay night

・アーチャー 26話 (10話)

・ランサー 26話

・真アサシン 26話

・キャスター 27話

・ギルガメッシュ 33話 ギルも有事は、ゼロアーチャーと呼びます。

・セイバー 41話

・バーサーカー 56話

Fate / zero

・バーサーカー 26話 zeroに出てくるサーヴァントは名前の前にゼロとつけ、区別します。

東方系

・封獣ぬえ 26話

・八雲紫 33話

## 人物紹介（後書き）

随時更新していきます。

34話（前書き）

3月19日 脱字訂正

### 34話

side 祐依

違法錬金術師をやったので、細心の注意を払う必要が無くなったので、転移で家の近くまで帰ります。

周りの確認をしてから、外套と仮面を倉庫に仕舞う。

家の前に移動し、身なりのチェックを一応する。

そして、返り血などがいないか確認した後、家に入る。

「ただいま戻りました」

起こさないように、静かに入る。

ん？ リビングに明かりがついている。

リビングに入ると、

「おかえりなさい、祐依さん。無事に帰ってきましたね」

秋子さんが待っていた。

「はい、ただいま戻りました。これで、一仕事終わりました。けど、新しくやることができちゃったので…」

「ええ、以前言ったように、止めはしませんよ。けれど、気を付けてくださいね」

「はい、わかってます。まだ、やらなければいけない事があるので、何をしてでも、生き延びますよ」

「ええ、でも、今日はゆっくり休んでください。お風呂沸かしてありますよ」

「はい、じゃあ、入ってきますので、先に休んでいてください」

「わかりました。あまり、お風呂でゆっくりしすぎて、遅くならないうようにしてくださいね」

「はい、じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

秋子さんと別れ、お風呂場へ向かう。

お風呂に浸かりながら、今日のことを思う。

戦場で、頭に血が上ったあの時、ランサーたちが来てくれなかったら…

頭から水をかぶり、頭を冷やすイメージをする。

三回繰り返し、二人の言葉を、教えをしっかりと刻みこむ。

湯船につかり、マモノの情報をまとめる。

暫し、浸かって温まったあと、お風呂から上がり、着替え、髪を錬金術の応用で一瞬で乾かし、リビングに戻る。

リビングのテーブルの上に、ティーポットと軽食があり、その横にメモが置いてあった。

『がんばりすぎて、体を壊さないようにしてくださいね』

「秋子さん…今からの徹夜、バレちゃってたか」

秋子さんに感謝しつつ、部屋へと持っていく、人払いと隠蔽の結果を張り準備を始める。

さて、まずは、久瀬君が纏めてくれた資料と情報を読む。

読み終わったら、私の集めた情報と統合し、まとめる。

「やっぱり、治す方法はないか・・・」

マモノは一度は死んでいるため、治す方法がないのだ。

「ホムンクルスと合成獣（キメラ）と生きる屍（リビングデッド）をもとに応用して体を構成。

あとは、催眠と刷り込みか・・・」

問題は、色々あるが、脱走したもののうち、数体は、あまり気にしなくてもいい。

どうやら、肉体構成があまく、脱走する前から力は強かったが、寿命というか命というか、体がもろつかたため、長くもたないようだ。

すでに、死んだと調査結果がある。

こいつらは、実験中で、発信機がつけられていたらしい。

マモノは個体ごとに特徴が違ったようだ。

力重視、速さ重視など。

一番の問題が、二体が、進化の可能性があるらしい。

実験体の中の一体が進化し、上位種になったという結果がある。

これは、私が最初に殺したマンティコアがそうだったらしい。

一回進化するだけなら、私たちでなくても十分対処できるが、さらに進化していた場合、一部の人が対処できない恐れがある。

もしかしたら、他の魔物を襲い、その魔物がマモノ化し、そのマモノが進化の可能性をもつかもれない。

「これは、ラタスクやセンチリオンたちに魔物に注意させるようにするしかないかしら？」

もうすぐ、学生は三学期が終わり、春休みにはいる。

もし、街の外に出て、遭遇したら危険である。

「うーん、報告する時に注意を呼び掛けてもらうよう、魔術協会と国家錬金術師の協会に通達した方がいいわよね……」

その後、数時間かけて、両方に送る報告書と手紙を書く。  
ミスがないか確認した後、トップの元へ、転送させる。

作業が終わり窓の外を見ると、朝日が昇ってきていた。  
ベランダにでて、伸びをする。

「うーん。名雪の目覚ましが鳴るまで、一眠りしますかあ」



そう言って、ベットに入り、一時間半ほど仮眠をとった。

### 34話（後書き）

春休み中は少し日が飛ぶかもしれませんが。  
（この物語で、休み中のネタがないため、さっさか進むかもしれません）

### 35話（前書き）

後半が、説明文になっているうえに、長いです。

### 35話

side 祐依

ほぼ徹夜明けで、一時間半ほど眠ったが、名雪の目覚ましによって、半強制的に起こされたので、名雪をまた今日もたたき起こす。

リビングで、みんなと一緒に朝食をとる。

「祐依って、どうやってあの名雪を起こすのよ!」

「え? どうって、文字通りたたき起こしてるだけよ」

「私がやってても、全然起きないわよ」

「でも、これって、起きてるっていうの?」

名雪は、半分眠った状態で、パンにイチゴジャムを塗りたくっている。

「こっちの方が、色々と便利なのよ! 会話だって、起きている時とあまり変わらないんだから」

「それもそうね。でも、そろそろいい時間だけど大丈夫?」

「!よくないわよ、さっさと行くわよ。」

「だお、わかったお」

「大丈夫そうね・・・」

名雪と真琴が学校に走っていたあと、秋子さんに入れてもらったコーヒーを飲む。

「秋子さん、今日は色々行くところがあるので、お昼ご飯はいりません」

「あら、昨日、起こったという問題かしら？あまり、無理をなさらないでくださいね」

「ええ、わかってます。一息ついたら、行ってきます」

「はい、気をつけてくださいね」

街の外に出、結界を張り、ラタスクたちとサーバントたちを召喚する。

「みんな、わかってるわよね。打ち合わせどおりをお願いね。じゃあ、散開！」

ラタスクたちに、魔物に注意を呼びかけることを頼み、サーバントたちには、マモノの搜索及び、討伐してもらう。

私は、はじめは、菊崎の研究所の再調査を行い、その後、サーヴァントたちと同じように、マモノ討伐に向かう。

「明るくなつてから、また来てみたけど、新しいことは特にわからなかったわね」

昨夜に調べたこと以外に新しくわかったことは、特に見つからず、強いてあげるなら、ゼロの錬金術師のロケットの模造品があつて、それを使い、周りを騙していたらしい。わざわざ、誤魔化するための術式を何度もくみこんで。

あとは、協会に任せますか」

協会のトップに連絡し、後を任せる。

街の外に再び向かい、マモノの搜索に入ると、ラタスクから、念話で近くで目撃されたと、情報が入ったため、近くを搜索すると・・・いた！

今回は、ただの強化されたタイプのマモノだったため、容易に倒すことができた。

サーヴァントたちからの連絡でもきちんとペルダントの結界を張つてから、周りに気づかれずに倒しているそうだ。

そんな感じで、数体狩っていると、ラタトスクから、近辺の魔物に連絡が終わったと、報告が入り、いい時間なので、今日は戻ることにした。

何体かのサーヴァントは、引き続き搜索と討伐をするようだ。

家に戻り、秋子さんと夕食の準備をしていると、

・ガチャッ

「「ただいま」」

二人が帰ってきたようだ。

「あら？今日は早いわね」

秋子さんは、一旦手を止め、玄関に向かっていく。  
私も手を止め、リビングに行く。

三人がリビングに入ってくる。

「何かあったの？」

と、尋ねると

「いろいろあったのよ」

と真琴が返してくれたので、もうすぐ、夕食ができるので、その後

に話すことにした。

夕食のあと、話を聞いてまとめると、次のようなことだった。

- ・先生の一人が急に辞めた。
- ・搜索に当たろうとしたら、魔術協会と錬金術師協会からの通達。
- ・その先生が、菊崎で国家錬金術師の名を騙る違法錬金術師だった。
- ・学校側は、緊急会議。
- ・生徒会が、それを公表。
- ・親御さんたちが、学校に抗議。
- ・授業にならないため、生徒は下校。
- ・授業が残っているクラスがないため、明日から春休みらしい。
- ・噂だと、よく素性を調べずに、学校に国家錬金術師がいるという見栄のために雇用した学校側の理事長や校長、その他多数の上層部が責められているらしい。
- ・二つの協会やほかの機関がいろんな調査に入ららしい。

後の二つは、秋子さん情報であった。

：秋子さんは今日はお休みで家にいたはずなのに、二人よりも詳しくかった・・・

学校側はもみ消そうと企んだが、私の報告ですでに協会は知っていたし、久瀬君率いる生徒会が生徒にいち早く公表したために、騒ぎが大きくなったため、もみ消せるものではなくなった。

学校側は生徒会が情報をどうやって、手に入れたのかを、生徒会を問い詰め、生徒会長の久瀬君が噛んでいると疑ったが、他のメンバーがこう言っただけらしい。



生徒会の独自の学園内の情報ルートと、一部の先生をはじめとする菊崎と学校側に不審を持っていて、生徒のためにと普段から考えている教師陣からの情報とを、二つを合わせ纏め、生徒のためと普段から活動していたため信頼を得ていた生徒会が生徒に公表した。

学園の生徒たちだけにではなく、学園の良識を持つ教師たちと協力し、外部にも公表しこの騒ぎにしたらしい。

久瀬君を調べても、証拠がなかったため、学園の上層部以外は納得したらしい。

実際、久瀬君からは、何も言わず生徒会のメンバーや教師、独自のルートからの情報だけをまとめたので、私も菊崎を断罪した際には、細心の注意を払って行動したため、記録には、‘黒猫’が菊崎を断罪したとしかないため、久瀬君のことは一切知られていないのである。

知っているのは、私と両親と久瀬君の両親とあと一人だけのため、協会のトップでさえ、知らないのである。

なので、私たちが明かさない限り、わからないのである。

そうして、久瀬君の疑いははれたのである。

と、久瀬君から、夜に報告を受けて、全貌を知った。

ここまで、考えていたらしい。

曰く、学園の膿を掃除したかったらしい。

ちなみに私はここまで事後が大きくなるとは考えていなかった・・・久瀬君が今回の事後処理を任せてくと頼まれたので、腕もたつし、信頼していたので、私はマモノの方にかかれると考え、任せたらこんなことになってしまった・・・



### 36話

a i d e 祐依

数日後。

名雪と真琴が遊びに行ってる時に久瀬君が報告に来た。

研究やマモノの討伐などをして、過ごしていると、久瀬君からの報告で、学園の膿は大方掃除できたらしい。

今の問題は、今回の件で、教師が不足してしまったことらしい。私は、既に飛び級制度などをフルに使って、大学を卒業し、博士号もいくらかとっているため、学校に通う必要がないため、大変だなあゝと思っていたら、

「祐依さん、たしか、教員免許持っていましたよね？」

と、おっしやりやがった。

確かに、学生時代や、卒業してからも、色々な資格を以前とったが・  
・

その中に確かに、教員免許を取得しているけど・・・

ッ！ まさか！？

「そのまさかです。僕たちに教えていただけないでしょうか？」

やっぱりか！ やっぱりそうなのか！？

「祐依さんは、本当の国家錬金術師ですから、他の先生方も納得してくれるはずです」

「で、でも、私は、あなたと同じ年だし、三年とか、年下に教わるのは、嫌でしょ!？」

「祐依さん、そんなに、自分を卑下しなくても、あなたは、歴史上最年少で、最難関と呼ばれる国家錬金術師の試験に一回で受かっているそうじゃないですか。その他にも、数多くの発明をしているんですから、誰も反対しませんよ。それよりも、皆は喜ぶと思いますよ」

「えっと、ほら、あれよ、あれ… そうだ! まだ、マモノの問題が…」

「先日、殆ど終わったと仰いましたよね？」

「しまった! 墓穴を掘った! 昨日研究で徹夜なんてするんじゃないかった。」

「今回で、黒猫の活動はしばらくお休みって、言っていましたよね？」

「たつ退路が…」

「祐依さん、お手紙が三通来てますよ」

と、階下から秋子さんが呼んでくれた。

あつ ちなみに、久瀬君が来ているのは、誰も知りません。」

仕事前のお話をしているのと、秋子さんに久瀬君の正体を知られないようにするためです。

「ちょ、ちょっと手紙をもらって来るわ」

そう言って、とりあえず、離脱する。

手紙をもらい、部屋にもどって、読んでみると。

l o r z

一通は魔術協会のトップ。

一通は錬金術師協会のトップ。

一通は両親。

上二つは、華音学園の監視、及び調査の依頼。

最後は、両親から、華音学園に残っている理事の一人にも頼まれたらしく、先生を『やれ』だそうだ。

久瀬君がいるのを忘れて、l o r z していると、

「どっ、どうしましたか？」

久瀬君が私の表変に驚き尋ねてくる。

何も言わずに、手紙を見せ、読ませる。

手紙を読んだあと、少し無言だったが、

「が、がんばってください」

と、さっきまでとは変わって、励ましてくれた。

数分落ち込んでいたが、いつまでもそうしているわけにもいかず、

「はあゝ やるしか道がないのか・・・」

久瀬君に教師をやる旨を伝えると、ちょっと気の毒そうにしながら、帰って行った。

トップたちに連絡をとると、二人で相談した際に、次のことが条件だったらしい。

- ・ 信のおける者
  - ・ 問題に対処できること
  - ・ 情報収集がうまいこと
  - ・ 教師として、やれること
- などがあがったらしいが、二人して、私の名前を挙げたらしく、そこから、私が両方の協会のトップに深いつながりがあると、わかったため、私の両親に尋ねたところ、即決でOKがでたらしく、私に依頼が来たらしい。

夜に秋子さんにその旨を伝えると、

「あら、ありがとうございます。祐依さんなら大丈夫ですよ」

そういつてもらえたが、

「これで、大丈夫かしら？」

そう、呟いたのを聞き、どういう意味か尋ねると、

二人には内緒ですよと、念を押され、

「私、華音学園の理事をやっているんですよ。それに、祐依さんのご両親に頼んだのは、私なんですよ」

そう聞いた時、私は本気で『ああ、ブルートウスよお前もか』と思った・・・

### 36話（後書き）

そんな訳で、先生になります。



### 37話

side 祐依

四月から、華音学園高等部で、教師をやることになってしまった、相沢祐依です。

やるからには、きちんとこなすのが信条なので、春休み（実質休校状態）の学校に秋子さんと一緒に魔術協会と錬金術協会からの新たに送られてきた、書状を持って向かっています。

「はあ、ほんとに私が教師、やるんですか？」

返答はわかりきっているのに、聞いてしまいます。

「ええ、祐依さんなら大丈夫ですよ。自信を持ってください」

これは、自信の問題では、ない気がする。

いくら、いろんな権限を持つ、国家錬金術師といっても、裏のことなど言えないため、大変なことである。

ほほ、同年代に教えるのは、どうなんだろう？

いろいろ考えているうちに、学校に着き、新しい理事長（秋子さんが就任したらしい）とともに、新しい校長や先生方に挨拶し、そ

の後、会議みたいなものを開いて、二つの教会からの正式な書状を見せ、私の役目をまず説明します。

そして、理事長に依頼され、教員免許を呈示しながら、教師をやる旨を伝えます。

その際に国家錬金術師の証であるロケットとともに、別に錬金術師協会のトップに本物と証明するための書類にトップの実印とサインがしてあるものを渡す。

ダメ押しとして、私の身元を保証する人として、A G “相沢グループ”をやっている両親に、二つの教会のトップさらに、新理事長の秋子さんにも、保障してもらっているこのことを伝え、信用してもらう。

というか、最後のは蛇足すぎた・・・

先生方の信用は得られたが、一部の人は目が輝きすぎて・・・

何をそんなに期待しているのかしら？

「じゃあ、祐依さんには、先生が抜けてしまった、戦闘学と魔法学をお願いしてもいいですか？」

と、秋子さんに尋ねられたので、

「わかりました」

了解の意を返す。

「それと、彼が副担任をやるはずだったクラスの、副担任をお願いします」

ただの、教科担当だけよりかは、生徒たちと交流がもてるだろうと考え、こちらも了解する。

その後、解散となり、戦闘学の担当の先生方に挨拶し、どういったことをやるのかを教えてもらいつつ、確認する。

次に魔法学の担当の先生方に挨拶し、教科書を見せてもらい、教えることの確認をする。

そして、副担任をするクラスの担任をする石橋先生に挨拶し、私がする仕事を教えてもらう。

最後に、秋子さんに校内地図を用意してもらい調査を兼ねて、校内を回ることにする。

夕方ごろに見回りはじめ、終わるころには日がすっかり暮れていた。秋子さんには、遅くなると伝えているので、大丈夫なのだが・・・

以前、アーチャーが言っていたような、何かの気配がし、そこに向かうが途中で霧散してしまった。

けれど、途中で、人がそれと戦っていたようなので、その人に事情を聴くために再度向かう。

そこに着くと、一人の制服を着た女生徒が、剣を携えながら壊された廊下にたたずんでいた。

「これは、あなたがやったの？それとも、あなたが戦っていた何かがあったのかしら？」

女生徒に尋ねる。

「…戦ってたら、壊れた」

「あなたが戦っていたのは一体何なの？」

「…魔物」

そう思ったかと思うと、去って行ってしまった。

『ラタトスク、あれは、魔物だった？私には違うように感じたけど・  
・・』

ラタトスクに念話をする。

『いや、あれが何かはわからねえが、魔物じゃあねえ』

そう断言する。

よくわからないが、あれは、私も魔物ではなく、なにか違うモノと思う。

また、あの女生徒に話を聞かなきゃね。

「そういえば、この壊れた廊下どつするの・・・？」

結果を言えば、私が錬金術で直しました。

38話（前書き）

誤字訂正

### 38話

side 祐依

昨日の女の子はいつたい、なんだったのかしら？

あの後、壊れた場所の修復をしていたら、ちょっと遅くなってしまい、真琴に心配をかけてしまった。

名雪はすでに寝ていて、私が朝に起こすまで会わなかった。なので、名雪が寝た後すぐに帰ってきたということにした。

もう数日で、学校が始まる。

学校が始まる前に、正体を知りたいわね。

華音学園高等部の制服を着ていたので、この春に、卒業していなければ、在校しているはずだから、秋子さんに訳を説明すればある程度教えてくれるだろうけど、秋子さんを信用しないわけじゃないけど、人づての情報だと、何かしっくりこないことがあるから、やっぱり、直接会って話をしなきゃ。

また、夜の学校に行けば、会えるかしら？

「今日の夜にまた、行きますか」

午後に名雪の親友が遊びに来るらしく、名雪が私を紹介したいと言

って午後は家にいてほしいと頼まれた。

特に断る必要もなく、もしかしたら、私が教えるかもしれないので、知っている方が都合がいいので、了承し、午前中に休み中の研究で消費した物を買ったために、またあのお店に買い物に行くことにした。

魔道具屋に着き、お店に入る。

・カランコロン

ベルがなり、店主のおじいさんが店の奥から出てくる。

「おや、いらつしゃい。今日はどうしたんじゃ？」

「いろいろと、使って無くなりそうだから、買い足しに来ました。このリストにあるものをもらえますか？」

そう言つて、リストを渡す。

「ほう、こんなにたくさんか。ちよいと、運ぶのを手伝ってくれんかの？ 老人にや骨が折れることじゃ」

「わかりました。というか、私の荷物は、すぐにしまうから大丈夫ですよ。それより、運ぶものがあるなら、手伝いますよ。恩もあるし」

「ふむ、言っておいてなんじゃが、重いもんもあるんじゃが、大丈夫かの？」



「こう見えても、研究で使う機材とか重いものもあるから、それを運んだり動かしたりしなきゃいけないこともあるし、だてに、子供のころに、大人にまじって国家錬金術師の戦闘試験をパスしてませんよ。力には自信ありますよ。」

そう言つて、近くにあつた、商品の詰まつた大きめの箱を持ち上げてみせる。

「ほお、それが持てるなら、大丈夫そうじゃな」

「それに、いざとなつたら、魔術を使えばいいんですよ。そういった補助系のね」

「それもそうじゃな。最近の者は、魔術は攻撃系統の見た目が派手なものばかりで、そういった補助系のものを使いこなせる者が減つてきておるからの。使う者もそれなりにおるが、昔程、使いこなせてはおらんから、ついすっかり忘れておつたわ」

「詳しいんですね」

と言いつつ、風を使い箱を手からさらに持ち上げ、ゆっくり下ろす。もちろん、箱は揺らさずに。

「まあ、昔取つた杵柄じゃよ。ほう、そこまで、魔術を使いこなすのか。最近はお主ほど魔術を使える者はおらんじゃろ」

店の奥に移動しながら話す。

「ありがとうございます。昔、修行して研磨しましたから。…それ

と、昔取った杵柄とは？」

「なに、以前に数多くの魔術師などを見てきたからじゃよ。【衛宮を継ぐ者】よ」

「ッ！　なぜそれを知っている！」

とつさに、‘倉庫’から、ただの銃を取り出し、構える。

「なに、わしや先々代の協力者の一人じゃよ。嬢ちゃんの場合は、先日、先代つまり、嬢ちゃんの親御さんから、この街に先に来ると手紙がきての。色々と面倒を見てくれと頼まれての。わしや怪我で、もう魔術を使えなくなってしまうての。裏方に徹しておったが、先代にも協力しておったんじゃ」

「…祖父や父に協力していたんですか・・・」  
そう聞き、銃を倉庫にしまう。

「うむ。お主はまだ若いが、わしが見てきた中で1・2を争うほどじゃ。教えることは、殆ど無いじゃろう。じゃから、相談ぐらいしかできんかのう。あとは、この店の店長として、品物を仕入れるぐらいかの」

「困ったときは、相談に来てもいいですか？」

「もちろんじゃ。先々代から、先代をと、そして、先代から頼まれたんじゃ。いつでも来るといい」

「はい！」

その後、教師をやることになったことの相談をしたり、リストの物を購入し、私の倉庫に入れ、店の手伝いをし、お店を後にする。

### 38話（後書き）

祐依の協力者の一人、久瀬君は若いので、魔道具屋の店主を年配の頼れる協力者にしてしまいました。

### 39話（前書き）

サブタイトル、脱字修正

### 39話

side 祐依

買い物と、手伝いを済ませ、商店街を歩いていると、前方に以前見かけた女の子が・・・

今日も買い物袋を抱え、歩いている。  
近づき、声をかける。

「栞ちゃん、久しぶり」

「あ、祐依さん、お久しぶりですう」

以前、タイヤキ少女に連れまわされた時に会い、あゆと一緒にいらかった女の子である。

「今日も、買い物？」

「はい、今日は、買いすぎなかったので、平気ですう」

初めて会った時、別れた時に買い物袋の重みで、フラフラしていたのである。

「そう、買い物してるってことは、体調いいみたいね」

「！ はっ、はい。大丈夫です！」

体調を尋ねたら、一瞬ためらうように、返事がもった。

やっぱり、栞ちゃんは何かある・・・

ーッ！

これは！ 以前感じた、澱みのような、違和感を今度は、はっきりと感じた。

そんなことを顔に少しもださず、会話を続ける。

「それは、よかったわね。もし、よかったら今度遊びに行ってもいい？」

「はい、ぜひ、来てください」

「じゃあ、体調がよくて、都合のいい時にここに電話して。予定が合えば遊びに行くわ」

そう言って、プライベート用の携帯番号を教える。

「あ、じゃあ、私の番号も教えておきますう」

そうして、お互いの番号を交換する。

「あ、ごめん。午後から用事があるから、そろそろ失礼するわ」

そう言って、別れる。

「えうゝそれじゃ、また今度ですう」

「ええ、また今度」

栞と別れ、家路につく。

あの、違和感について、考えながら歩いていると、

「あ、祐依さん」

と、呼ぶ声がして、声がした方を見ると、あゆがタイヤキ屋の前で手を振っていた。

近くに寄って、話す。

「あゆあゆ、久しぶり」

「あゆあゆじゃないよ!」

そう、期待通りに返してくれる。

「あゆは、タイヤキを買いに来たの?」

「それもあるけど、今日はタイヤキ屋さんを手伝ってるんだよ」

「それは、アルバイトかしら?」

「手伝って、その代わりにタイヤキを貰うんだよ」



「おじさん、アルバイト料が現品支給ですか？」

「おう、嬢ちゃんが、そういう風に頼んできたんだ。前にアルバイトを募集したら、応募してきてな」

「そうだったんですか。ご迷惑をかけていませんか？」

「いや、助かってるぐらいだ。休憩の時にタイヤキを食ってんだが、美味しそうに食ってるからな、それを見た人が買っていてくれるんだ。売上が前より上がったよ。春休みが終わるまでだから、惜しいぐらいだ」

「そうですか。あゆも頑張ってるんだね」

「うん！ボクだって頑張るんだよ」

「そう、春休みもあと少しだけど、頑張ってるね。あと、おじさん、タイヤキ五つと一つもらえます？」

「？　おう、ちょっと待ってくれ・・・600円な」

「一つは、あゆが休憩になったらあげてください。私からの頑張ってるご褒美です」

代金を支払いながら、そう言う。

「おう、了解だ！嬢ちゃん。毎度！」

「じゃあ、あゆ、頑張ってるね。私は用事があるからもう行くけど」

「うん、祐依さん、ありがとう。ボク頑張るよ。またね」

「ええ、また」

そう言って、別れ、今度こそ、家路に着く。

### 39話（後書き）

伏線っぽいものを張ってみました。

## 40話

side 祐依

買い物の帰り道に、栞ちゃんやあゆと出会って、少々予定よりも遅くなったが、昼食には間に合った。

ご飯の前に、秋子さんにお土産のタイヤキを、名雪の友達が来た時に三人分出してくれるように頼んで渡す。

ご飯を食べ終えて、名雪と、来るという名雪の親友について、名雪の部屋で話をしていた。

「その友達って、どういう子なの？」

「うーんと、頭がよくて、運動が得意で、落ち着いている」

「ふーん、世の中には、そんな人もいるんだね」

自分も前二つは当てはまるが、置いておく。

・ピンポン

「あ、香里かな」

そう言って、玄関に向かっていく。

私は、若干面倒だったので、部屋で待っていた。

ちよつとすると、階段を上る音が二つ。

扉が開き、名雪ともう一人が入ってくる。

「いらっしやい」

そう言つて、迎える。

「香里、この人が前言つてた、祐依だよ」

「初めまして、名雪の親友の美坂香里よ」

ん？ 美坂？ どつかで、聞いたような・・・

「こちらこそ初めまして、名雪の従姉妹の相沢祐依です」

簡単な自己紹介を済まし、あとは、ガールズトーク？が始める。

「香里さん、名雪って、学校でどうなの？ 家では、寝てばかりなんだけど」

「そうね、授業中でも、よく寝てるわね。でも、以前に寝たまま、問題に答えたこともあるし、実習で、寝たままやって、勝ったこともあるわね」

「か、香里」

名雪が止めようとするが、遅く答えられてしまっていた。

その後も、途中で、秋子さんにタイヤキと飲み物をもらい、おしゃべりは続く。

その中で、私がこの街で再開した人や出会った人の話をしていたら、ある人の時に、一瞬香里ちゃん表情がくもったが、それに気づかないフリをした。

途中で、携帯の番号を交換したりしながら、数時間にわたって、おしゃべりが続いたが、香里ちゃんが帰ることになり、私は、散歩がてら、途中まで送っていく。

以前に栞ちゃんと話していた時に、お姉ちゃんがいると、言っていたことがあったので、

私はあることを、尋ねる。

「ねえ、香里って、妹がいる？」

真面目な顔をして、呼び捨てで、問う。

「私には、妹なんていないわ」

顔には、出さないが、わかってしまった。

「そう…」

その後、香里さんと別れる。

『アーチャー、栞ちゃんと香里さんは、間違いなく姉妹だよね』

『ああ、魔力の波長が似ているからな。おそらく間違いないだろう』

『嘘をつくってことは、何かあるんだろうね。今日初めて話しただけだから、確証はないけど、あれは、なにより、自分を騙そうとしている感じがした』

『ふむ、私も概ねそのような感じだ』

『原因の一つは、栞ちゃんの病気』

『やはり、マスターもわかっていたか』

『ええ、あれは、体内の魔力が過剰になっていて、それが上手く外に出せず、循環ができてない』

『そう。それで、彼女の体に悪影響を与えているのだろう。マスターのことだ、何か考えているのだろう？』

『もちろん。病気を治す。今度、家に行つて、まずは、親御さんに話す。わかってもらえたら、ちゃんと検査して、絶対に治す！』

『マスターの意思なら、私は止めはせんよ』

『ありがとう、アーチャー』

アーチャーとの念話を終え、家路に着く。



40話（後書き）

この物語では、琴が姉のことを話していた描写はありませんが、描写していない中で、話していたことにしてください。

このことを、今回書いていて、忘れていたことに気づきました。

$$\wedge ( \neg ) \vee$$

## 41話

side 祐依

夜にまた、学校を訪れ、女生徒と彼女のいう魔物を探す。

探すこと数分、女生徒の反応を見つけた。

そこから、大分離れた所に、魔物？の反応を見つける。

どうやら、女生徒の方へ向かっているようだ。

「？リンク・アーチャー・セイバー・サモン？」

二人を召喚し、魔物？の調査、及び足止めを頼む。

「了解だ、マスター」

「わかりました」

二人を見送り、私は、女生徒の方へ向かう。

「見つけた！」

女生徒は、以前と同じように、剣をたずさえて、立っていた。

「…何？」

「あなたの名前は？ 私の名前は相沢祐依」

「…川澄舞」

『マスター、セイバーが交戦を始めた。私は、援護をしつつ、調べている』

と、アーチャーから念話が入る。

『そのまま、足止めをお願い。何かわかったら、連絡して』

さてと、こちらも・・・

「あなたは、どうして戦っているの？」

「…私は魔物を討つものだから」

「それは、なんで？」

「…魔物を倒さなきゃいけないから」

「魔物と何かあったの？」

「…あつては、いけないから」

『マスター！こいつらは、魔物…いや、ただの生物じゃない』

『どういこと？』

『こいつらは、マスターの目の前にいる女生徒と似た感じがする。  
おそらく、女生徒の力だ』

『そう、ありがとう。二人は、こっちに戻ってきて』

そう、念話を切る。

「舞さん、あなたが言う『魔物』は、あなた自身の力よ」

「…どうしてそう言うの」

「さっきまで、私の仲間が此処に来れないように足止めをしてもらっている時に調べてもらったの。」

舞さんと同じような、反応がしているし、舞さんに、向かっているのは元に戻るため」

「…違う。私はそんな力を持っていない」

「いいえ、違くないわ。なにより、舞さんと魔物が繋がっているんだから」

「違う。そんな力を持つてる人なんていない」

「それね」

・ピシ

魔物が来たようだ。

舞さんが剣を構える。

魔物は、動かずにたたずんでいる。

「舞さん、あなたは、昔にその力を使い、そして、周りの人に忌避された。あなたは、その力が無くなればいいと思い、力は外に出された。けれど、力は舞さんに戻ろうとしている。こんな形をとって」

「…私はそんなの知らない」

「嘘じゃないわ。それは、この子が教えてくれたんだから」

そっいつて、魔物を指さす。

そこには、小さい舞さんがいた。

「こんな力、普通の人は持っていない！」

「ええ、そうね。人は自分と違うものを避けようとする」

「じゃあ、この子が私の力なら、どうすればいいの?！」

「…それなら、私はもっと、普通じゃないわ」

「どういこと?」

「私はね・・・」

結界を張る。

床に手をつき、錬金術で、剣をつくりそれを壁に投擲する。

そして、‘倉庫’から、ただの銃を取り出し、剣に向かって発砲。弾かれた剣を風を操り、引き寄せる。

「結界に錬金術に魔術、それに・・・」

「＜聖なる翼　ここに集いて　神の御心を示さん　エンジェルフェザー＞」

天使術を発動。

剣を手にし、腕を軽く切る。

「＜癒しの力よ　ファーストエイド＞」

治癒術で、傷を治す。

「＜山海を流浪する天の使者よ　契約者の名において命ず　出でよシルフ！＞」

召喚術で、風の精霊を召喚する。

そして、精霊にはすぐに帰ってもらおう。

「＜刃に更なる力を　シャープネス＞」

剣を補助魔術で強化し、再度投擲し、壁に刀身が埋まるくらいにする。

結界をとぎ、元通りにし、舞さんに向き合う。

「どう？私の方が、普通じゃないわよ。それでも、自分を認めない？」

様々なことをし、私の異常性を見せる。

「……わかった。おいで」

小さい舞さんが、舞さんに向かって飛びつき、体の中に入っていく。

「まだ、若いんだから、そんな簡単に決めつけないで、悩みなさい」

「……わかった」

「じゃあ、私が言ったことを忘れないでね」

そうして、別れを告げて、家路に着く。

#### 41話（後書き）

舞さんの問題を解決？

佐祐里さんと、どうやってからませよう・・・

いつにも増して、わけがわからないものに・・・



## 42話

side 祐依

夜の少女の問題を解決？した、次の日。

栞ちゃんから連絡が来て、今日遊びに行くことになった。

「思ったより早かったわね」

誰に言うでもなく呟く。

‘倉庫’から国家錬金術師の証である、銀のロケットを取り出し、ポケットに入れる。

栞ちゃんの家に遊びに行き、色々お話をしたりして過ごした後、栞ちゃんが離れた隙に、母親にコンタクトをとる。

「私はこういう者です」

そう言って、銀のロケットを見せる。

「え？ いったいどうして家に？」

「お嬢さん、栞さんのことで、ちょっと・・・」

「栞がなにか？」

「ちょっと、お話があるので、今晚、旦那さんと話せる場を設けてもらえませんか？お嬢さん方は抜きで」

「わかりました。夫に連絡をしてみます」

そう言つて、連絡をとる。

数分後

「大丈夫です。今夜にお願いします」

「念のためにここでなく・・・百花屋でいいですか」

「はい、それで結構です」

「ご両親との会談の場を設けることに成功した。」

その後、再び、栞ちゃんとおしゃべりをして、夕食前に家に戻った。

夕食後、約束の時間に合わせて、家を出た。

百花屋につくと、栞ちゃんのご両親がすでにいた。

「遅くなって、すみません」

席に着きながら、謝罪する。

「いえ、私たちが早く来ただけですから。約束の時間まで、余裕はまだありますよ」

そう、父親が言う。

「そうですか」

私は、コーヒーを注文し、コーヒーが来てから、認識阻害と隠蔽の結果を張る。

「これは？」

母親が尋ねてくるが、

「これは、周りに聞かれないようにするためのものです。特に気になくて結構です。さて、本題から入りますが、お子さんの栞さんの病気についてです」

「わかるんですか？！病院で検査しても何もわからなかったんですよ」

「はい、今日会って、確信しました。それと、この街の病院には、魔道科の医師がいませんから、おそらく、普通の検査ばかりだったんでしょう」

「あの、魔道科とは一体？」

「あ、それは、科学でなく魔術方面での治療や処置を行うものです。簡単に言ってしまうえば、物語に出てくる呪いの解呪というのがわかりやすいですかね。呪いは現在、ほぼ廃れたためにないですけど」

「それが、栞と何の関係が？」

「栞さんは『慢性魔力過多症候群』という生まれつき魔力を体内にため込みやすいんです。それなのに限界量が、一般人に比べて少しは多いという程度で、慢性的に体内の魔力が過剰になっていて、それが上手く体外に出せず、体に悪影響を及ぼしているんです」

「それで、治せるのですか？」

「はい、治せます。一先ず、体内の過剰な魔力を魔術的処置で体外に出させます。その後、過剰にならないようにしてあげれば、問題はありません。それは、定期的に魔術などを使っていたいて、体内の魔力を消費していけばいいんですが・・・彼女は、魔術を使えませんよね？」

「ええ、体が弱いため、負担にならないように覚えさせていませんけど、どうしてそれを？」

「以前に似たような患者を診てきたんです。あ、私はちゃんと、医師免許を持っていますよ。話は戻りますが、そういった患者のために魔道具があるんです」

「何かあるんですか」

「はい、自然界で、魔力がたまつて、魔石ができますよね。一流の魔術師は自分で作る人もいますが、それを、体内の魔力を『慢性魔力過多症候群』の方用に体内から、一定量魔力を吸収し、ある程度溜まつたら、魔石を生成するんです。普通の方が使つても、できないことはないんですが、作るときに無茶をするように設定しないと、十分な魔石を作れないんですけどね」

「それは、高いんですか？」

「ええ、A Gで作っているんですが、ちょっとしますね」

「そうですか・・・」

「でも、できた魔石をA Gでは割と高く買い取ってますから、すぐにもとは取れますよ」

「そうなんですか、けど、何故、そんなに詳しくんですか？」

「誰にも言わないでくださいね」

そう念を押す。

「その魔道具は、創生の錬金術師こと、私、相沢祐依が作ったんです。それに、私はA Gの関係者なんです。だから、創生の錬金術師が創ったものの殆どをA Gが販売しているんです」

「そうだったんですか・・・そんな方がどうして、うちの棗のために？」

「それは、そういったもので苦しんでいる人を無視できないのと、  
栞さんにお姉さんがいますよね？」

「ええ、香里のことですか？」

「はい、香里さんに先日、従姉妹の名雪の紹介でお会いし、色々とお話しました。その中で、私がこの街に来て出会った人で、栞さんの話をしたんです。その時に香里さんの表情が一瞬くもったんです。その後、香里さんに妹さんがいるか尋ねたら、否定されたんですけど、その時に自分を無理やり騙している・・・そんな感じがしたんです」

「確かに、栞の病状が悪くなってから、香里の栞に対する態度がおかしかったが・・・」

「それです。自分を無理やり騙そうとしている。そんなことをして欲しくない。だからですかね」

「そうですか・・・いえ、ありがとうございます」

そう言って、二人が頭を下げる。

「いえ、まだ、何もしていません。頭を上げてください。治療をするなら、どうします？早い方がいいですよね？」

「はい、ぜひ、お願いします」

「じゃあ、栞さんと香里さんに軽く説明して、栞さんに同意を得てください。私は、あと一時間程、ここで、名雪の勧めていた、イチゴサンデーを食べていますから。それと、これが、私の連絡先

です」

私の連絡先を教える。

そうして、二人が出て行ったあと、イチゴサンデーを食べながら、待っていた。

## 42話（後書き）

栞の病気を直せるものにして、健康になってもらいます。

作者が病気で入院したから、ちゃんと治ってほしいと、作者の私情が入っています。



## 43話

side 香里

夕食後、お父さんとお母さんが誰かに会つと言って、真剣な顔をしてお外に出て行った。

私は勉強していると、

- ガチャ

「ただいま」

二人が帰ってきた。

「お帰りなさい」

玄関に行き、二人の表情を見ると、安堵したかのように、幾分表情が和らいでいた。

「香里、話がある。ちょっと、座ってくれるか。お前は栞を呼んできてくれ」

そう父さんが栞の名前を出し、私は席を離れようとしたら、

「香里！大事な話だ！座っている！」

普段は温和な父さんが珍しく、大きな声を出した。

私は席を離れることができなかった。

数分後、母さんが栞を連れてきた。

私は、栞の方を見ようとせず、父さんに話しかける。

「お父さん、話って何？」

「栞の病気のことだ」

- !

私は反射的に目を逸らす。

「私の病気ですか？」

「ええ、そうよ。さっき、私たちが会ってきた人が、栞の病気のことを知っている人でね。その人なら、栞の病気を治す方法を知っていて、私たちが話を聞いてきたのよ」

「栞の病気がなおるの?!」

私は、栞よりも早く反応してしまった。

栞は、驚きからか、絶句している。

「ああそつだ。栞の病気がわからなかったのは、普通の病気じゃなかったからだ」

「普通の病気じゃない？」

「そうよ、その人曰く、栞の病気は『慢性魔力過多症候群』って言う、魔道科の病気らしいのよ」

「魔道科？」

「そう、その人が言うには、………と言うものらしい」

お父さんの説明は、聞いたものをそのまま話そうとしたのか、ちょっとおかしかったが、

「その人は、本当に信用できるの？」

私は父さんが前に騙されたことがあり、その人を疑った。

「ええ、大丈夫よ。身元がはっきりしている人だから」

「本当に、本当に栞の病気、治、る、の？」

私は涙を堪えながらきいた。

「ああ、栞、そのためには、検査や、道具の準備などがあるそうだが、受けるか？それはお前が決めなさい」

「えう！……わかりました。受けます」

「そうか、母さん、連絡を取ってもらえるか」

「わかったわ」

そう言つて、お母さんは、どこかに連絡を取っている。  
おそらく、その話の人だろう。

「すぐに、検査をしてくれるそうよ」

電話をおいた母さんがそう言った。

「お母さん、その人はどんな人なの？」

「あら、言つてなかったかしら」

「おお、そういうば言つてなかったな。お前たちの知り合いだよ。  
本人に直接聞きなさい」

「私たちの知り合い？」

「えう？誰でしょう？」

私たちは、揃つて、首をかしげていた。

その時、私は、栞とごく自然に、話していた。

十数分後、

・ピンポーン

チャイムが鳴った。

「お、来てくれたようだな」

お父さんがそう言うと、母さんが玄関に出迎えに行った。

そして、母さんに連れられて入ってきたのは！

#### 43話（後書き）

家族会議でした。

## 44話

side 祐依

美坂夫妻を見送った後、以前に名雪に勧められたイチゴサンデーとコーヒーのおかわりを注文をする。

イチゴサンデーを食べ、コーヒーを飲む。

イチゴサンデーを食べ終えて、コーヒーを飲んで、一息つく。

その後、美坂夫妻に聞いた栞ちゃんが通っている病院に連絡を取る。院長先生に、身分を明かしてわけを話し、治療を行うことの許可を得る。

今後、この街にいる間、こういった場合に手伝うことを条件にされたが、治療を行うための一室と、術後の部屋の用意をもらった。

ちなみに、院長先生は、魔道科の存在は知っていたが、魔道科の医師が、世界的に見ても数が少なくどうしようもなかったそうだ。

それで、普通の医療で診ることしかできず、病気の原因がわからなかったようだ。

なので、普通の医療では延命がギリギリできる程度で、その限界も近かったようである。

院長先生は、元錬金術師で、現在は医師に専念し、院長になったそうだ。

院長に話を付けた後、栞ちゃんの為の魔道具の作成というか、‘倉庫’に入れていたものをプレスレッド型に改造し、最後の調整だけにする。

コーヒーをもう一杯おかわりをしようか悩んでいると、連絡が入った。

私は、会計を済ませ、美坂家に向かう。

美坂家に着き、インターホンを鳴らすと、母親が出迎えてくれた。

リビングに案内され入ると、

「「祐依さん！！！」」

香里さんと栞ちゃんが、近所迷惑について考えなければいけないくらい大きな声で、名前を呼ばれたので、

「はい、そうですよ、祐依さんですよ」

と、半分ほどふざけて、返してみた。

「祐依さんがどうして？」

「それはね……」



銀のロケットを見せ、

「私が、ご両親が話していた人、国家錬金術師だからよ」

「「ええ〜！？」」

「落ち着いて、二人とも。祐依さんの話がまだあるのよ」

と、母親が落ち着けてくれた。

「じゃあ、もう一度説明するわね」

そうして、説明をした後、再度、栞ちゃんに確認する。

「栞ちゃん、治療を受ける？」

「はい、お願いします」

「わかりました。創生の錬金術師の名に懸けて、病気を治しましょう。では、まず、検査をしたいので、一室貸してもらえますか？」

「その客間を使ってください」

「はい、あ、私が栞さんの検査をした後に病院で処置を行うので、準備をしておもらえますか？」

「わかった」

家族に頼み、準備してもらおう。

そうして、客間で検査で使う機材を、倉庫から取り出し、準備する。

「栞ちゃん、最初は仰向けに寝てくれる？今の体内の魔力の状況を調べるから」

「わかりました」

そうして、後に、限界魔力量や、魔力吸収量を調べる。

「これでOKね。じゃあ、あとは、病院でやるんだけど、まだ、準備の方が出来てないから、一時間ぐらいしたら、病院に来てくれる？」

「はい、わかりました」

「じゃあ、先に行って準備してるから」

美坂家を後にし、誰も見られていないことを確認すると、病院の近くに転移し、病院に入り、院長に取り次いでもらい、儀式の準備をする。

院長先生には誰も近づけないようにしてもらい、私はキャスターと共に、準備を終わらせる。

後は、来るのを待つだけしておく。

待っている間に、さつき検査した情報をもとに魔道具の最後の仕上げをする。

## 45話

side 祐依

病院で、人払いした一室で、院長とMADな会話をしていると、受付から美坂家が到着したと連絡が入り、迎えに行く。

「ようこそ、準備はできています。こちらへどうぞ」

儀式の準備をした部屋の前へ案内する。

部屋の前で、院長先生が待っていた。

「こんばんわ、今日は彼女が行います」

常連？なので、簡単な挨拶を行う。

「では、栞ちゃん、今から、体内の過剰になっている魔力を少し多めに体外に出すための儀式を行うけど、準備はいい？」

「は、はい」

「緊張しなくてもいいわよ。みなさんは、危険なのでここで待っていてください。中に入るのは、栞ちゃんと私と中にいるキャスターさんだけです」

「ちょっと、危険なの？」

「ええ、この儀式は、体内の魔力を排出させます。栞ちゃんは体内

の魔力が過剰になっているため、排出させる魔力の量も多くなりま  
す。その分、室内の魔力が多くなるので、今度は、周りの人が危な  
くなるんです」

「じゃあ、栞は大丈夫なのね？」

「はい、私と私の仲間のキャスターさんは、この術式を作った人で  
すから。未熟な人ならわかりませんがね」

と、未熟な人が使うのは危険とくぎを刺しておきます。

「栞さんの安全は保障します。私たちが出てくるまで、決して扉を  
開けないでください」

そう言つて、栞ちゃんと部屋に入り、扉に鍵をかける。

「キャスターさん、儀式の準備はいい？」

そう確認を再度とる。

「ええ、大丈夫よ。私を誰だと思っているの？」

「最後の確認ですよ。信頼してますから、キャスターさん。じゃあ、  
栞ちゃん、その魔法陣の真ん中に寝てくれる？」

「はい、わかりました」

部屋の中央に描かれた魔法陣の中心で横になる。

私たちは栞ちゃんを挟むように、魔法陣の外側に立ち、術式を発動

させる準備を行う。

「じゃ、いくわよ」

・フオン！

魔法陣が発動し、栞ちゃんの体内の今まで体内に溜まり、澱んでいた魔力が放出される。

「クツ、多いわね」

調べておいた通り、澱んだ魔力が多かったが、無事排出される。

「キャスターさん！」

「ええ、わかっているわよ」

そう言つて、部屋の隅にあらかじめ用意しておいた別の魔法陣が発動される。

発動された、魔法陣に部屋に溢れていた魔力が集められる。

・カッ！

一瞬、光り、光が引くと、魔石が出来ていた。

「栞ちゃん、一段階目は終わったわ。次にこのブレスレットをつけて」

ブレスレットを渡す。

「どうですか？」

「そう、最後の仕上げね」

今回は、出来た魔石も使って、栞ちゃんの魔力を登録し設定する。

「パチン！」

「はい、これでOKよ。念の為に今晚は、入院してもらうけど、何もなければ明日の昼には退院できるから、三日後の入学式に間に合うわよ」

「本当ですか？祐依さん、キャスターさん本当にありがとうございます」

「いいわよ、これは、マスターの指示だもの」

「じゃあ、後はご家族に」

鍵を開け、出ていく。

その時にキャスターは戻っていく。

「無事に終わりましたよ。どうぞ、中に入っても大丈夫ですよ。では、院長、あとは話したように」

「わかってますよ」

「私も、万が一に備えて、今晚はここに泊まるから」

「ええ、栞さんの隣の部屋に泊まってください。それと、あれは」

「ええ、また後日に。ちょっと、疲れたから、休むわね。何かあったらすぐに呼んでね」

そう言って、院長と話し終わり、あてがわれた部屋に行き、休むことにする。

#### 45話（後書き）

栞の病気は無事治りました。

治すのは、病気もちの作者の完全な私情です。

Kanonのキャラで書こうと思ったときに主人公よりも先に形は未定でしたが、絶対に完治させようと考えてました。



## 46話

side 祐依

栞ちゃんの病室となる隣の部屋に入り、ベッドに腰掛け休む。

「感動の場面でも、やってるかしら」

治らないと言われてきたのが、こうして、治ったんだから家族全員が喜んでるかしら？

しばらくすると、隣の病室が騒がしくなった。  
どうやら、病室に来たようだ。

先日購入した、三日後に始まる新学期から、使う教材を、倉庫、から取り出し、読んでいると、

・コンコン

扉がノックされる。

何か起きたのかしら？

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは、香里さんだった。

「どうしたの？ 栞ちゃんに何か起きたの？」

「いえ、違います…その、妹の栞を治してくれて、ありがとう」

「いいわよ、そんなに気にしなくても」

「でも！」

「夜の病棟だから、静かにしてね」

「！ わかりました」

「一つ聞いてもいいかしら？」

「何かしら？」

「私が初めて会ったあの日、帰り道で妹がいるか、って尋ねたわよね」

「ええ」

「その時、どうして、自分を無理やり騙そうとしながら、妹がいなくて言ったの？」

「それは…、栞から、栞の病気から逃げたの。あの時、治らないって言われていて、それで、妹が、栞がいなくて、思い込もうとしてたの。いなければ、傷つかないですむって考えてたの」

「そう、今はどう思っているの？」

「それは、栞にひどいことをしてきたって思ってるわ。自分の都合で、いないってことにしてきたんだから、栞の方がもっと辛かっただろうに……」

「反省しているの？」

「ええ、もう二度と、あんなことしないわ。今までの分もつと大切にするわ」

ふむ、そろそろいいわね。

・パチン、

指をならす。

「入ってきて」

そう言う。

「え？」

病室の壁の一部が扉になっていて、その扉から入ってきたのは、

「お姉ちゃん」

顔を嬉し涙でいっぱいにした、栞ちゃん。

「さあ、あとは、二人でゆっくり話してなさい」

そう言つて、二人の背中を押して隣の病室に押し込み、錬金術で壁を直す。

あとは、本人たちだけのことだからね。

内線で、院長に連絡する。

「院長先生、大成功」

「そうか、成功したか」

「ええ、ちゃんと壁も元通りにしたから、協力ありがとう」

「なに、これぐらいなんてことないよ。これぐらいのサプライズがあつた方が、いいだろう」

内線の向こう側で笑っている声がしている。

「今、そっちに行つても大丈夫？今後の打ち合わせをしたいんだけど」

「ああ、大丈夫だよ。場所はわかるかね」

「ええ、じゃあ、そっちに向かうわね」

内線を切り、部屋を後にする。

二人には、今までよりも仲良くなってほしい。

私は協力してくれた院長先生に恩返しをするために、院長先生のもとへ向かう。

## 46話（後書き）

姉妹は仲直り？

## 47話

side 祐依

翌朝、栞ちゃんを再度検査したが、体のどこにも異常がなかったの  
で、無事に退院できた。

「よかったわね。これからだからね」

「はい」

「じゃあ、また学校であえるかもしれないわね」

「祐依さんも、通ってるんですか？お姉ちゃんは、言ってませんでしたけど…」

「ええ、私はこの四月からだから」

「そうなんですか。じゃあ、会いに行きますね」

「ええ」

会いに来なくても、会えるけどね。

「何か言いましたか？」

「気のせいよ。じゃあ、香里さんと仲良くね」

ちょうど迎えに来たご両親に軽く挨拶をし、別れ、家路に着く。

ふう、何か最近とゆうか、この街に来てから、すごく濃い生活の気がするのは気のせいかしら？

家に戻ってから、そう思う。

名雪は部活、真琴は遊びに行っていて、家にいない。

静かな部屋で、ゆっくり、本を読んでいると、

「祐依さん、今よろしいですか？」

秋子さんに呼ばれ、下に降りていく。

「どうしましたか？」

「学校のこと、新学期は、明日から始まるんですけど、その日は入学式の準備などなので、次の日の入学式の全校生徒がそろっている時に紹介しようと思うんですけど、それでいいですか？」

「え、はい、わかりました」

「それで、明日の午後に会議があるので、午後に私と一緒に学校にきてもらえますか」

「いいですけど、午後からでいいんですか？」



「はい、準備は在校生が行うので、教師は殆ど仕事がありませんし、まだ紹介していないから、色々あるんですよ」

「そうですか…わかりました」

「用はこれだけですから、ゆっくり休んでいてください」

「はい、じゃあ、失礼します」

そう言っ、て、部屋を出て、自分の部屋に戻る。

そういえば、誰にも私が教師をやるって知らないわね…

知っているのは、秋子さんや大人を除けば久瀬君ぐらいねえ…

まあ、そっちの方がおもしろいわよね！

最近忙しくて、ゆっくりできなかったから、のんびり過ごしますか・  
・

#### 47話（後書き）

短いですが、区切りがいいので、ここで切ります。

次回から、学校編？です。

## 48話（前書き）

今回から学校編です。

本文、あとがき加筆です。

- 3月22日

## 48話

side 祐依

みなさん、こんにちは。今、入学式が行われています。

入学式の後で、新しくこの学校の先生になった人や、辞めさせられた人員の変わりになった人の紹介が行われます。

なので、私は、舞台そでに控えています。

理事長の正体は、生徒には秘密だそうで、秋子さんはいません。

「相沢先生、大丈夫かの？」

「はい、これぐらい、何ともありません」

十六歳で教師をやることになった私を思ってくださいてか、声をかけてくれたのは、幸村俊夫先生。

今年度で、退職される古文教師。

噂では、若いころは熱血教師だったらしく、数々の武勇伝を残しているらしい。

今では、生徒を思いやる素晴らしい先生である。

「ほっほっほ。それはよかったの。相沢先生は今までにいろいろあったと思うが、まだまだ若い。遠慮なく周りの人を頼りなさい」

「はい。その時はお願いします」

「ほっほっほ。わしもできる限り手をかそう」

幸村先生と話していると、入学式が終わったようだ。

「相沢先生は最後に合図をしたら出てきてもらえます?」

「わかりました」

今度は、新校長先生が声をかけてくる。

初老の男性で、この人も錬金術師協会に關与していた人物だが、今では普通の校長先生として働いていた。

偶然この学校に配属され、協会に協力を求められた人であり、私と状況が若干似ているからか、よくしてくれる。

「相沢先生が、今回の一番のサプライズですから。期待してますよ」

「ちよっ！ 聞いてないんですけど!？」

訂正、若干イタズラ好きである。

だが、それが、様々な人に好かれる要因になることが多く、前校でも生徒にも好かれていたらしい。

「ふっふっふ」

そう言って、行ってしまった。

紹介が始まったが、私が呼ばれない。

私以外の人の紹介が終わって、校長以外降壇してしまった・・・

「では、最後にもう一人… 皆さん驚くと思いますが、静かにしてくださいね。相沢祐依先生です！」

え？ 何これ？ これで行くの？

呼ばれたので、逃げることもできず、出ていく。

出ていくと、全体がざわめく。

校長先生の隣に立つ。

「えー、相沢先生は、まだ、十六歳ですが、彼女は正式な国家錬金術師です。今回は、キチンと錬金術師協会に確認しています。前年度にいた人の代わりに教えてくださるそうです。担当は、二年B組の副担任と魔法学と、戦闘学を教えてもらいます」

校長に紹介され、挨拶をさせられる。

生徒のざわめきは、ますます大きくなっている。

「はい、ご紹介にあずかりました、相沢祐依です。去年は、国家錬金術師を騙る錬金術師のせいで、ご迷惑をおかけしました。その謝罪を兼ねてこの学校で教師をやることになりました。期限はいつまでかはわかりませんが、よろしく願います。最後に二つ。錬金術師はすべてがあのような者ではないと言わせてください。世の中

には、人のために活動している人もいます。それと進路で国家錬金術師を、錬金術師を目指している人はぜひ声をかけてください」

そう言っつて、お辞儀をし、校長に続きを促す。

「では、これで終わりにします。生徒の皆さんは、教室に戻ってください」

そうして、解散になって、生徒たちはざわめきながら、戻っていった。

「相沢先生。お疲れさまです」

「石橋先生…ありがとうございます」

教室でHRをするために石橋先生と歩いていると、そう言ってくれた。

「最初にああなるとは、思いませんでした」

「でしょうねえ。我々も、思いませんでしたよ」

舞台上校長に一人で挨拶させられるとは思わなかった。

解散になった後、生徒が詰めかけてきたのである。それは、まだ、HRがあるからと、各クラスの担任や体育教師、戦闘学の教師などが防いで生徒たちを戻してくれた。

「初日にこんなに疲れるとは…」

「まだ、H Rがありますよ。頑張ってください」

「はい、わかってます。その後は、職員室で職員会議ですよね」

「ええ。一週間ぐらい前に来た時に説明しただけで、よく覚えていましたね。理事長に聞きましたか？」

「いえ、私、記憶力がいいんです。だてに国家錬金術師を最年少でなっていますよ」

「そういえばそうでしたな。つと、着きましたよ。では、進まなくなると思いますから、合図したら入ってきてください」

「はい」

石橋先生が教室に入ると、騒がしかったが、「私の話は最後にする」と石橋先生が言うのと途端に静かになるクラス。最初に顔写真入りの名簿が作られる。

廊下で待っていると、その顔写真入りの名簿を石橋先生に渡され、他の作業をクラスでしているうちに、生徒の名前を憶えていると、その中に名雪や香里、あゆ、久瀬君そして、あの子の名前があった。

「私のクラスか…」



名前を憶えきつたところに呼ばれ、教室に入るとまた騒がしくなる。

「おい、さっさと静かにしないと、新学期早々特別課題を出すぞ」

石橋先生が言うと、再び静かになる。

「じゃあ、相沢先生、質問があるそうだから、あとお願いします」

教壇を譲られる。

「えー、じゃあ、質問どうぞ」

「はい、とりあえず、まとめたので、私から伺います」

そう、委員長になった香里さんが言う。

「改めて、お名前は」

「相沢祐依です」

「年齢と身長は」

「十六歳で、173CMです」

「使用武器は」

「えー剣、刀、槍、弓、銃… まあ、何でも使えますよ」

「得意属性は」

「強いて言うなら、風…ですかね」

「趣味と特技は」

「趣味は、読書と研究で、特技はやっぱり錬金術かしら。大抵のこととはできますよ」

「その年で、国家錬金術師というのは、本当ですか」

「ええ、ほら」

銀のロケットを見せる。

「なぜ、錬金術師に」

「えー、子供の頃によく家に来ていた人が国家錬金術師で、その人に色々と教えてもらっていたからです」

「その年で、どうやってなったんですか」

「えー、普通に試験を受けました。先生や協会のトップ曰く、私が『異常』だそうです」

「えー！？トップと知り合いなんですか？」

「はい、父と古い友人で、父を通して、知り合いました。その人に勧められて、試験を受けました」

・キンコンカンコン

「おつ、じゃあ、次で最後にしろ。まだ聞きたい奴は、明日以降個人で聞きに行け。今日は、この後会議だからな」

石橋先生がそう区切る。

「では、最後に相沢先生の二つ名は何ですか」

「…創生の錬金術師よ」

・ザワザワ！

クラスが一瞬で喧騒に包まれる。

「先生があゝ創生の錬金術師なんですか！？」

「ええ、そうよ」

「おし、これで、終わりだ。委員長、号令」

石橋先生が終わらせる。

「起立、礼」

そうして解散になる。

私は素早く、職員室に逃げた。



## 48話（後書き）

というわけで、学校編です。

### 人物紹介

・ 幸村俊夫 - CLANNADに出てくる先生

## 49話

side 祐依

職員会議が終わり、仕事を終わらせ、帰る準備をしていると、

「相沢先生、初日どうでしたか」

「あ、教頭先生。そうですね…やっぱり、質問攻めが大変でしたね」  
声をかけてきたのは、前校長など上層部と対立しながらも、生徒たちのことを大事に考えていた教頭先生である。

新校長にならないかと声がかけられたそうだが、辞退し今年度も教頭をしている。

「まあ、そうですね。国家錬金術師だけでもすごいのに、そのうえ、生徒たちと殆ど歳が変わらないですから」

「ええ、歳については心配していたんですが、生徒たちに受け入れられてよかったです」

「それは、よかったですね。ああそうだ、本題を忘れるところでした。再来週に武術大会があるのは、連絡しましたよね」

「はい、聞いております」

「それで、新任の魔術課の若い先生は希望制なんですが、戦闘課の若い新任は強制に参加なんですよ」

「え？ということは」

「参加になりますが、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。あのそれで、幾つか質問をいいですか？」

「ええ、答えれることでしたら」

「じゃあ、武術大会というのに、何故魔術科の先生に声がかかるのですか？武術に遠い人が多くありませんか？」

「ああ、それは、武術大会と言ってますが、魔術など自分が使えるものを全て使用していいんですが、個人戦なので、詠唱ができないことが多くて、必然的に武術が多くなりまして、いつの間にか、武術大会となっていたそうですよ」

「そうなんですか。たとえば、召喚をして戦ったりしてもいいんですか？」

「ええ、でも、召喚をできる人は後衛が多いですから、参加者は殆どいませんし、召喚中に攻撃されることが多いですね」

「わかりました。では、一番大事なことで、攻撃で、死人がでませんか？私の攻撃手段の中には、本当の殺し合いのものもあるので、そういうものは使いませんが、万が一のことを考えると心配なんです」

「そうですね…死人は今までに出たということはないですが、病院に緊急搬送された人はいます」

「では、安全面に少々難があると…」

「はい、残念ですが…大抵は武器を弾くなどで降参させる、審判の判定などで、決着をつけますが、怪我をする人が多いですね。切り傷や打撲など軽傷なら学校でも治療できますが、骨折など重症は病院に行かせますね」

「重症以上の怪我をなくすればいいですよね？」

「ええ、それができればいいんですが」

「…試合時間は何分ですか？」

「決勝戦は三十分で、他は二十分です。時間切れは決勝以外審判の判定で、決勝は大差がついていなければ、延長です」

「…最長で、三十分ですね」

「ええ、審判が判定の相談するためと、選手の状態を見るために一旦止めますから」

「教頭先生、AGの‘スケープゴート’ていう、数年前に発売された、こういった大会用の商品を知ってますか？」

「いえ、それは一体？」

「怪我を代わりに受けてくれる身代わりのものです。形はペンダント型で、カラーボールのような物がついていて、ある一定以上のダメージをつけると、壊れて、使用者の身を守ってくれる魔道具です。」



「そんな物があるんですか？」

「はい、ですが、疑似的な痛みはあります。死にはしない程度の痛みで、強力な攻撃ですと気を失うこともあります。それは、それを使用して、死なないからと言って、防御をおろそかにして攻撃を繰り返す。これを戒めるためですね。あと、一番大事なことです、正常に作動させるには特殊な結界内という条件があります。これは、犯罪者が使用しても、効果がないようにするためです。それと、持続時間が35分なんです」

「だいたいわかりましたが、35分とは中途半端ですね」

「大抵、こういった試合は30分が多いんです。死人が出ないようにと考慮し、コストを考えた結果35分になったんです。特注の物とさらに特殊な結界にすれば、時間を五時間以上に伸ばせますが、その分高いんですよ。まあ、普通のも結構しますが」

「そうですね。でもなぜその話を？」

「今年の武術大会で使いませんか？」

「ですが、高いのでしょうか」

「条件が幾つかありますが、通常よりも安く用意できますよ」

「ほう、その条件とやらは？」

いつの間にか、職員室にいた先生方がこちらに注目していて、校長が尋ねてきた。

「はい、それは、私が材料さえあれば、錬金術で作ります」

「それは、いくらぐらいかね？」

「用意する数で変わりますが、売られている物の半額くらいですね。結界は私が張れるので」

「わかった。それは、学校側で負担しよう。他は何かね？」

「私の個人的なお願いですが、空き部屋を二つ貸してくれませんか？」

「それは、なぜ？」

「私が簡単な研究や実験を錬金術師を目指す生徒に見せたいので、そのための部屋と準備をする部屋を借りたいんです」

「ふむ、それなら、こちらからお願いしたいものだ。国家錬金術師がせっかくいるんですからな。実習棟に倉庫と使っていない部屋がある。そこでいいかね？」

「はい、この二つが条件です。じゃあ、明日に武術大会の変更点に‘スケープゴート’の使用とそれが壊れたら、負けというルールの追加を生徒に伝えて、参加者の数を調べてください。それと準備があるので、締め切りを一週間前にしてもらえますか？」

「ふむ、いいだろう。では明日の朝の職員会で再度連絡をする」

「私は参加をお願いしますね。では、この後、用事があるので、そ

ろそろ失礼します」

「うむ、お疲れさん」

「お疲れ様です」

そう言って、先生方と別れ、ある場所に向かう。

## 49話（後書き）

武術大会をやってみます。

50話（前書き）

誤字訂正 - 3月25日

## 50話

side 祐依

職員室での話を済ませ、約束をしていた、あの子の家に向かう。

場所は、学校と水瀬家の中間ぐらいの距離の場所にあるアパートに住んでいる。

渡された地図を頼りに探すこと数分。

「あつた！これね」

そこにあつたのは、アパートと言うには、大きく、マンションと言  
うには、少々小さい建物だった。

私は教えてもらった部屋に向かう。

・ピンポーン

インターホンをならすと、

・ガチャ

「はい、ようこそ。祐依さん」

「こんばんわ、香澄」

出てきたのは、母方の従姉妹の名雪とは違う、父方の従姉妹にあたる、音無香澄である。おとなし かすみ

身長は154CM

髪はショートカットで、ブラウンの色をしている。

彼女の両親もAGで働いていて、世界中を飛び回っている。

なので、一人暮らしをよくしているので、家事が得意である。

なにより、彼女も私の協力者であり、よく助けてもらっていた。

今回は、外国の両親のところに行っており、関与していなかった。

「久しぶり、今回はごめんね」

家の中に入り、そう言ってきた。

「まあ、外国に行ってたお父さんが倒れたって言ったら、仕方がないって、で、大丈夫だった？」

「うん、まあ、食べ慣れないものを食べて、体調崩して、そこに疲れがきたんだって」

「それで、日本に帰って来なかったの？」

「いや、帰ってきたんだけど、ちょっとした休みが貰えたから、ゆっくり休めるように、温泉旅行の手配して行ってもらった」

「お金は大丈夫なの？」

「まあ、祐依さんの仕事を手伝って、もらった給金って結構な額だから、平気だったわよ」

「そう、でも、ずっと、一人で平気？」

「まあ、慣れちゃったし、それに、祐依さんがこの街に来てくれたし」

「そう、じゃあ今度遊びに来てね。もうすぐ、新しい私の家が建つから」

「あゝそう言えばそうだったね。いつぐらいに完成だったけ？」

「前もらった報告だと、今週末くらいらしいよ」

「はやっ！じゃあ、完成したら遊びに行くね」

「ええ、ぜひいらっしゃい。っともつこんな時間ね、そろそろ戻るわ」

「ええ、また明日、学校で」

「じゃあ、また明日」

そう言って、香澄と別れて、家路に着く。



家に戻ると、珍しく、名雪が覚醒していた。

「どうしたの？名雪、めずらしく、起きてるじゃない」

「祐依、なんで先生やるの黙ってたの！」

「えっ？聞かれなかったし」

「それに、祐依が国家錬金術師なんて、初めて聞いたよ！」

「それは国家錬金術師には守秘義務があるから」

「どうして、お母さんは知ってたの！」

「秋子さんは、この家の家主だし、先生をやることになったのは、秋子さんが原因だから」

そう、名雪の質問に軽く返事していると、秋子さんに夕食ができたと呼ばれ、名雪を先に行かせ、私は荷物を部屋に置き、着替えてから行った。

夕食を食べている間も、名雪や真琴に色々と聞かれたが、秋子さんと共にぼかしながら答えていった。

夕食が終わるころには、名雪はすでに夢の世界に行きかけていた。

お風呂に入り、明日の準備をしていると、

「祐依さん、少しいいですか？」

秋子さんが部屋に来た。

「いいですけど、何か？」

「初めての先生どうでしたか？」

「そうですね………」

と教頭先生に話したようなことを話した。

「それと、建設会社の人から、日中に連絡が入って、今週の木曜日に完成するそうですよ」

「予想していたよりも早かったですね」

「そうですね。何時ごろにあちらに移りますか？私としては、いつまでもここにいらしても構わないですが」

「そうですね、金曜日の仕事を終えた後に見に行つて、土曜日に引越します。次の日にゆっくり休みたいですし……あの家にはキッチンとした研究設備もありますから、この家では危険かもしれない研

究は出来ませんでしたから」

「そうですか… いつでも、遊びにいらしてくださいね。祐依さんも私たちの家族ですから」

「はい、ありがとうございます」

「あ、そう言えば、姉さんたちは何時ごろ来られるんですか？」

「あれ、聞いてませんでしたか？細かい内容は聞いてませんが、とあるプロジェクトが成功しすぎたらしく、外国に行っちゃいましてしばらく戻って来れないそうで、少しの間、あの家で一人暮らしですよ」

「一人で大丈夫ですか」

「ええ、大丈夫ですよ。一人暮らしは今までに何度も経験したこともありますし、家事もできますから」

「そうですか、いつでも家にいらしてくださいね」

「はい、わかりました。明日の準備があるのでそろそろ…」

「はい、それじゃあ、お休みなさい」

「お休みなさい」

そうして、秋子さんとの会話を終え、明日の準備をして、眠りにつ

いた。

## 50話（後書き）

人物紹介

おとなし かすみ

・音無香澄

高校二年生

154CMでブラウンの髪を短くしている。

祐依の従姉妹であり、協力者である。

## 51話

side 祐依

今朝も名雪を叩き起こす。

「真琴、あとお願いね。私、先に行かなきゃダメだから」

「えっ?! そんなの聞いてないわよ!」

「ええ、今初めて言ったから　じゃあ、遅刻しないでね」

「まっまちなさいよ」

私はそう言って、家を出た。

その時、後ろで何か言っていたのは、気のせいにした。

学校へ向かって歩いていると、舞ともう一人の女の子が歩いていた。

「舞さん、おはよう」

走り寄って、挨拶をすると、

「...誰?」

「ガクッ」

「何日か前の夜の学校で…」

「…思い出した、相沢先生」

「え？ そつち？」

「ぼんぼこタヌキさん、冗談、ちゃんと憶えてる」

「相沢先生、おはようございます」

「あ、おはようございます。え」と…」

「佐祐理、倉田佐由里です。舞の親友です。よろしくお願いしますね」

「こちらこそ、よろしく。佐由里さん」

三人で話しながら登校していると、

「舞さん、さつきから言ってる、はちみつクマさんとぼんぼこタヌキさんって、一体？文脈的に考えると、はいといいえを表しているぽいけど」

「それはですね、佐由里が前に舞がかわいくなるように考えたんですよ」

「そうなんだ、佐由里さんが考えたんですね。でも、初対面の人には通じないと思いますが…」

「大丈夫ですよ。相沢先生に通じたじゃないですか」

「大体ででしたけど…」

そんな話をしながら、学校に向かった。

職員室で朝の職員会の前に授業の準備をしていると、廊下が何か騒がしい。

「石橋先生、何かあったんですか？」

隣の席の石橋先生に尋ねると、

「ああ、それは相沢先生についてですよ」

「私ですか？」

「ええ、一つは、どこから情報が流れたかわからんが、早くも武術大会のルール変更と相沢先生が参加するということですよ。もう一つは、相沢先生が授業をするクラスが気になるんですよ。この学校は、職員室前の掲示板に一番早く掲示されるからですよ。今回は、相沢先生の時間割と言いますが、どのクラスの授業をするかも掲示されてるみたいですよ」

「そうなんですか…私が授業するクラスの顔写真入りの名簿をまず見せてもらっただけですが…」



「どうかしましたか」

「いえ、私の知り合いが全員入ってるんですよ。古い知り合いから、今朝知り合った人まで……」

「それは、すごいですね」

「何かあるんじゃないかと、疑ってしまっただんですが、偶然ですよ  
ね？」

「たぶん、そうでしょう。おつ、職員会が始まりますよ」

職員会が終わり、HRのために、クラスに向かう途中で、すごい  
視線を感じた。

「なんででしょう、このすごい視線は……」

「そりゃ、相沢先生目当てですよ。本物の国家錬金術師がいるんで  
すから、注目しますよ」

「そうでしょうか？」

そんな話をしながら、二年B組に向かい、HRを済ませ、私の魔法  
学の授業がこのクラスだったので、生徒たちから、質問されたりし  
ながら、待っていた。

## 52話

side 祐依

初めての魔法学の授業をするうえで、生徒にわかりやすいように、教科書に載っていることの実演をしている。

「-というようになりますが、何か質問はありますか？きりがいいので、今日の授業はここまでです。今の授業でなく、魔法学に関する質問なら、なんでもいいですよ。」

先生という立場なので、質問が無いか尋ねる。

「先生」

一人の生徒が手を挙げる。

「はい、なんですか」

「僕たちが生まれる前に魔力で動く乗り物があつたそうですが、無くなつてしまったのは、何故ですか？」

「うーん、答えるのは簡単だけど…三分あげます。四人一組で、理由を考えてみてください。正解したグループには、私特製のプリントを作りますよ。教科は問いません。希望する単元のプリントを個人に合わせて作りますよ」

「えー、プリントかよー」

「ふっふっふ、甘いわよ、国家錬金術師の私を甘く見ちゃだめよ。以前、作ったものが、正式に採用されて、参考書にも載っているわよ。それを、完全個人のリクエストで作るんだから。じゃあ、始めるわよ」

そう言つて、生徒に考えさせる。

「はい、終了。考えた推論を渡した紙に書いて出してください」

出された考えを読む。

「そうね、一番近いのは、魔力の枯渇ね。けど、正式に廃止された理由は、乗り物に乗っている途中で、魔力の運用を阻害する結果を張り、テロを行うグループがあつて、そのグループが飛行機でテロをやつて、エンジンが停止して墜落して百人以上の死者が出た事件を、その日に何件も起こし、おびただしい数の死者が出たの。その中には、偉い人もいたりして、安全面の不安から、利用者がいなくなつて、従来の科学を基にした乗り物が一般になったのよ。科学の方が、そう言ったことが起きないし、起こすには、直接乗り込まなきゃいけないから、デメリットが多いしね。近かつたグループは、もう一回近い答えを出せたら、プリントね」

- キーンコーンカーンコーン

「あら、チャイムね。じゃあ、今日の授業はこれでお終い。日直」

「起立、礼」

「じゃあ、次回もこういった機会があるかもしれないから、日常にも色々あるから、考えてみると面白いわよ」

そう言って、教室を出ていく。

その日は、他のクラスでも同じように魔法学の授業をやって、質問をまず、考えさせてから答える。をやったところ、どのクラスでも概ね好評だった。

放課後、教頭先生が声をかけてきた。

「相沢先生、授業はどうでしたか」

「そうですね、教えるのは難しいですね。先生方の苦勞の一つがわかった気がします」

「そうですね、でも、生徒たちの相沢先生の授業は好評ですよ」

「それは、ありがたいですね。色々工夫していきたいですね」

「張り切り過ぎずに頑張ってくださいね。そうそう、明日は相沢先

生の希望通り、時間割変更で、一時間めから六時間めまで、各学年の戦闘学の授業を入れましたが、大丈夫ですか？」

「ええ、最初の授業はアトラクションみたいな簡単な簡易ダンジョンで生徒たちのトラップに対する力や対応力などを見るだけですから」

「そんなもの、このあたりにありましたかな？」

「いえ、職員会の後に作るんですよ。実習で使う森の一郭に。校長や他の戦闘学の先生たちにも許可をもらってますし、他の先生たちにも、授業で使ってもらって、データを取ってもらいますよ」

「ふむ、怪我とかは大丈夫ですかね？」

「そうですね、普通にやれば、大きな怪我はあり得ませんよ」

「そうですね、相沢先生がそう言うなら大丈夫そうですね」

「とりあえず、トラップを数種類仕掛けます。奥に行くほど厄介になります、どれも、注意すれば対処できる穴がありますから」

「そうですね、完成したのを見てみたいです」

「一時間もあれば、できますから、職員会の後に見てみますか？」

「いえ、後日、生徒たちの声を聴いてから、見ますよ」

「そうですね。あつ、そろそろ、時間ですね。では」

職員会の後に森の入り口を封鎖して、誰も入れないようにしてから、アーチャーと作っていく。

「これで完成だが、簡単すぎないかね？マスター」

「まあ、これで、様子見ね。しばらくしたら、もうちょっと難易度を上げたのを作るから。その時は、またお願いね」

「ああ、了解だマスター」

片づけを済ませ、家路に着く。

## 52話（後書き）

授業の質問に対する答えは、作者のテキストです。  
書きながら、二・三分で考えました。

## 53話

a i d e 祐依

今朝も名雪を起こし、真琴に預け、先に学校へ向かう。

登校中、前にいるのは、真琴の親友の天野美汐ちゃんだ。

「美汐ちゃん、おはよう」

「あら、おはようございます。相沢先生」

「早いわね、いつもこんなに早いのか？」

「はい、大体これぐらいの時間ですね。あら？真琴と水瀬さんはどうしたのですか？」

「名雪を待っていると、朝の職員会に間に合わないから、真琴に預けてきた」

「そうですか、そうでした、相沢先生、今日の戦闘学の授業は何をするか尋ねてもいいでしょうか？」

「別にいいわよ。掲示板にも掲示してあるし。今日は、実習をやる森で、簡単なダンジョンをクリアしてもらおうわよ」

「あの森にダンジョンなど、ありましたか？中等部の時に何度か使



用した時には、気づきませんでしたか…」

「ああ、気づかなくて当然よ。私が昨日の放課後に森の一郭に作っただから」

「たった一晩ですか？」

「簡単なものだから、ぱっぱとできたわよ。怪我をしないように安全面も対策済み」

「そうですね… ではそろそろ、失礼します」

昇降口に近づき、私は教職員用の方へ行くために美汐ちゃんと別れる。

職員室で準備をしていると、

「おはようございます、相沢先生」

「おはようございます、校長先生」

「準備はどうですか？」

「大丈夫ですよ。考えうる限りの安全対策を施しましたから」

「そうですね。そういえば、武術大会が盛り上がってきましたよ。」

安全面の向上から参加者が増えそうですよ。予選を勝ち抜くのも大変そうですよ」

「予選は、どうやるんですか？」

「予選は、成績である程度均等になるようにして、バトルロワイヤルですよ」

「もしかしたら、私狙われますかね？」

「あ、相沢先生はシードで本選からですよ。相沢先生なら、まず間違いない勝ち抜けるでしょうから。それに、本選は保護者などの一般の方も来ますから、相沢先生を見たい人が多いでしょうから」

「それっていいんですか？」

「私や理事長の意見ですから。それに反対の人はいませんよ。生徒も本選出場枠が一つ埋まってしまいましたが、予選で相沢先生と戦わずにすむと喜んでいますよ。それに、一部の生徒は、一対一を望む人もいますから」

「なんか、すごいプレッシャーがあるんですけど……一回戦負けとかしたら目も当てられないですよね」

「大丈夫ですよ。相沢先生なら」

「なぜ、校長先生がそこまで言えるんですか？あゝ、今日の授業でちゃんと調べようかしら？」

「ダメですよ。キチンと授業をしてくださいね」

「わかってますよ…」

指定した場所です、一年生の生徒を待っている。

「はい、こちらにクラスごとに並んでください。掲示板を見て知っている人もいます、今日は皆さんの実力を調べるために簡単な私特製のダンジョンをやってもらいます。安全対策は考えなく限りしてありますから。これはあくまで、現在の皆さんを知るためなので、無茶をせずに頑張ってください」

そうして、一年、二年、三年と同じものを買ってもらい、他の先生にも二日かけて取ってもらったデータを職員室で見ていると…

「どうしました？相沢先生。難しい顔をして」

「あ、校長先生…前言っていたデータを見ていたんですが…」

そう言っ、データを見せる。

「最後までクリアして満点なのが二人しかいないんですよ…」

「ほう、二年の久瀬君と音無さんか…」

「満点ではありませんが、クリアした生徒が全部で四十人ほどで」

「トラップは全部で四つ。一つ目の入って数歩の落とし穴に半分以上の生徒が無警戒で落ちているんですよ。わざわざ、下に転移の魔法陣を張って、魔力を漏らしていたのに…」

「それは…」

「他のトラップも魔力が漏れていたり、注意深く見ていれば対処できる物ばかりなのに…」

「難しすぎたのでは？」

「ちょっと特殊な結界を張っていて、初めて入るダンジョンに…まあ今回は森をベースですが、警戒をしていないとトラップに気づきにくくしていましたが、はじめに安全って言う話をしたから、気を抜いたのかもしれませんが、ちょっと、ひど過ぎません？」

「うゝむ、確かに全体的にゆるんでおるのかの？」

「相沢先生」

「はい？」

話しかけてきたのは、戦闘課の先生である。

「私たちもこの結果はさすがにひどいと思います。今まで、実践と言ってきたのは殆どが、対人ばかりで、座学として、魔物に対する戦い方を教えるばかりで、こういったことをしなかったのは、私た

ち教師のミスです。また、こういったものを買ってもらえませんか」

「校長先生、どうでしょう?。」

「ふむ、今回ので、気づく生徒もおるだろうが、全ての生徒がわかるわけでもなからう。よろしい、許可する。相沢先生、定期テスト後にまたやってもらえるかの」

「はい、わかりました」

### 53話（後書き）

生徒の多くが戦闘を学ぶが、こういったトラップに対して警戒心が非常に緩いことが多そうなので、こういった結果にしてみました。

久瀬君と香澄は慣れで、罠を解除して安全を確保する癖がついていて、今回の罠も解除もしくは、破壊して、ダンジョンをクリアしたので満点です。

他の生徒は、罠を解除せずに進みクリアしたので二人に比べて、点数は低いです。

クリアできなかった人に比べれば、相当高いですが…

## 54話

side 祐依

今日も今日とて、名雪を叩き起こし、真琴に任せ、早く学校に行く。

今日は、知り合いには会わず、学校に着いた。

今日は、二・三時間目に授業をやった後、四時間目に授業がなかったから、以前にもらった部屋と倉庫の掃除をしていた。

倉庫の荷物は別の倉庫に入れ、私の‘倉庫’から、安全な荷物を置いていく。

簡易の実験室を作り終え、一休みしていると、四時間目が終わりそうだったので、学食で席が取れそうだったから、急いで学食に向かう。

学食に着くとチャイムが鳴ったばかりのはずなのに生徒がもうちらほらといった。

私は、アメリカンクラブハウスサンドセットを食べていると、

「相沢先生、席と一緒にしてもいいですか？」

「祐依、いい？」

「いいけど、名雪、従姉妹だといえ、先生を呼び捨てにしちゃダメよ」

「うゝ、だって祐依、朝私を置いてくんだもん」

「ちゃんとした理由になってないわよ。それに、名雪を待っていたら、私が職員会に遅れちゃうし」

「それは、名雪が悪いわね」

「香里もひどいよゝ」

「そう言えば、香里さん、栞ちゃんはどう？」

「おかげで元気にやっていますよ。今日は別ですけど、一緒にお弁当食べたりもしてますよ」

「それは、よかったわ。名雪はまたAランチなの」

「名雪は学食でAランチ以外食べないわよ」

「だって、これしか、イチゴがでないんだよゝ」

「あんたは、そればかりね」

「うゝ、祐依ひどいよゝ。イチゴサンデー」



「はあ？」

「奢ってくれなきゃ、祐依の晩御飯紅しょうが。紅しょうがのご飯に紅しょうがをかけて食べるの。飲み物は紅しょうがの汁だけ」

「あ、名雪、今日私、仕事の後に新しくできた家の下見とかに行くから、晩御飯いらないわよ」

「うっ、ひどいよ」

「何がひどいのよ…それと、早く食べないと午後の授業に遅れるわよ」

「うっ、香里、次の授業なんだっただけ？」

「相沢先生の戦闘学の授業よ」

「祐依と一緒に行けば大丈夫だよ」

「相沢先生なら、もう、行っちゃたわよ。どうでもいいから早く食べなさい」

「うっ」

午後の授業に名雪と香里はギリギリだった。

「はい、じゃあ今日は、模擬戦を行ってください。私は見て回るので何かあったら、声をかけてください」

そうして、半ば自習にし、生徒たちの模擬戦を見ていく。

しばらく見回っていると、

「相沢先生！」

「はい？何かしら北川君」

声をかけてきたのは、金髪で頭にアンテナが生えている、クラスのお笑い担当の北川潤である。

「俺と模擬戦してくれ」

「いいけど、少しだけよ。一人につきつきりになれないから」

「おう」

そうして、北川くと、模擬戦をやることになった。周りの生徒も注目している。

demiseを錬成し、大剣のillusionに変え構える。

「へっ 先生そんな獲物で大丈夫なのかよ」

「そういう北川君だって、大剣じゃない」

「なめんなよ」

そう言つて切りかってくる。

私ははじめは避けることにし、攻撃を避ける。

北川君はしびれを切らしたのか、間合いを空け、詠唱する。

「＜火の精霊よここに 炎よ ファイヤーボール＞」

「風よ！」

私は風を操り、ファイヤーボールの回りの空気を弄って消した。

「なっ！」

北川君は驚くが、戦場では一瞬の隙が命取りとなる。

「これで、終わりよ」

illusionを構え、能力を発動する。

北川君に切りかかる。

「へっ、甘い」

合わせて防ごうとするが…

すり抜ける。

「なっ?!」

そして、後ろから刃を突き付ける。

「これで、終わりね」

再度同じようなことを言う。

「先生、二つくらい質問してもいいか？」

「ええ、質問はいいことよ。恥ずかしがらずにどんどんきてください」

「俺の魔法が消えたのはどうしてなんだ？」

「あれは、風を操って、空気を減らして、燃えるための酸素が無くなれば、火は消える。それを利用しただけよ」

「あと、最後の攻撃がすり抜けたと思ったら後ろから刃を突き付けられたんだけど、あれってどうやったんだ？」

「あれは、この剣の能力よ。この剣はこの剣に刻んであるルーンで相手に幻覚を見せるのよ。だから名前がillusionっていうのよ」

「そんなもんがあるのかよ!」

「結構、出回ってるわよ。さてと、じゃあそろそろ見回るから、頑張ってるね」

そうして、北川君と模擬戦をした後、見回りを再開する。

その中で、

「先生！」

女生徒が声をかけてきた。

「さっきの火属性を先生が風属性の魔法で対処したみたいに、雷属性を水属性で防げませんか？」

「ふむ」

周りを見ると斉藤君が暇そうにしていたので、

「斉藤君ちょっといいかしら」

「何ですか」

「斉藤君、雷属性の魔法使えたよね？」

「ええ、使えますが」

「じゃあ、この子の質問に答えるために実験に協力してくれる？」

「いいですけど…」

「先生、水属性の魔法使えるんですか？」

「大丈夫よ、これを使えば」

別になくても使えるが、そこまで見せる必要はないので、ロープの懐から、水属性の魔石がはめ込まれた指輪を出し、指にはめる。

「じゃあ、斉藤君、お願い」

「はい、＜雷の精霊よここに 雷よ サンダーボール＞」

私は、‘水’の壁を作り、斉藤君のサンダーボールを防ぐ。

「どう？わかった？」

「水属性の魔法で防ぐ方法があるのはわかりましたけど、どうやったのか、わかりません」

「斉藤君はどう？」

「いや、わかりません」

「うーん、答えを教えてもいいんですけど、教えられるだけだと、自分で学ぶより伸びないから。ヒント、科学！水の特性をよく考えてね。よかったら、斉藤君も考えてみるといいよ。自分の得意としていた相手が変わるかもしれないんだから、自分も変わるために色々考えられるようにするために」

そうして、見回りながら、質問されたら、実演できるものは実演し、ヒントを与える。

## 54話（後書き）

解説

魔法

- ・ 初級の魔法の詠唱として<○の聖霊よここに ○よ ○○ボール>としました。○には属性の名前が入ります。
- ・ 初級の魔法として、○○ボールと属性のこもった球を飛ばすものにしました。



## 55話

side 祐依

職員会議の後、一週間の仕事を終え、一息ついていると、

「相沢先生、この後一杯どうですか？」

声をかけてきたのは、同じ戦闘課の黒木先生である。

「黒木先生、私はまだ、未成年でお酒は飲めませんよ」

「そう言えば、そうでしたな」

「お誘いは嬉しいんですが、それにこの後に私、引っ越すために新しい家の様子を見に行かなきゃいけないんですよ」

「そうですか、では、また今度、お酒抜きでみんなで食べに行きましょ」

「はい、お酒抜きなら、大丈夫ですよ。その時に誘ってください。では、そろそろ失礼します。お疲れ様でした」

「お疲れさん」

そうして、私は、新しい家の様子を見るために向かった。

「うっね」

外見は、普通の一軒家だが、中は普通じゃない。

紫さんに協力してもらって、広さが尋常じゃない。

研究室もあるし、訓練場もある。

冷暖房完備。

足がゆったり伸ばせる広いお風呂。

紫さんや色々なお客さんに対応できる客間が各種。

そのほかいろいろ。

もちろん、侵入者対策もばっちり。

不備はあり得ないだろうが、一応家の中を全て見て回ると、結構な時間になっていた。

秋子さんに夕食をいらないと、遅くなると言っている、大丈夫なので、駅前に行くことにする。

駅前のファミレスに入ると、

「あ、祐依さん」

「ん？」

呼ばれた方を向くと、香澄がいた。

香澄と相席し、海鮮グラタンを頼む。

「香澄、今晚は外食？」

「材料の買い置きを補充するの、忙しくて忘れちゃって。インスタントとかあったけど、外食にしたのよ。祐依さんは？」

「私？私は仕事の後に新しい家が昨日完成したから、明日引越す下見に来て、遅くなるだろうから、秋子さんに夕食はいらないって言ったから」

「あ、家完成したんだ。何時遊びに行つていい？」

「そうね、日曜日に引越し祝いをやるんだけど、来る？」

「行く行く！時間は？」

「とりあえず、お昼の十二時からと、夜の七時ね」

「二回もやるの？」

「昼は、名雪達で、夜は私の仲間や協力者の人たちを呼ぶんだけど……」

「私はどっちに行くべき？」

「両方来る？二食美味しいものが食べれるよ」

「両方行く！」

「そう、じゃあ、忘れないでね」

その後、注文した物を食べながら、おしゃべりして、送って行つてから家路についた。

送って行く時に巡回中のおまわりさんに補導されかけたが、私が教師をしていて、相談に乗っていて遅くなつたと説明し、以前、銀行強盗の際に警察署で会つた人だったので、私の事を知っていたため、軽い注意だけで見逃してもらつた。

因みにあの事件の後に引つたくりやコソ泥などを捕まえて警察署に何度も行っているために、殆どの警察関係者に私のことが知られている。

なぜか、私はよくそういつたことを見つけたり巻き込まれていたりもする。

## 55話（後書き）

新居は、八雲紫さんのおかげで、世の中の常識を無視したものとなっております。

けれど、それは、中に入ってもパツと見わからないようにしてあります。

普通の人に知られないようにするため。

## 56話

side 祐依

今日は土曜日で新居に引っ越すので、今日中に終わらせようと、昨日の夜に家に戻った後に大体の物を整理しておいて、夜明けとともに必要な物を‘倉庫’に入れたり、部屋の掃除をして、引っ越す準備を着々と進めています。

秋子さんと真琴との朝食後、‘倉庫’に荷物を全て入れ終え、真琴に手伝ってもらって部屋の掃除を終えました。

「真琴、掃除手伝ってくれてありがとうね」

「これぐらい平気よ。あの約束忘れないでよ」

「ええ、わかってるわよ。引っ越しパーティの時に秋子さんとはまた違う、私の師匠直伝の肉まんを用意するわよ」

そう言って、真琴の頭をなでる。

「あう」

ちょっと一休みした後、新しい家に荷物を運ぶことにした。

「じゃあ、そろそろ行きますね」

「お気をつけて。何時でも帰ってきてくださいね」

「はい。あと、明日の…」

「大丈夫ですよ。料理は打ち合わせ通りですね」

「はい、よろしくお願いしますね」

秋子さんたちに別れを告げ、新しい家に向かう。

因みに名雪は昨日のうちに話してあって、今は寝ている。

新しい家に着いて、‘倉庫’から荷物を出し、アーチャーたちの協力のもと片づけ行く。

お昼ごろに片づけが終わり、買い物と昼食をとりに行く。

お昼を済ませ、冷蔵庫などの電化製品や食器から、布団などの日用品と食材を買い揃え、バーサーカー（狂化はペンダントと祐依によってしていません）に手伝ってもらって、‘倉庫’に入れる。

バーサーカーはキッチンと‘黒き月’のペンダントをつけているので、あの格好でも騒がれません。

家に帰った後、買って来たものを片付ける。

冷蔵庫などの重いものは、バーサーカーに頼み、他は私とアーチャーの指揮のもと、片付けました。

夕食前に片づけを終わらせることが出来、お隣などに、そばを渡しに行くことが出来た。

近所の人、若い人もいたが、ちよつと歳をとつた人が多く、最近じゃ珍しいと言いながらも受け取ってもらえた。

やっぱり、ご近所付き合いは大事だからね。



## 56話（後書き）

と言う訳で、短いですが、引っ越し編です。

本文中にあつた通り、この物語でのバーサーカーは日常では、狂化していません。

## 57話

side 祐依

今日は、引越しパーティが行われる。

そのために、朝からアーチャーと一緒にパーティの準備をした。

秋子さんと料理については相談済みなので、下ごしらえをして、秋子さんを待っている。

今日は、家の異常性を見せないようにしているため、家の奥には行けないようにしてあるし、一部の侵入者対策の警備を切っている。

・ピンポーン

そろそろ来るだろうとアーチャーが戻ったところに秋子さんがやって来た。

私は、キッチンから玄関に迎えに行く。

「おじゃまします」

「ようこそ、秋子さん。名雪達は？」

「まずは、準備なので、お昼ごろに来るように言っております」

「そうですか。キッチンはこちらです」

秋子さんをキッチンに案内する。

「いい家ですね」

「ありがとうございます。私が設計したんですよ。お世辞でも褒めてもらってうれしいですよ」

「いえいえ、お世辞じゃありませんよ」

「まあ、とにかく時間もありませんし、料理を始めましょう」

「そうですね。材料は…」

「下ごしらえをしたものはこちらで、他の材料は冷蔵庫で、各種調味料はあの棚です」

「わかりました。じゃあ、やりましょうか」

そうして、秋子さんと二人で料理を作り上げていき、大体できたころに名雪達に来て、手伝ってもらい、料理を運んでもらう。

時間には、全員がそろい、パーティが開かれた。

パーティでは、色々と盛り上がった。

料理や、ミニゲームでずいぶん楽しんだ。

夜に用事があると言って、三時ごろにおひらきとなり、皆は家に戻った。

私は、夜の為に残っている材料を見て、アーチャーと作るものを考え、足りないものを買いたしに行くことになった。

アーチャーに片づけと現在の材料でできる下ごしらえを頼み、私は買出しに行くことにした。

商店街で買い物していると、

「あれ、祐依さん」

「あ、香澄」

買い物をしている香澄と出会った。

「材料の買いたし？」

「ええ、香澄は？」

「私も二・三日の買い置きを買いに」

「そうなんだ、一緒に行く？ 私はもう大体、買い終わつたし」

「いいの？ じゃあ行こっか」

「ええ」

そうして、香澄と買い物をし、香澄の家に荷物を運ぶのを手伝い、別れようとしたときに、

「祐依さん、荷物のお礼に今晚の準備手伝うよ」

「いいの？ じゃあ、料理の手伝いをお願いしてもいい？」

「ええ、じゃあ、さっそく行くよ」

その後、香澄とアーチャーと準備し、昼に勝るとも劣らないものが昼よりも短時間でできた。

夜には、魔道具屋のおじいさんも招待し、紹介して、裏のメンバーで、パーティと言うよりも食事会のようだったが、無事に行われた。

## 57話（後書き）

すみません、特にパーティの描写はなしです。

作者がパーティについてあまりよくわからないからです。

今まで、パーティのようなものは、食事して騒ぐ！ぐらいのものです。

## 58話

side 祐依

武術大会の参加希望締切の月曜日になった。

「相沢先生、参加者の数がわかりました。これがリストです。以前言っていた、魔道具の準備をお願いしますね」

「はい、わかりました。校長先生、あとでいくらか報告しますね」

「ええ、では」

校長先生にリストを見せてもらうと、知った名前がいくつもあった。

私は、授業がない時間に学校の研究室で魔道具屋のおじいさんに連絡をとり、材料の注文をする。

その後、倉庫から、見本の為に材料を一つ分取り出し、錬成する。

錬成した物を職員室前の掲示板の横に見本として置いておく。

数日後の二年の戦闘学の授業で、近くの森に集合させる。

「はい、今日は武術大会の予選が今週末にあります、前々から予定していた実践形式の授業をします。森の中でバトルロワイヤル形式でやります。皆さんには今度の武術大会で使うものよりは劣りますが、皆さんなら大きな怪我はしないぐらいの効力はある魔道具を配るので、それをつけてください。それが壊された人はここに戻ってきてください。二人までならチームを組むことを許可します。では、皆さん散ってください。三分後に開始します。私も参加しますが、私は迎撃がメインです。けど私を倒した人と成績優秀者には豪華賞品がありますよ」

そうして、生徒は森の中に入っていく。

三分後、私は小さな花火を上げ、開始を合図する。

「さてと、行きますか」

森の中に入っすぐに私は木に登り、周りの様子を確認する。

近くに隠れている人がいるのを見つける。

私はpainを錬成し、狙撃銃にし、隠れている人の近くを威嚇射撃をする。

「ひっ！」

隠れていた人はその場から離れていく。

森の至る所で戦闘の音が聞こえる。



私は武器を持たず、森の中を歩いている。

「もらった」

男子生徒が奇襲を仕掛けてくる。

それを避け、ローブの袖から取り出したチヨークを魔道具にあて、魔道具を壊す。

「奇襲はいいけど、終わるまで声は出さない方がいいわよ」

「先生、なんでチヨークなんですか？」

「先生だからよ。それと、広場で他の人が戻ってきたら周りに迷惑をかけないようにして、模擬戦をやってもいいわよ」

そう言つて、生徒を広場に帰す。

その後も、何人かの生徒を撃退していく。

その中、森が騒がしくなった。

『祐依さん、森の中に以前の生き残りと思われるマモノが現れ、幾人かの生徒が襲われました。生徒は魔道具のおかげで軽傷です。今、北川君が前衛で音無さんが北川君に合わせて援護しています。僕は生徒の治療と避難をやっているので、援護にはもうしばらく、行けません』

原因を解明する、久瀬君から念話が入る。

『わかったわ。今すぐそっちに向かうわ』

念話を切り、久瀬君の魔力を辿り、転移を行う。

「みんな！大丈夫！？」

「先生！」

そこにいたのは、木が魔物化した‘トレント’がいた。

「北川君、気を付けて！そいつは普通じゃないから、あとは私に任せて下がって」

「大丈夫だって。それ！」

振り下ろしてきた腕を避け、その腕に大剣を振り下ろし、切断する。

「！」

『祐依さん、こいつは暴走しているだけで、何も普通のとは変わっていないよ』

聞かれないように香澄から念話が入る。

『そうね、異常性は見当たらないわね』

でも、私はpainを錬成し、構える。

「北川君、撃つから下がって」

「ちっ」

北川君が下がるのを確認したら、火属性の魔力が込められたガーネットの指輪から弾に魔力を込め、トレントめがけて撃つ。撃つ。撃つ。

計三発の弾丸を撃ち込み、倒す。

「北川君、今回は無事でよかったけど、こういった場合は先生たちの指示に従いなさい」

「わかりましたよ……」

「じゃあ、そろそろ時間だから戻るわよ」

「はい」

二人を促し広場に戻る。

久瀬君は他の生徒を連れ避難して先に戻っています。

「じゃあ、結果発表するわよ。私を倒した人はいませんが、向かってきた人は評価してますよ。成績優秀者はトラブルがあったけど、そのトラブルに対処した久瀬君と音無さんとちよつと問題があったけど北川君です。三人は後で、実習棟にある私の研究室に来てください。じゃあ、今日の授業はここまで。怪我をした人は治癒術をかけますので、こっちに來てください」

生徒の怪我を直し、校長先生方に今回の件を報告する。

「今回の魔物は退治しましたが、次はどうなるかわかりませんので、対策を練りたいんですが」

「そうですね。今回は軽傷だけで済んでよかったですけど、対策を練らなければなりませんね。相沢先生、それと、魔法課の先生方、この後、森に結界を張ります。その際に手伝ってください」

そうして、森に魔物よけの結界を張った。

放課後、三人を待っていると、

「失礼します」

久瀬君を先頭に三人が入ってきた。

「じゃあ、三人には豪華賞品をあげるって言ったけど、何か欲しいものある？」

「じゃあ、先生、前に先生と模擬戦やった時に先生が使ってたあの剣みたいのが欲しい」

と北川君が言った。

「そうね… わかったわ、オリジナルは無理だけど似たものを作っ

てあげるわ。明日の放課後、また来てくれる?」

「よっしゃあ!了解だぜ、先生」

そう言つて、北川君は喜びながら出ていった。

「二人は?」

「では、僕から。相沢先生、生徒会の副顧問をしてもらえませんか?副顧問がいま産休でいなくて、大変なんです」

「うーん、それは校長先生に聞かなきゃダメだから待ってくれる?」

「大丈夫ですよ。校長先生には、以前から交渉していましたから。あとは相沢先生の了承しだいですよ」

「それなら構わないけど...それでいいの?」

「ええ、相沢先生が手伝ってくれたら、今度の生徒会主催の武術大会も平気ですね」

「わかったわ。あとで、校長先生のとこへ行くわよ。久瀬生徒会長。で、香澄さんはなにかしら?」

「うーん、ちょっとすぐには思いつかないから、また今度でいい?」

「いいけど、あんまり遅くしないでね」

「はい」

「じゃあ、久瀬君行きましょうか」

「はい」

## 58話（後書き）

なんとなく北川に武器を渡して、 武術大会で気が向いたら再戦させようかなと考えてみました。

武術大会の組み合わせはクジで決めるつもりなので、 もしかしたら再戦は無いかもしれません。

## 59話

side 祐依

あの後、久瀬君と共に校長先生のもとに行き、生徒会の副顧問になるということ告げ、受諾され、正式な生徒会副顧問となりました。

それは、掲示板に掲示され、学校内で騒ぎになりました。

どうやら、私に他の顧問を頼みたかった生徒が多数いたらしく、どうやって声をかけるか悩んでいるうちにこうして決まったからだそうです。

この情報は、北川君や名雪達からの情報です。

授業後に約束通りに北川君にillustrationのコピーを作り、あげました。

そして、使い方の簡単な説明し終えたと

「よっしゃーこれで、武術大会を勝ち抜いてやる」

そう叫びながら、部屋を出ていく北川君。

一番大事なことが説明できなかったが、最後まで聞かなかった北川君のせいにし、諦める。

注文していた品が魔道具屋に届いたと、連絡をもらい、帰りに寄っ



て、注文した品物を買ひ、家の実験室で錬成し、納品できるようにした。

次の日に、‘スケープゴート’を頼まれた数プラス、決勝の延長用の予備を含めた予備数個を納品して、費用を請求した。

武術大会の予選を明日に控えた金曜日は出場者が今年が多いため、午後の授業はなしになり、訓練場などが解放され、各自自由になった。

私は、研究室で参加しない錬金術師志望の生徒たちに実験を見せたり、質問を答えたりしていた。

放課後、私は、生徒会の役員たちや先生方と明日の予選のための会場設営をしていた。

本選は、次の日の日曜日にやるので、そちらはキッチンとした観客席がついた武術場でやるため、そちらの会場準備も並行して行われた。

会場準備などが全て終わり、帰宅途中に香澄から念話がいった。

『あ、祐依さん。これから、祐依さん家に行ってもいい？前言つてたお願いもあるんだけど』

『いいわよ。私は明日は予選に関係ないし』

『じゃあ、今から行きます』

念話がきれ、私は急いで家に戻る。

家で待っていると、

・ピンポーン

香澄が以前私があげた底なしトランク（私の倉庫みたいなもの）  
を持ってやって来た。

リビングに通し、話を聞く。

「どうしたの？トランクなんかもって。それに服も汚れてるし、何かあったの？」

「んゝ、先にお願ひ言ってもいい？」

「いいけど…」

「じゃあ、この家の部屋を一つ貸してください」

そう言つて、頭を下げる香澄。

「えゝと、理由を聞いてもいい？」

「それが、私が住んでたアパートが、他の住人が火事を起こしちゃって、燃えちゃったみたいなの。」

今日家に帰ったら、火災現場後になってて、大家さんにそう聞いたの。私の荷物も、この祐依さん特製トランク以外、家具とか大きいものは全滅しちゃったの。服とかそういった日常品とかは丁度、部屋の様様替えをしようと思って、家具を軽くしようと思って祐依さんがくれたこのトランクに全部入れてたから、無事だけど…そんなわけで、住む家がないから、部屋を貸してください」

もう一度頭を下げ、頼み込む香澄。

「そんな事情なら仕方ないわね。従姉妹だし、何かと世話になったこともあるし、いいわよ。好きに使ってちょうだい」

「ありがとう」

泣きながら、頭を下げる香澄。

「とりあえず、お風呂に入ってきて、汚れを落としてきなさい。その間に夕ご飯の準備をしておくから。その様子だとまだ食べてないでしょ」

「まあね…帰ってから、ずっとこのトランクを探してたから、何も食べてないのよ。ありがとう」

そう言っつて、香澄は着替えを持ち、お風呂場へ行く。

「じゃあ、アーチャー、張り切ってやるわよ」

「了解だ、マスター」

アーチャーと共に、歓迎の食事を作り風呂上がりの香澄と共にいた  
だく。

「じゃあ、香澄はこの部屋を使ってもらえる？私の部屋はこの隣よ」

「うん、いいよ。じゃあ、これからしばらくお願いします」

「構わないわよ。困ったときはお互い様よ。香澄も明日出るんでし  
よ？ゆっくり休んで、がんばってね」

「ええ、本選でね。じゃあお休み」

「お休み」

## 59話（後書き）

オリキャラの登場を増やしたくてと、祐依の家に住人を増やしたい  
と思ってこんな話を作ってしまった。

祐依特製のトランクは様々な魔術的処置などが施され、中が祐依の  
倉庫ほどではないが、大量にものが入る。そして、衝撃や火、水そ  
の他諸々にも負けない頑丈な一品となっています。

因みに家には、仲間も自由に実体化したりして、生活しています。

## 60話

side 祐依

今日は、武術大会の予選。

昨日から家に居候している香澄が出るので、私は先生という立場を利用して、見に行くことにした。

朝食を食べ、準備をして香澄と一緒に学校に行く。

「どう？今日の調子は？」

「うん、調子はいいよ、けど昨日のことが無ければ完璧だったかな？」

「まあ、頑張つて。見てるわよ」

「応援してくれないの？」

「ん、先生だから個人の応援は控えるわ」

「そっか。じゃあ、そろそろ行くね」

「ええ、がんばってね」

「え、さっきと言ってること違うよ」

「ん、今は定型文？　そろそろ、受付が始まるわよ」

「じゃあ、行ってくるわ」

香澄と別れ、私は予選が行われる会場の本部にいと、

「相沢先生、いいところに。一般の方向けに、本選出場者の特徴を載せたパンフレットを作りたいので、報道部を手伝ってくれませんか？」

「校長先生。構いませんが、誰が予選を抜けるのかわかるんですか？」

「いいえ、わかりませんよ。ですから、予選を全て見ながら先生の目に着いた選手の特徴などを挙げてください。言ってもらえれば、報道部の子たちがすべてまとめますので」

「わかりました。では、報道部の子たちを紹介してもらえますか」

「ええ」

と言って、どこからともなくマイクを取り出し、

『え、報道部の皆さん、至急本部前に集合してください』

「校長先生って、生徒たちに人気ありますね」

「そうですね、毎日誰かが校長室に遊びに来ますよ」

「それは、生徒との仲がいいで済ませていいんですかね？」

「信頼が無いよりいいでしょう。おっ、集まってきましたよ」

「校長先生、報道部全員集合しました」

「ご苦労様、部長さん、以前言っていた件ですが、許可が貰えたので、予選中は相沢先生の邪魔をしないように数人交代でついでいてください」

「わかりました。じゃあ、今から参加者を除くメンバーで組みを決める」

そうして、予選会中の私の行動は決まった。

開会式で、新ルールの説明を改めてさせられたが、特に問題なく行われた。

予選は七組に分かれて、その勝者が本選に出場できるそうだ。

私はいま、舞台が見わたせるように即席で作ったちょっと高めの台の上にいる。



以下ダイジェスト 私の眩き。

・一組目

あゝ、あの三年の川澄さんが剣技だけで、周りを圧倒してるわね。これは、川澄さんじゃないかしら？ え？前回の優勝者なの？

・二組目

おっ、一年の沢渡さんが乱戦の中にまぎれて、近距離の攻撃で続々と倒してるわね。

・三組目

んゝ、あの双剣で戦ってる三年の彼、えっ？河合君っていうの？彼、周りも見えてるし、行けるんじゃない？

・四組目

そうねゝ、あ、二年の斉藤君が上手く雷属性の魔力を剣に使って、倒してるわね。

・五組目

これまた二年の北川君が大剣の利を生かしてるわね。それにあの剣も使ってるし。

・六組目

あの、槍を使ってる三年の彼女、え？双海さんっていうの？獲物のリーチを活かしてきれいにたたかってるわね。

・七組目

最後も二年生ね、音無さん、はじめは剣で戦ってたけど、途中から破れた生徒に借りてるのかしら？武器を変えて戦ってるわね。

「相沢先生、今日はありがとうございました。これから、先生の眩きを基にパンフレットを作ります」

「参考になったか、わからないけど……」

「いえ、先生の挙げた選手は全て、予選を通過していますし、大丈夫ですよ」

「そう、なら、よかったわ」

報道部の生徒たちは、走って行つた。  
明日に間に合わせるのは、大変そうね。

！　　そう言えば、私の事はなんて書くのかしら？

「相沢先生、ご苦労様です」

「あら、久瀬君。久瀬君は参加しなかったの？」

「ええ、生徒会主催なので、色々と仕事があつたので、そちらに専念していましたから」

「久瀬君なら結構いけると思うのに」

「いえいえ、そんなことはありませんよ。では、明日の準備に行きましようか」

「え？　私？」

「そうですよ。生徒会の副顧問になつたんですから」

そうして、生徒会に連れて行かれ、準備を手伝わさせられた。

## 60話（後書き）

四月から、忙しくなるので、今のうちに行けるとこまで、行きたい  
と思います。

## 61話（前書き）

今回から、武術大会編です。

## 61話

side 祐依

あゝ昨日は大変だったわ。

予選会の後に今日の準備をさせられた後にさらに、報道部の子たちに捕まり、パンフレットの作成に参加させられるわ。

帰って、アーチャーの美味しいご飯が無かったら、ダメだったわ。

で、開会式の前に抽選が行われた。

結果は、

第一試合 川澄舞VS斉藤一真

第二試合 河合佳樹VS音無香澄

第三試合 北川潤VS沢渡真琴

第四試合 双海あかりVS相沢祐依

となった。

開会式が行われ、今第一試合が始まる。

私は何故か報道部の実況の横に解説として座っている。

「さあ、第一試合の前回優勝者の川澄舞選手VS斉藤一真選手の試合が始まります。実況は私報道部副部長の田中と解説は」

「どうも、相沢祐依です。私の試合以外はよろしくお願いします」

「さあ、第一試合が始まりました。先制は斉藤選手だ。剣を袈裟斬りに振り下ろす。川澄選手は剣で受け止める。おおっと、川澄選手の動きが一瞬止まり、その隙を逃さず斉藤選手の蹴りを当て、間合いが開きました。今、川澄選手、不自然に止まりませんでしたか？」

「それは、斉藤選手は剣に雷属性の魔力を纏わせて帯電しているので、剣がぶつかりあった時に剣を通して、電気を浴びたため、一瞬怯んだのでしょうか」

「そうですか。おおっと、川澄選手は斉藤選手の追撃を全て躲けている。これは、先ほどのを避けるためですかね？」

「そうですね、電気は一瞬の体の硬直に繋がるため、剣で打ち合うのは避けるべきですから」

「では、川澄選手は防戦しかありませんか？」

「いえ、すぐに思いつくのは、術での遠距離攻撃ですが、川澄選手は今まで見せていませんから、今私が考えられるのは、防ぐことのできない一撃で仕留めるしかありませんね」

「そうですか。おっと、斉藤選手の攻撃が鈍くなってきましたか？」

「でしょうね。剣に常に魔力を纏わせるのは、結構な疲労になりますから」

「！ 決まったー！ 斉藤選手の一瞬の隙をつき、一閃！ 斉藤選手が吹っ飛んだー！ 審判のカウントが入ります。・・・ナイン、テン！ 決まったー！ 川澄選手の逆転勝利だー！」

「今のは素晴らしい一撃でしたね。あれを避けるのは難しいでしょう。さすがは、前回大会優勝者ですね」

「そうですね。さあ、お次は第二試合の河合佳樹選手VS音無香澄選手の入場だー！」

「さあ、今回は音無選手は河合選手に合わせてか、双剣です。」

「予選では様々な武器を使っていたが、双剣を普段から使っている河合選手についていけますかね？」

「さあ、第二試合が始まります。開始直後両者が突っ込んだ！ 両者の激しい打ち合いだー！」

「体格が勝っている河合選手のほうが力がありますね。それに対し、音無選手は速さで勝負ですか」

「手数は音無選手が勝っているが、河合選手の一撃がそれらをねじ伏せる。おっと、音無選手が一撃に耐えられず後ろに飛ばされる」



「いえ、何か呟いているように見えます。おそらく、間合いを空けるために河合選手の攻撃を利用したんでしょう」

「音無選手、水属性の中級呪文の〈スプラッシュ〉だー！あの一瞬で詠唱したのかー？」

「おそらくあのつけている指輪は補助のものでしょうか」

「河合選手、不意を突かれ、上からの水を諸にくらったー！大丈夫か？　っと、立った。立ち上がりました。が、審判が試合を止めました。どうやら、ここまでのようです」

「あの一撃で、スケープゴート’が壊れたみたいです。無警戒の上からの一撃でしたから」

「これで、音無選手の準決勝出場決定だー！」

「さあ、第三試合の北川潤選手VS沢渡真琴選手の試合です」

「北川選手は、大剣の特有の強力な一撃がありますが、沢渡選手は小柄な体格を活かし、徒手空拳での素早い動きで攻撃を仕掛けます」

「では、沢渡選手の方が有利ですか？」

「いえ、あの体格ですから、一撃でもまともにくらったら危険でしょう。それに、北川選手のあの大剣には能力があるので」

「能力とは一体？」

「それは、見ていればわかると思います」

「お、どうやら始まるようです。開始直後、沢渡選手、スピードを活かし突っ込んだ。そして、乱打だ！北川選手、攻撃を仕掛けるが、大剣のため大振りになって、当たらない。たまらず、距離をとる。沢渡選手は、呼吸を整えるためか、追撃はしない」

「あっ」

「どうしました？」

「北川選手がああ剣の能力を使うみたいです」

「確かに、大剣にルーンが浮かんでいましたが一体……！！おおっと、北川選手が二人に増えた！」

「これが、あの剣の能力、ルーンを見たものに幻影を見せる」

「二人同時の攻撃だ！沢渡選手、避けるのに精一杯だ！つとあゝ、沢渡選手に本物の一撃が炸裂！吹っ飛んだー！！・・・ナイン、テン！決まったー！北川選手、準決勝進出だー！」

「じゃあ、次は私の番だから。校長先生を解説に呼んだから」

そうして、私は準備をする。

控室で、d e m i s eを錬成しw r a t h（槍）にする。

『さあ、第四試合双海あかり選手VS相沢祐依選手の始まりです』

「じゃあ、よろしくね」

「はい、こちらこそ」

「どうぞ、かかってきなさい」

「・行きます！」

槍での刺突を横に避け、槍に刺突を当て、弾く。

「甘いわよ」

懐に入り込み、石突で鳩尾に叩き込み、終わらせる。

「審判、カウントを」

『相沢選手の圧勝！現役国家錬金術師の名は伊達じゃない！相沢選手、準決勝進出だ！』

準決勝第一試合 川澄舞VS音無香澄

準決勝第二試合 北川潤 V S 相沢祐依

## 61話（後書き）

武器紹介

・w r a t h - 槍

## 62話（前書き）

若干北川アンチがあります。

## 62話

side 祐依

あの後、双海さんを治療し、また、実況席に戻ってきた。

「いや、先ほどの試合はお見事でした」

「ありがとうございます。そろそろ、試合が始まりますね」

「そうですね、準決勝第一試合川澄舞選手VS音無香澄選手です」

「音無選手、今度は刀を持って、登場だ！今度はどう思います？」

「うーん、そうですね、川澄選手は、基本両手で剣を振るうので、片手で振るう双剣よりは良いとおもいます。ですが、刀の方が切れ味がいい反面、剣よりも強度に若干不安があるんですよ」

「では、そこが、ポイントだと？」

「ええ、ポイントの一つだと思います」

「さあ、試合が始まりました。音無選手、抜刀の構え！それに対し川澄選手は若干攻めにくそうだ」

「ええそうですね、抜刀術は鞘走りを利用し、高速の一撃を放ちま

すからぬ。その反面、外した場合、無防備になってしまいますが、音無選手はあえて、その選択をしましたね」

「勝負は一瞬と？」

「ええ、そうですね」

「川澄選手が仕掛けた！ 音無選手、抜刀！ 川澄選手抜刀した刀に剣をぶつけ、振りぬいたー！」

「キン！」

「あー！ 音無選手の刀が折れたー！」

「川澄選手は武器破壊を狙ったのですかね？ それにしても、抜刀に剣を当てるなんて、技術も然ることながら、胆力がすごいですね。外せば、死ですよ」

「いや、今の勝負は一瞬でしたけど、素晴らしいものでしたね」

「そうですね、では、そろそろ行きますね」

私は次の試合では、周りを驚かそうと色々企んでいた。

「はじめは、無手でいいか」



私は、舞台にあがる。

『それでは、準決勝第二試合北川潤選手VS相沢祐依選手です』  
試合が始まる。

「へっ！先生も素手かよ」

「いいえ、武器はこれよ」

そう言つて、p a i nを錬成し狙撃銃にする。

「なっ！銃かよ！？」

「行くわよ！」

私は、銃で殴りつける。

『おおーと、相沢選手、銃を撃つのではなく、殴りかかったー！北川選手、驚きからか直撃をもらったー！』

「先生、そんなんありかよ？！」

「何言つてるのよ。世の中には銃剣術つてのがあるのよ。思い込みはダメよ」

「ち、なら今度はこっちから行くぜ！」

あくまで、銃であること、忘れてないかしら…

私はあえて撃たず、振り下ろしを受ける。

『北川選手の強烈な一撃で相沢選手の武器が破損!』

p a i nの強度を脆くし、壊させる。

「もつらた!」

チャンスとみて追撃を仕掛けてくる。

私はローブの袖に手を入れ、‘倉庫’からチョークを取り出し、投擲する。

「あだつ?今度は何だ? チョーク?」

「ええそうよ、教師だからやってみたくて」

「くそっ!こうなったら」

i l l u s i o nを構え、能力を発動させる。

『おおーと、北川選手がまた二人に増えた!』

二人同時に切りかかってくるが、

『相沢選手、完璧に避けている』

攻撃を避けつつ、再びチョークを投擲。

「あだっ　なんでわかったよ?!」

「それは、あなたが剣を使いこなせてないからよ」

「どういつこった」

「わからないなら、その剣に先がないわね」

demiseを錬成し、illusionにし、構える。

『相沢選手、北川選手と似たような大剣を構えた!』

illusionを‘発動’させる。

「な、なんだこれは!?!」

周りが荒野になる。

「これが、illusionの力よ」

私が三人現れ、切りかかる。

「へ、結局幻影だろ」

三人の攻撃が‘当たる’。

「グッ、なんなんだよ?」

「これで終わりよ」

背後に回り込んでいた私は、illusionをdemiseに変え抜刀の構えから一気に振りぬく。

「葬刃！」

demiseが北川のillusionを両断。

そして、‘スケープゴート’を両断する。

『決まったー！相沢選手、決勝進出！』

控室に戻ると、北川が乗り込んできた。

「先生、どういうことだよ！？」

「あなたは、illusionのほんの初めの能力しか使わず、それも、満足に使いこなせていない。私の説明も最後まで聞かず、そのうえ、剣の声も聞かない」

「剣がしゃべるのかよ?!」

「ええ、そうよ。実際にしゃべるわけじゃないけど、剣が信頼すれば、教えてくれたはずよ。それなのに、あの剣はもう死んでいた。だから、破壊したのよ」

「そんなわけないだろ」

「いえ、私が一日待ってもらったのは、剣にそれを組み込むためだったのよ。もう一度、普通の剣でやり直しなさい」

「…」

北川を置いて控室を出る。

## 62話（後書き）

過ぎた力を持った者の運命さだめです。

北川ファンの皆さん、ごめんなさい。

## 63話（前書き）

あとがきで発表があります。

## 63話

side 祐依

お昼休憩をはさみ、さあ、いよいよ決勝戦。

『皆様、大変長らくお待たせしました。これより、決勝戦全大会優勝者川澄舞VS新任教師兼国家錬金術師相沢祐依の試合を開始いたします』

舞台上がり、開始の合図を待つ。

「舞さん、答えは見つかった？」

「ぼんぽこタヌキさん、でも、今日は先生に二人で勝つ」

「そう、一緒にやるのね。それも、正解の一つかもしれないわね。いいわ、全力で来なさい」

「はちみつクマさん」

審判の合図と共に、仕掛けてくる。

demiseを手にも、打ち合う。

「ふっ」



横薙ぎをかがんで避け、下から仕掛けようとしたその時、

「！」

咄嗟に回避行動をとる。

「ズガン」

私がいた場所に舞さんではない攻撃がきた。

土煙が晴れると、小さい舞さん略して、ちびまいがいた。

「今のオーバーキルじゃない？」

「当たってないから大丈夫。いくよ」

「くっ」

二人の波状攻撃に苦戦し、一撃を貰う。

間合いが開いた。

「二人じゃ無理ね。一人ずつ倒す」

「…来い」

ちびまいに向かって、

「封神雀華、葬刃」

流れるように斬り、鞘に納刀し、打ち、突く。そうして、抜刀。

『きゃあ!』

「! 戻って」

ちびまいが舞に戻る。

「これで一對一ね」

「勝負はまだまだ」

そうして、再び打ち合うこと十数回。

「はっ!」

「くっ」

渾身の切り上げの一撃で、宙に浮かす。

d e m i s s e を離し、

「三散華、飛燕連脚、天崩流」

三回連続で回し蹴り叩き込み、ジャンプし、三連続で回し蹴りを叩き込み、相手の後ろに素早く回り込み、闘気を放ち、吹き飛ばす。

『おおーと、相沢選手の強烈な連撃！川澄選手は大丈夫か？』

私は、背を向ける。

『審判が入ってきて確認をしている。おおー！川澄選手、スケープゴートは破壊され、気絶のようだ！』

私は拳を高く挙げる。

『相沢選手の優勝だー！！！！』

場内割れんばかりの大歓声が上がる。

舞さんに近寄り、治癒術をかけ治す。

「大丈夫？」

「…はちみつクマさん。全力でやったけど敵わなかった」

「でも、舞さんも相当のものよ。私は経験が多いから。舞さんも経験を積んで、ちびまいとも連携をとれるようになれば、そう簡単に負けないようになるわよ」

その後、表彰式が行われた。

三位決定戦は、北川君が棄権し、香澄が三位になった。

北川君は、もう一度考え直すそうだ。

それが出来たら、今度は私が作ったオリジナルの剣を渡すことを約束した。

その後、色々あったが、無事に終わり、また、明日からの生活を過ごしていく。

### 63話（後書き）

今回でキセキの錬金術師を完結にしたいと思います。

無理やり、打ち切ったつばいですが、

理由は、以前に考えていたネタが書かれたネタ帳を大掃除の際に失くしてしまい、この先の展開を憶えていないという情けない理由です。

ネタ帳の発見もしくは、新たなネタを考えたら、続編を書きます。

祐依の異世界へ行く話を以前からちよいちよいやりたいと思いましたが、これを機に色々やってみたいと思います。

もし、これを読んで、感想やこうした方が良いなど改善点などがありましたら、次回作に活かしていきたいと思うので、ぜひ、感想や、ご指摘をください。

今まで、この駄文を読んで頂き、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8645p/>

---

キセキの錬金術師

2011年7月14日05時59分発行